†続†城はきらびやかな牢獄だ―それぞれの異世界―

月葉りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†続†城はきらびやかな牢獄だ―それぞれの異世界―

【Ｎコード】
Ｎ７８８０Ｌ

【作者名】
月葉りんご

【あらすじ】
前作の続編となりますが、今回は大分違います。
主人公は現代に生きる宮部藍人という二十歳の大学生。
見た目は冴えなくはありません。
むしろカッコイイし結構モテるのですがこの主人公の藍人、実は隠れオタクでございます。
ひょんなことから主人公の元にやってきたコスプレ少女（！？）葉（は）月翡翠（づきひすい）が人探しを手伝って欲しいと舞いこんでまいります。しかも、その翡翠――どうやら人間ではありません。

翡翠は言いました。
「お前にとって私の世界が異世界だろうと、私にとってはこの世界が異世界だ」と――。

そして、深く事情を語らない翡翠。
藍人は意味がわからないと思いつつも、どこか放っておけないその少女には協力しようと致しますが、はたまたどうなっていくのでしょうか。

前作終わってその世界に関係するストーリーとなっておりますが、知らなくてもわかるように一応作って行こうとは思っておりますが多分、一応前作を読んだ方がわかると思います。
スピンオフって言うんでしたっけ。こういうの。ただ、少し話の系統が違いますね。
とりあえず非公開で頑張って執筆を開始しておりました。

少しだけ物哀しさとか漂うと思われます。
全ては翡翠しか知らないということ。
知りながら何も言わずに過ごす、その大切な人たちとの思い出と時間のかけらたち……。
時折涙を見せるその理由とは――。

前作より文字数控えめにしておりますw

勝手にテーマ曲（笑）
「ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ４３６２９９３」。

プロローグ（前書き）

＞i７７８３―１０４９＜
→
続編表紙をボールペンで相変わらず一応載せました。
色とか出来ませんので、雰囲気だけのおまけということで
お許しください……（泣）

プロローグ

ここは――東京都秋葉原。
季節は残暑がしつこく続き、ぎらつく太陽の日差しは黒いTシャツが吸収して体温を高め、またそれは人混みによる熱気がよりそれを増幅させていた。
「……暑い……」
俺はそう呟きながらも人混みを行く。
ざわざわとした人混みの中――乱雑に立ち並ぶ電器店、オタク気質たっぷりのアニメグッズ店、メイド喫茶、ゲームショップ……。
街行く人の中には外国人も多数。
俺は別にオタクではない。むしろそんなことは想像も出来ないだろう。
――俗に言う、『隠れオタク』というヤツだ。

大きな通り沿いに、ビラを配るメイドの衣装を着た可愛い女の子が立っている。
「――よろしくおねがいしまぁす」
とそう言って渡して来たビラには『メイド喫茶　どるちぇっしも』と書かれていた。
貰って通り過ぎたはいいものの、自分より少し年下くらいで黒くまっすぐ伸びた髪とミニスカートのメイドの衣装を身に纏ったその可愛らしい女の子を俺はつい振り返って見てしまう。
ところがその女の子もこちらを見て優しく微笑んだ。
ドキッ……とした。
やっぱりあの子可愛い……とそう思った。
そしてこの熱気の湧き上がる地球から逃げ出したいくらいでさえあった俺は、そのビラの隅にある地図を頼りにそのメイド喫茶へと行ってみることにした。

交差点を渡って路地に入っていく。より一層ごみごみとしてくるこの路地裏こそが、秋葉原の主体。
駅に着いた時にはその綺麗さに誰もが意外とオタクの街のわりに綺麗じゃないかと思うだろうが、そこじゃないんだ、そこじゃ。と俺は得意気にこちら側にいつも足を進めるのだ。

「おかえりなさいませ、ご主人様っ」

にっこりと微笑む猫耳をつけたメイドの女の子。
しかし、それは俺に微笑んだのではない。
この店はオープンして間もないらしいが、話題にもなっていたようだ。
すごい人の列が立ち並び、俺は遠目からそれを見てため息を吐いた。
並んでいる人にメイドがＣＤ－ＲＯＭのようなものを渡している。
オープン記念のご来店特典らしい。
列に並んでいるだけで配っているそれをちゃっかり貰っておいて何だが、さすがにこの列に並び続けるのはつらい――。
誰もがそう思っていたのか列から抜けて帰る人もちらほらと見られ、俺もそうさせて貰うことにした。

俺はその日、結局『ドルート』というチェーン店の喫茶店に入り涼んだ後パソコン周辺機器を買ってマンションへと帰って来た――。
そういえばあのビラを配っていた黒髪のメイドの女の子可愛かったなぁ――と俺はふと思い出し、鞄からＣＤ－ＲＯＭを出した。
“メイド喫茶☆どるちぇっしも”と書かれたＣＤ－ＲＯＭ。
並んだ客一人一人にこんなものを配ってオープン記念だからって

経営大丈夫か……なんて余計な心配もしつつ、俺はＣＤ－ＲＯＭをパソコンで再生した。
すると突然の文字――。

『なまえをいれてねっ』

［一　　］

画面にはこのように表示され、俺は名前を入力した。

［宮部　藍人一　　］
と――。

『ふりがなをいれてねっ』

［みやべ　あいと一　　］
と――。

その次に年齢、職業のほかに何故か簡単な質問がいくつか続いた。

［２０歳一　　］
［大学生一　　］

「面倒くさいなぁ……何々？　異世界に興味はありますか？」
何でこんなことを聞かれるのかさっぱり意味はわからなかった。
興味がないと言えば嘘になる。
面白そうだが漫画やゲームのようなそんなことは現実に起こりえ

ない。

なんだこれ……。メイド喫茶とこの質問、全然結びつかない――。

『はい』を選択してクリックしてみたが心理テストのような質問がさらにいくつか続き、そしてそれはオンラインで集計がされるらしく読み込み時間が少々長かった。

俺はだんだんとこの“ＣＤ－ＲＯＭの目的は一体何なんだ？”と問いたくなった。

そして八個目の質問に答えた時、モニター画面には『ありがとうございました。結果をお楽しみに』という文字が表示された。

「はぁ？　意味がわかんねぇ……ただのアンケートか？　結果って何のことだ？」

考えても仕方がない。

そう思ってＣＤ－ＲＯＭをパソコンから出してケースにしまった。

そして俺ははっきり言って無駄な時間を過ごしたことを後悔した気になり、ＣＤ－ＲＯＭをゴミ箱に放り投げた――。

しかしこの一枚のＣＤ－ＲＯＭが、俺にとんでもない出来事をやって来させたとは……。

この時の俺はまだ知らなかったのだった――。

――……

――……

プロローグ終わり。

1　コスプレ少女

起きて――……

起きろってば……っ

ねぇってば！　起きろーーーっっ！！

――……

――――……

「！」

俺はがばっとベッドから起き上がった。

しんと静まり返った自分の部屋。

声が聞こえた気がしたが、気のせいだったようだ。

洋室八畳と六畳の１ＬＤＫの部屋の中、ベッドを置いている六畳の方。

テレビからは僅かな音量で音が鳴り、暗闇をちかちかと点滅して照らす明かり――。

俺は枕もとのリモコンでテレビを消した。しかし、それでもまだそこに暗闇はやって来ない。

「あぁ、パソコンつけっぱなしだったか……」

いつも俺はパソコンをの電源を落として寝ていたのだ。

俺はため息を吐いてゆっくりと起き上がり、机の上のパソコンモニターの前に向かって立った。

――あれ！？

驚愕して見たそのパソコンモニター。

『おはよ』

の文字――。

どういうことだと目を凝らしていると画面が突然真っ暗になる。

シャットダウンしていないというのに勝手に暗くなったそのモニターは、処理音が鳴っていたがプシュンと音を立てて電源が落ちた。

「あ……れ？」

おかしいなと思ったがまぁいいか……と、くるっとモニターから背を向けた瞬間だった――。

「――やーっと起きたか」

え……。

俺はしばらく固まった。

女の子がそこに立っていた。

それも、コスプレなのだろうか……まるで剣士の様な蒼いロングスカートにスリットが入り動きやすくした様な服と、長く真っ直ぐに伸びた黒髪――。青みがかった黒の瞳――。そして、何やら本物ではないだろうが綺麗な薄い金色の様で白い天使の羽根の様な翼が見える。

「……」

そ、それに、かっ可愛いじゃないか――。

昼間、ビラを配っていたメイド喫茶の女の子にその女の子はよく似ていた――。

そこで有り得ない妄想もしてしまうものが男の性というものなのか……。

こ、こんな時間に勝手に男の部屋に上がりこんじゃうなんて、それなりの覚悟があって来たのかな？

いやまて、深夜のありがちな妄想をするより前に、何故見ず知らずの女の子が勝手にこの俺の部屋にいるッ！？

……し、しかもコスプレをしてまで……。キチガイというヤツだろうか……それとも夢遊病とか、それとも夜這いが趣味の――なんてやはり有り得なくもよからぬ妄想に走ってしまっていた時だった。

「ちょっとぉ、何ぼーっとしてるんだ？」

少し不機嫌そうに覗き込むその顔が自分のすぐ目の前にあることを知った瞬間に、俺は驚いて後ずさった。

後ずさったはいいが俺は女の子の顔がこの世のものとは思えない程綺麗な顔立ちで、ついドキっとして照れてしまったこともあった。

ごくっと息を呑んでから俺は言った。

「だっ、誰なんだっっ……？」

そう言った俺に、女の子は勝気に微笑んで俺の目の前まですたすたと歩いてきて静かに言った。

「――私、葉月（はづき）　翡翠（ひすい）。あっちの名前は別にあるんだが、それはまだ言えない」

「はぁ？　あっちの名前ぇ？」

こいつ、頭大丈夫か？　やっぱり何かキチガイ臭がぷんぷんとする。

「そう――。お前に話があって来た」

……。

やっぱりそう来たか……。

よし、寝よう――。

俺はそう思って布団に入った。

「な、何無視してるんだこの隠れオタクがっっ！！　この私がどれだけ探したと思っているんだ！！」

翡翠という名らしきコスプレ少女は、まぁ想像はしていたがどうやら怒っている様だ。
しかも、隠れオタクと何故バレた――。俺は少しだけひやっとした。
「大体このポスターなんだ？　いかにも美少女好きのオタクって感じだなぁ。あーやだやだ。外見は悪くないのに隠れオタクこそがむっつりとかそういう部類だと思う」
「――うるさい。大体人の趣味をとやかく言われる覚えは無いし、人のうちに勝手に上がりこんで怒鳴られる筋合いはない。頭、おかしいんじゃないのか？　病院ならすぐそこに長谷川救急病院があるから診て貰え」
俺はつい売り言葉に買い言葉で、後ろを向いたまま言っていた。
翡翠はその言葉に物凄く怒ったらしくわめいていたが、しまいには『それでも男かっ』だとか『貴様っっ』、『人の話を聞けッッ！』だとか言い始めた。
翡翠の外見はすっごく可愛いしタイプなのに、この性格――。
しかし、まぁ逆を言えばこんな性格だが容姿はずばぬけて美少女だ。
二次元をこよなく愛していた俺でさえ、はっとするほどの……。
なんてのん気なことを考えている場合ではない……。
冷静に考えよう――。不法侵入だぞ？　それに一体、俺が何をしたっていうんだ……。
大体、何故こんな美少女でちょっと頭の痛いヤツが俺を探しに来る必要があるんだ。
不法侵入にコスプレをしてまで……。意味がわかるヤツいたら教えてくれ……。
このまま部屋に翡翠をあげたまま眠れる筈もなく、俺はベッドから言い様のない言葉の代わりにため息を吐いて振り返ろうとした。
――しかし、すぐに俺はその動きを制止した――。
片方の口元が引きつった。

言葉も出ない驚愕の現象が起きていた。
なぜなら――。
視線を移動させた真上――。
翡翠は飾りと思われていた羽根をゆっくりと動かしながら、宙にふわふわと浮いていたのである――。

しばしの間の後――。
俺は言った。

「……ど……どうなっているんだぁぁぁっっ！！！」

――――……

――……

つづく。

2　葉月翡翠

「ど、どこだっ……？　ここ」
「私の部屋だ」
「！？」
翡翠に連れて来られてやって来たどこかの部屋。
そこは全体的に白が基調の広い部屋で――。何故かわからないが怖いほどにしーんと静まり返っている。
――とその前に、どこから説明すればいいのだろうか。
まず、翡翠は変な魔法を使って頭上に白い魔法陣の様な物を出した。
白い光の玉が連なって魔法陣に吸い込まれたかと思うと、粉々に砕け散るように視界を光の砂が舞うように覆った。
きつく目を閉じて翡翠の腕に掴まっていた俺は、ここに移動していたのだった。
白が基調のこの部屋には差し色に赤や黒も取り入れられていて、調和が取れてまとまっているのだが、その部屋はとても一人のものとは思えないほどとにかく広い――。ざっと四十畳以上はありそうだ。
天蓋つきのベッドには枕が二つあって、俺は少しだけよからぬ事を考えた。
いやしかし、このわけのわからない場所で考えるべきことではないとすぐにその思考を消し去った。
高級感溢れる家具の数々に、この広さ――。
……うーん。翡翠ってものすごいお嬢様……？
俺はそう思考していた。
「とりあえず落ち着け――」
少々面倒くさそうに翡翠が俺をピンクのラグの引いてある部屋の

中央のソファーに座らせた。
お、落ち着けと言われても――。
俺は翡翠の呆れたような視線にぎこちない微笑みを返すと、しばらく頭を悩ませていた。
多分俺より少し年下だろうと思うのにこの偉そうな態度……ソファーにごろんと横になって「疲れた」とか言ってため息を吐かれても……。何か説明をしてくれないと、困るんだけどなぁ。
ただ、何も言わずにただ連れて来られただけというこの状況を――。
早くなんとかしてくれという思いで俺は口を開いた。
「あ、あの……ヒスイだっけ？　変わった名前だなぁ」
そう投げかけた質問に翡翠は俺を見て、呆れた様に微笑んだ。
「――そう。お前は確か宮部藍人とか言ったな」
「は、はぁ――なんで名前知ってるんだっ！？」
「ＣＤ－ＲＯＭとやらに名前入力しただろう」
ＣＤ－ＲＯＭとは、あのメイド喫茶どるちぇっしもに並んだ時に配られたあのＣＤ－ＲＯＭのことだろう。
「……要するに、ここはお前からすれば異世界に当たる――。私にとってはあっちが異世界――。そして、『葉月翡翠』というのも仮名だ。人探しをしていた――。人探しにちょうどいいのでオープンしたてのメイド喫茶とやらに一日だけバイトして、お前を見つけた。お前以外にも探さなきゃいけない者はいるがな……」
「は？　ていうかさっきから俺、『は？』とか『はぁ』としか言えないケド……意味がさっぱりわからない」
その俺の言葉はどうやら翡翠を苛々とさせたらしい。
「もう少し頭が切れると思ったんだが……まぁいいか」
翡翠はそう言って、ふわりと宙に浮き上がってため息を吐いた。
「――お前、バルコニーまでついて来い」
翡翠が進む方向について行くと、バルコニーの扉を開け放って見える景色に俺は驚愕した。

――な、何だここ！？
ていうか、この屋敷――高さが半端ない！
「こ、ここここ、ここ外国！？　何だこの緑溢れるこの素晴らしい風景はっっ」
俺は思わず舌を噛みながら言った。
「だから、異世界だと言っただろう。ここはとある城だ――そして私の……部屋――」
「えぇぇぇっっ！　し、城って何で！？　と、突然そんなこと言われても全く意味がわからないぞ」
そう言った俺に対し翡翠は、はぁ、とため息を吐いた。
そして目の前に近づくとじーっと俺を睨みつけてはいるものの、その目に僅かに涙が浮かんでいるのに俺は気付いた。
――え……翡翠……？？
俺はそう戸惑い始めていた時だった。
「！？」
突然そのまま抱きついてきた翡翠。
しばらく俺は動けなかった。頭の中では『何故？』という戸惑いもあったが不思議と仕方がないなという気持ちになっていた。翡翠の髪からいい香りが漂って来る。柔らかな髪と羽根――何者かも……泣く理由もわからない。
しかしこれだけは言えると思う。
翡翠は今、きっと涙を見られたくなくてこうしているのかな……と。
声をかけようかとも迷ったがかけなかった。――かけては、いけない気がした。
慰めるために頭をそっと撫でた時、翡翠ははっとして顔をあげた。
少しだけ目尻に涙を残したまま、目を見開いている。
「あ、いや……気に障ったらごめん……。その、な――何があったかは知らないけど泣かれてはますますよくわからないからさ……」
「べ、別に泣いてない……っ」

翡翠はそう言うと、ぱっと俺から離れて格子に腰かけた。
外の方を向いて座るその姿は、羽根が生えておりとても人間とは思えない。
穏やかな風に揺れる長い黒髪がとても綺麗だ。
さらさらとしていて真っ直ぐで、微かに漂うこの香りは薔薇だとその時初めて気付いた。
俺はそっと翡翠の横の格子に手をかけた。
ちらっと翡翠を見ると、もう涙は止まっているようだが遠くの空に何か想いをはせるように切なそうな表情をしている。
――性格はともかくとして、可愛らしく美しいこの翡翠の容姿は犯罪的。
「……翡翠？」
「……何？」
「翡翠って、羽根生えてるけど……何者なんだ？　人間じゃない……とか言わないよな？」
恐る恐るきいたその質問に、翡翠はふっと呆れたように微笑んだ。
「――そうだと言ったら、……どうする？」
俺の方は向かずに答えるその翡翠の表情は、どこか幻想的に見える。
でも、不思議だ。
人間じゃないと言ったらどうすると聞かれたのに対して、俺はあまり驚かなかった。
それは既に羽根を見ているから想像が出来ていたのか、何故なのかはわからない――。
俺は冷静に答えていた。
「そっか……」
じゃあ、一体何だと分析を進めようとしていた俺に翡翠は言った。
「――いちいち答えるのは面倒くさいので話してやろう。私は、――女神だ」
「！」

あの、ゲームとか漫画に出てくる女神！？
冗談にしては翡翠の顔は笑っていない。
おいちょっと待て――。俺、何で普通に女神と会話してるんだ？
大体、確か人を探していると言った。
俺以外にも見つけなくてはならない者がいると――。
そして次の言葉を静かに紡いだかと思うと、翡翠は部屋へ去って行った。

「――とにかく、そういうわけでお前には、私と一緒に人探しをして貰うから……そのつもりで」

その言葉に俺は、しばらく硬直してその場を動けなかったのだった。

つづく。

3　大学にて

あの日から――何日が経っただろう。
俺はいつもの学校へ向かうため、電車に乗った。
翡翠は羽根を隠して一緒に学校へついて来る。黒く長い髪を一つにお団子に高く結わえ、ひらひらとした丈の少し短いワンピースを纏う。翡翠は馴れ馴れしく俺と腕を組んで登校する。
俺の大学は『慶応桜大学』。それなりに頭のいい学校だ。
とはいっても遊びなれしてるヤツも多い。
俺もあながちそのひとりではあったが付き合い程度で、実際好きなのは読書やアニメ、ゲームといったものだった。
翡翠と一緒に登校するとはいっても、翡翠は授業には出ない。食堂や図書館などにいて俺を待っている。
翡翠は携帯電話を持っていなくて、何度かどこにいるのかわからなくて構内中を探し回ったあげく屋上にいたり、かと思えば大学で有名な遊び人連中に話しかけられて、普通に話をして待っていたなどといったようなことがあった。
勿論、遊び人連中は翡翠を狙っている様だった。
『おい、藍人――お前可愛いヤツ連れてるな。あれ、お前の？』
と聞いて来たので俺はいとこだと答え、外国から一時帰国していると答えた。
『あぁそう。今度皆で遊ぼうぜ。翡翠ちゃん誘ってさ』
などと言われても俺は連れて行く気になどなるわけがない。
しかし、最近ちょっとバイトとか忙しいから落ち着いた頃にとやんわりと断っておいたが……。
――となると、奴らは翡翠に直接交渉をしにやって来るのは想定内だった。
俺は翡翠に『あいつらには気をつけろ』と忠告した。
不思議そうな顔をして『何故？』と聞いて来る翡翠は、この世界

の事をそんなに知らないようだった。
暇なんだから別に誰かと話をしているくらいいいだろうと翡翠は言う。
その時、俺は少し苛々として、
「だから、お前みたいなっ、か――――」
とそこまで言いかけて口を噤んだ。

「か――？　って何だ？」

翡翠は怪訝そうな顔で俺の顔を覗きこんだ。
その時だった――。
休み時間が終わり、鐘がなり始めた。
――ヤバイ。
「と、とにかくっ！　お前は少し目立つからおとなしくしてればいいのっ。もうすぐお昼だから食堂に鐘がなったら来る事っ。いいなっ」
「あ？　……あぁ、いってら」
正直、翡翠を一人で構内に残すのは心配だ。
俺が言いかけた言葉は勿論『お前みたいな可愛い子がうろうろとしていては目立つから』ということだったが、目立つという言葉だけを俺は紡いだ。そして、俺は何を動揺しているのか鐘が鳴ったことを安堵して教室に入った途端に息を吐いていた。
あいつは異世界の人間――いや女神で人探しのためにこちらに来ているだけで、少しずつ教えてはいるが大学というものを知らなかった。翡翠は、学校に通ったことがないらしく教育係という勉強を教える者がいたらしい。
要は家庭教師というものだろう。
それにしても、何だって俺はこんなに学校に来て焦っているんだ。
「よう、宮部――。お前さぁ、最近可愛い子と一緒にいるけど親戚の子なんだって？　合コン誘ってみてよ」

「わ、何だ戸塚。出席誰かに頼んでいつも出席しないのに」
「レポート提出すりゃ何も言われないから別に出なくていいんだけど、お前に話があってな」
「それが、合コンの誘いってわけか？　くだらない」
俺はため息を吐いた。
どいつもこいつも女のことしか頭にないのかと呆れていた。
「悪いが戸塚、あいつは駄目だ」
「何で……？　お前あいつのこと好きなわけ？　――イケメン、秀才君だというのに全然女に興味ないみたいに片っ端からフッてるらしいけど、やることだけはちゃっかりやってて、美味しいトコ取りの悪いお前が……珍しいことだな」
戸塚――。こいつははっきり言ってチャラい。
高校の時から一緒だが、思えば俺が遊びだしたのもこいつと出会ってからかもしれない。
皆で馬鹿やって騒いでた頃は楽しかったが、一緒に大学受験のために励ましあい勉強をしたり、真面目に打ち込む時期もちゃんとあった。将来を語り合ったり、泣いたり笑ったり……色んなことがあった。
しかし、大学に入ってからこいつは変わったし――俺も変わったと思う。
「――別に好きとかそんなんじゃないし、人聞きの悪いキャッチフレーズをつけるなよ……いいから前を向け」
俺が言い放った言葉に戸塚は不服そうなため息を吐いた。
俺自身も合コン一色の毎日だった時期もあったが、皆して女女女と女のことしか頭にないのかと思って止まない。
『隠れオタク』だった俺は、面倒な時は断る時もあった。しかし、こいつは誘われれば必ず行くというアホだ。
皆、同じ色に揃えているのかと思う程、明るい茶色の髪の毛――。
かくいう俺も同じだが、そろそろ黒くしようと思っていた矢先に翡翠が現れた。

まるで揃えているかのように黒くするのは気がひける。したがってもう少し髪はこのままでいいかと俺は思っていた。
俺が前を向くように促した戸塚は、前を向いたまま口を開いた。
「……もう手付け済みなわけ？」
「は？」
「お前が手が早いのは昔から知ってるが、あの子ちょっと気が強そうなところもいいよなぁ～」
「おいおい……何言ってる。俺は別に手が早いわけでも何でもないし、いとこに手をつけるなんてあるわけないだろう。ちょっと頼まれて面倒見てるから、保護者みたいなもんだ」
「ふーん。じゃあまぁ、機会があったらセッティングしてくれよ」
「……機会があったらな……」
俺はそう気のないように戸塚に答えると授業に集中した。

はぁ……アイツ、大丈夫かな……講義中いつもちょろちょろと探検してるだろうからなぁ。
変なヤツに狙われたりしないだろうか――。あーもう、あいつが来てからどうも振り回されている気が……。
何だってあんなに可愛い容姿に可愛い格好をするんだ。
もう少し大人しめにしろと言っているのに何やら雑誌を買わされたかと思ったら、そこからその服出しちゃうんだもんなぁ……。女神の凄い力を見た瞬間だったが、翡翠は得意気に言った。
『こちらの世界にはこちらの世界に合った服を着なければならないんだろう？』と――。
髪型まで熱心に勉強してさ。
そこら辺は女の子らしくて女神もお洒落するんだなと皮肉を言ったら怒っていた。
面倒なヤツだ……はは。
とはいえ、一緒にいて悪い気は確実にしない――だが俺から離れればその分、心配でもあるのだ。

つーか、しゃーないから今日帰りに買ってやるか――。
これ以上余計な心配を授業中に巡らせなくてはならないのは、本当に困りものだ。

大学構内の教室の窓際、後ろの方の席――。
俺は講師、矢野の声を聞き流すように思考していた。
というよりあいつが来てからというもの、授業中はいつも心配で何も頭に入っちゃいなかった。
シャーペンを手に回し、窓の外を眺めているだけ。

葉月翡翠――。

ひとまずいとことして保護していることにしているが、本当に手のかかる女神様だと俺は心底思って止まない。

つづく。

4　アイスロイヤルミルクティー

ここは秋葉原――。
ヨドハシカメラ――。
その巨大電器店には、秋葉原の人ゴミ並の人々が集まっているかの様に人が多い。
俺はカフェで待たせている翡翠の元へと向かい、その袋を手渡した。
翡翠は首を傾げて受け取ると中を開けて目を輝かせた。
「こ、これはお前がいつも誰かと喋っている物？　え？　ていうか、新しいの買ったのか？」
「――全然わかっていないみたいだな……これはお前の」
俺はテーブルに肘をつき、少し窓の外を眺めながら言った。
何故かわからないが少し照れた。
贈り物をしているみたいで照れくさかったのだ。実際贈り物に変わりはないだろう。
しかし、これはちょろちょろと居場所が掴めないコイツの行動を把握するためでもあった。
そしてメールや電話などでいつでも連絡が取れる様に、絶対に必要な物だと踏んだ――。
「えっ、私に！？」
「そ。使い方――説明書に書いてあるけど、俺が説明した方が早そうだな。やけに分厚いくせに大したこと書いてないから」
俺はそう言って翡翠にメールの使い方。電話の使い方。果てにはゲームやウェブページの見方まで色々と教えてやった。
翡翠は飲み込みが早く、あっという間に俺にメールをよこした。
そして俺はそれを見て一瞬目を疑った。
“一応、礼は言おう。ありがとう☆”

ひ、一言余計な文字が入っているなと思いながらも、俺は苦笑して言った。
「どういたしまして。まぁ、何かあったりしたらすぐ連絡しろ。飛んでいくから」
「わかった。何かなくても連絡しちゃいけないのか？」
「え、いや別に構わないけど授業中はメールにしてくれ。電話は出れないからな」
「ふーん。わかったぁ」
そう微笑む翡翠はやはり犯罪的に可愛い笑顔を俺に向ける。
「――お待たせ致しました。アイスロイヤルミルクティーのお客様？」
「あ、そっちです」
「では、こちらコーヒーでございます。ごゆっくりどうぞ」
店員がアイスロイヤルミルクティーを翡翠の目の前に置くと、俺の目の前にコーヒーを置いて去って行った。
「翡翠、いつもそれだけど、あれぇ？　コーヒーは嫌いなんだっけ～？」
「……。あ、あぁ……そうだ……苦くて飲めぬ」
え……な、何か悪いこと言ったのだろうか。どんどんと浮かない顔で声もか弱く小さくなった。
翡翠は子供扱いすると妙に怒るところがあり、少しからかうつもりで言った一言だった。
こんな反応をするとは思っていなかった。
翡翠は俯いて顔を曇らせながらミルクティーにストローを差した。
「お、おい……なんだ。わ、悪かった」
慌てて俺は弁解した。
翡翠は時々、寂しそうに顔を曇らせることがある。
でもどれも大したことじゃない内容なのに、何故そんな顔をするのかよくわからなかった。

「ご、ごめん。少しトイレに行って来る」
「あ、翡翠っ」
俺はぱしっと手を掴んだ。
驚いてパッと振り返ったその目に涙が浮かんでいる。
俺は胸がそわそわと騒いだ。
いつも顔を曇らせた時は俺の元から一度離れて、少しすると無理して微笑んで戻って来る。
やはりいつも泣いていたのかと胸が痛んだと同時に、事情をあまり詳しく聞かせてはくれないことに苛立ちも覚えた。
「……いいから座れ。どうせトイレに用はないだろ。こっち、隣に座れ」
「め、命令するなっ……私を誰だと思ってる」
「――葉月翡翠。俺のいとこ。そして、俺が保護者だ。文句あるのか？」
「……ぐ……」
翡翠は悔しそうに下唇を少し噛んだ。
無理矢理隣に座らせると自分の胸に抱き寄せた。
「何か事情はよくわからないけどな、勝手に傷つかれても困る。何かあるなら言えよ……謝るから」
「……言ってもお前にはわからぬ」
「そんなの言ってみなくちゃわからないだろ？」
しかし、翡翠は何も言わなかった。
俺はやれやれとため息を吐きながら仕方がないなとコーヒーに口をつけた。
考えてもみれば人探しをすると言われたが、他のことは大まかにしか聞いていない。
翡翠は女神で、歳は18歳。こちらでの家族はいない――どころかあちらでの家族のことも何も言わない。
ただ、姿を変え――、こちらの名前を名乗っているだけ。そして不思議な力を持つ。

翡翠は一度命を落としたと言ったので、では幽霊か何かだと思ったが違った。
とても良い事をした人間は、女神として生まれ変わるらしく――、翡翠はそうして女神として生まれ変わり地上で暮らしていたのだと話していた。
その良い事とは何だったのかも教えてはくれない。
何故、人探しをしているのか――。これにさえも後々に話すと言ってほとんど教えてはくれない。
とりあえず翡翠が感じる何かを持つ人を探す手伝いをすることしか、言われていない。
俺がなんともこの身勝手な話に乗ってしまった理由は、正直この容姿に負けた気がする。
そして、時々このように寂しそうな表情をされてはどこか放っておけない気もしたのである。
だから俺は言った。
「仕方ないな。ただ俺はこちらの世界でお前の保護者となるのだから俺の決めるルールには従って貰う――それが条件だ」
最後の一文に翡翠は不服そうだったが、しぶしぶと納得したのだった。
――――……

翡翠の頼んだミルクティーの氷。それはほとんど溶け始め、上の方が透明になり始めている。
俺はため息を吐くと、翡翠の口元にストローが当たるようにコップを近づけた。
「下の方はまだ薄まってない……かき混ぜずに飲めばまだ美味しいぞ」
翡翠は俺の顔をゆっくりと見上げた。
もう涙は止まっている。
そして頷いて言った。

「……うん」

そう言った翡翠の顔は、穏やかに微笑んでいた。

つづく。

5　カレー

俺の部屋はまぁそんなに悪くないマンションだ。
駅から徒歩六分程。１ＬＤＫ――。
翡翠にご飯を作らせようとしたことがある。しかし、もう二度と一人で料理をさせるのはやめようと思った。
詳細はかわいそうなので伏せておいてやりたいのが、保護者としての愛情だと思う。
「今日も２のとこだぞ」
「はーい」
嬉しそうに微笑む翡翠は、ただ炊飯器の米を入れた米びつの目盛り通りに水を入れているだけ。
しかし、それだけで十分褒めてやらなくてはならないだろう。
ピ、という音を立てて翡翠が押した炊飯ボタン。
この作業は翡翠に与えられた何とも簡単な作業。
というか誰でも出来る作業だ――。
それを終えると翡翠は、俺の作業を興味深々に観察している。
「ん？　テレビとか観てたら？　まだ出来ないぞ？」
そう言った時だった。
翡翠の携帯の音がする。
――ん？
誰にも番号とか教えるなと言ってるし、今日買ったばかりだから誰からもメールが来るはずはないのに……？
俺はそう思った。
翡翠が携帯を取りに台所から居間へと歩みを進める。
パカッと携帯を広げた音がして、しばらく黙っているので俺は翡翠に視線を向けた。
翡翠は怪訝そうに目を細めている。
俺はふきんで手を拭いて、翡翠の携帯を取り上げた。

「ん？　あぁ、なんだ迷惑メールか。こんなのは削除すればいいんだ」
「迷惑……メール？」
「そう。何か如何わしいことが書かれているメールのことだ」
翡翠はますます怪訝そうな表情を浮かべている。
「削除完了、ほら。座って――適当にお笑い番組でも観てろ」
俺はそう言って台所に向かった。
普通は逆だと思うが、まぁいいか……。
翡翠はお笑い番組を観て、所々笑うがわからない単語も多いらしく説明を挟みながら俺は野菜を切り終えて炒める。
玉ネギの火が通った匂いとバターの匂いはそれだけで食欲をそそる。
そして次々とニンジンやジャガイモを投入し、少し奮発した国産の牛肉を入れた。
ちょうどいい頃合に水を入れ、コンソメを溶かす。これは渡辺という友人に教えて貰ったコツである。
和風の料理にもだしを入れるように勿論カレーにもコンソメを入れるのは当たり前だと言われ、俺は脱帽した。
確かに――と思ったものである。渡辺は調理学校に通っていて、そこで得た知識なのか少し前まで一緒にここで住んでいた時に教えてくれたのだ。家賃が半額になり良かったのだが、女と同棲すると言って出て行った。
カレー粉を入れ、後は少し煮込むのと米が炊けるまでだと思い、俺は振り返ると翡翠は横になっている。
おまけにワンピースの丈が短いせいか、その……見えそうですよ――お嬢さん……。
貞操の危機というものを持っていないらしい翡翠は、時折無防備だ。
――というか男として認識されていないのだろうか。
俺はため息を吐き一言言おうと近づいた。

「……なんだ、疲れたのか。寝てるな……」
翡翠はすーすーと寝息を立てながら眠っていた。
ふっと微笑むと、仕方がないのでブランケットをかけてやった。
こうして寝顔を見ていると呆れるほどに安心しきっているのが伺える。
――俺なんかを信用していいのか？　お前は……。
そう思いながらも、俺は少したったら起こしてやろうとそのまま寝かせてやることにした。
それにしても変な日常だなぁ……なんか謎が多いし。
俺は立ち上がってカレーの様子を見に行こうとした時だった。
翡翠が僅かに声を漏らした。
視線を送ると、翡翠は寝ながら目尻に涙を溜め僅かに体を震わせていた。

――あ……まだ……。

俺は急いで火を止めに行くと、翡翠の頭を優しく撫でてやった。
翡翠は夜、時々こうやって嫌な夢でも見ているのか泣いている時があった。
本人には言っていない。気付いていないふりをしているが、何故か心が騒ぐ。
ずきっと胸が痛んでどうにかしてやりたいと思うのだが、ただ頭をこうして撫でて落ち着かせてやることしか出来ない。

きっと、何か辛いことがあったんだろうなと思う。

翡翠は偉そうに普通に笑ったり怒ったりして話すくせに、その心には何か哀しみを抱えているに違いはない。
少し撫でていると落ち着いたらしく、涙は止まったようだ。
やはり、放っておけないな……。

しかしそれが一体何なのか、よくわからないことも事実。
強がって見せようとしないのだから、見せたくないのだろう。
知らないフリをしてやるのがいいのか、聞いた方がいいのか……
俺は迷ってもいた。
だがその内話すと言っているのだから、今は聞くべきじゃないと思っていた。

ピー、ピーという音。

よし、炊けたか。
翡翠を起こそう。
米をよそうのも、こいつの役目だ――。

「いただきまーすっ」
翡翠が俺が作ったカレーを一口食べる。
熱かったらしくてしばらくあたふたしていたが、烏龍茶をコップに入れて渡すと安堵したように息を吐いた。
「こらこら、落ち着いて食べろ。ふーふーして食べれば熱くない」
「舌が火傷したぁぁ」
翡翠は舌を出して顔を歪めている。
次はちゃんと息を吹きかけて熱を冷まして食べてから翡翠は言った。

「まぁまぁだな」
と――。

自信作のカレーをまぁまぁと言ったことに、俺は初めて翡翠に殺意に似た感情を覚えたが抑えて言った。
「そ、そうか……」

しかし翡翠は全部食べた上に、少し驚いたのだがおかわりまでした。

洗い物をしながら俺はメールの一文を思い出し、ふっと笑みが零れた――。

つづく。

6　危機と手がかり

朝、目を覚ますと翡翠が俺にぴったりとくっついて寝ていた。
正常な成人したての俺にとって過酷な時間だ。
下手に動けば起こしてしまうかもしれないし、かといってこのまま耐えるのも少々辛い。
そして、もうひとつの選択肢だけは絶対に選択してはならないと決めていた。
とはいっても、何度かその決意を揺るがしてしまおうと思った事が何度あったかはわからない。
その時俺は頭の中で、先日やった授業の微分方程式の例文を思い浮かべ雑念を振り払った。

今回もと思ったが、今日は翡翠は早く目を覚ましてくれたようだ。
助かった――。神様、今日もありがとう――。
「んぁ、トイレ～」
ふわふわと、ふらふらと……。
宙に浮きながらもふらついてトイレへ向かうその姿は、毎朝の事ながらつい微笑んでしまう。
なんだか手はかかるが仲のいい妹のように、翡翠は近くも遠い存在だなぁと日々実感する瞬間なのだ。
一緒に寝て一緒に朝目覚める――。
それなのに何もない。俺にしては珍しいことだ。
トイレから戻って来た翡翠は俺が貸したグレーのトレーナーを上下を着ている。
まだ眠いらしく、布団に入って丸くなる様は子猫のようだ。
「まだ寝るの？」
「あと五分」
「駄目だ、もう起きる時間だ」

「……ケチ」
このやり取りも毎日のこと。
さすがにそこまで言われてはこちらも黙ってはいられない。
俺は翡翠の体をくすぐった。
「きゃははは っ、ちょっ、駄目っ……っわ、わかった、起きるっぅー」
「よぉし。じゃ、さっさと布団から出て」
はぁ、とため息を吐いて翡翠と俺は布団から出る。
こうでもしなければ翡翠は全然起きない。
そして不機嫌そうではあるが、何とか起きて準備をして学校へ――という日では今日はない。

「翡翠、今日さ……悪いが小さくなっててくれ。またバイトだからお前はロッカーで寝てていいからさ」
「ほーい」
「返事は『はい』」
「……はぁい」
全く持って不満そうな返事だが、まぁよしとしよう。
俺は少し引きつりながらぎこちなく微笑んだ。

今日は雨だ。
鉛色の雲が空を覆い、少し風が冷たい。
残暑ももう終わり、季節はそろそろ山々が紅や黄色に染まる頃なのだろうか。
とはいっても山など東京で見ることなどあまりない。
見えるのは空と民家やビルと人ゴミである。
結局翡翠があれやこれや服に悩んで時間を取られ急いで出てきたため、上着持って来れば良かったなと俺は後悔した。
「――翡翠、寒くないか？　大丈夫？」

俺は鞄の中の翡翠に話しかけたが返事はなかった――。朝もう少し寝たそうだったから寝ているらしい。
俺のバイト先はとある電器店の携帯コーナーで販売促進スタッフのバイトをしていた。
休憩時間。俺はロッカーを開け鞄を持ち、近くの飯屋に入る。
そしてランチセットBを頼み、鞄をこっそりと覗く。
「……ま、まだ寝てるのかぁ？」
俺が小声で声をかけた翡翠はうっすらと目を開けた。
少しだけ咳込む翡翠はよく見ると顔が赤い。
なんだか具合が悪そう――？
「お、おい。大丈夫かっ？」
「……まずい。なんだかぼーっとする……」
「お、俺バイト中だから抜けれないしな……ロッカーある場所も少し寒い……お、お前家に帰って寝てろ。前に移動したみたいに帰れるだろう？」
俺は前に異世界に移動した時に見た白い魔法陣のことを言っていた。
隣に薬局があるので少し鞄を持ち席を離れると『冷えピタリ』という額に貼る冷却シートを買った。
店内に戻り、トイレに行くとひとまず姿を元に戻させた。
そしてコレを貼って大人しく寝ているようにと翡翠に言う。
「……う……ん。ごめん……アイト」
「バイト終わったら急いで帰るからさ」
咳込みながら頷くと翡翠は魔法陣を出してスッと吸い込まれるように消えた。
あ～もう、とりあえず飯食って――って……あ、あいつに飯……忘れてた。
い、家に何かあった筈だが……何か食べててくれればいいけど、っつってもハムとかベーコンとかパンとかしかないな。
俺は急いで飯を食い、売り場に戻る。

客は絶え間なくやって来て、午後休憩を挟んだ頃に一度電話をした。
しかし、寝ているのか……出ない。
メールを送っておいた。

『大丈夫か？　ちゃんと寝てるか？　あと二時間もすればバイト終わるから八時にはそっちに帰れるから。お腹空いてるよな？　なんか帰ったら作ってやるからごめんな』

パタンと閉じて、俺は売り場に戻る。
一生懸命に仕事はこなしていたが、翡翠が気がかりで少しでも暇があれば思案していた。
やっとバイトが終わったが、メールの受信履歴は戸塚だけで翡翠からは一件もない。
俺は飛んで家に帰ったところ、翡翠は苦しそうに息をしながらきちんと冷えピタリを貼って眠っている。
少し安堵して買って来た氷枕にタオルを巻いて頭の下に置く。
そして決してやましい気持ちは微塵もなく、体温を測るため翡翠の服の中に手を入れ脇の下に体温計を挟む。
今時の体温計は進化している。一分もすればピ、と音をたてて体温が測れる。
そして体温計を見た瞬間、俺は一気に青ざめた。
というか思わず声を上げてテンパっていた。

――４１度――

う、嘘だろ……！？

ちょ、ちょっと待った。
何でこんなに高いんだっ。

長谷川救急病院へ俺は直行していた。
ここは実は俺の中学の時の同級生の長谷川の父親がやっている病院だ。

毛布でくるんで連れて行った病院で、幸いすぐに診て貰えたのだが診察するのに俺はとりあえず待合室で待つよう言われた。看護婦さんが俺のところへ来るまでの間、俺は消毒液のにおいのたちこめた待合室で翡翠に謝っていた。
最初から寝かせておいて連れ出さなければこんなことには――と思っていた。

「――宮部さん、診察室へどうぞ」
「あ、はい」
俺は看護婦さんの後ろに続き、診察室の中へ入った。
久しぶりに見た長谷川の親父――いや、先生が穏やかに微笑んだ。
「ひさしぶりだな、宮部君。彼女、もともと熱が上がりやすい体質の様だ。気をつけてやるといい。一応４２度以上になると危険だったがギリギリ間に合った。もし連れて来ていなかったらおそらく危なかった。４２度以上になるとたんぱく質が凝固して固まり始めるので、死に至る事もある。点滴も今打っているからそれが終わったら家で休ませてあげて、薬を飲めば大丈夫。安心していい」
俺はほっと安堵した。
白いカーテンが閉められ、点滴を受けながら苦しそうにうなされている翡翠を見守っていた。
俺は翡翠が何か口を開こうとしているのにはっとした。
俺は少し耳を近づけてみると、繰り返し誰かの名前を言っているようだった。
そしてそれは一度だけはっきりと聞こえた。

「――リュシ……ファー……」

と――。

この名前は、自分のことをほとんど語ろうとしない翡翠に関係するひとつの情報かもしれない。

手がかりを得た俺は点滴が終わり家に連れ帰ってからも、その名についてあれこれと思案していたが何者なのだろうか。全ては謎に包まれていた――。

つづく。

7　寝付けない夜

「う……ん……？」
小さな声が聞こえて俺ははっと目を覚ました。
翡翠が気がついた。
俺は翡翠の額に手を乗せた。
「まだ熱があるな……今日もバイトなんだ。寝ないで行くつもりだったけど少し寝ちゃったな」
「え……アイト寝てないの？」
「ま、まぁこのくらい平気だ。それより、昨日――悪かった……戻って来てから大変だったんだ。お前、長谷川救急病院連れて行ったんだぞ」
「！」
「電話もメールも何も返してこないし、飛んで帰って来たら熱は四十一度もあるし……。昨日朝食べたきり何も食べていないだろう？おかゆ作っていくからさ、腹減ったら食え。今日も大人しく寝ていること。いいな」
俺はまだ辛そうな翡翠の目を見れずに、少し逸らして言った。
翡翠はこくっと頷いているのが視界に入った。
「返事は『はい』だろ？」
「……はぁい」
相変わらず不満そうに返事をすると俺は思った。
翡翠は立ち上がった俺を呼び止めた。
「ご、ごめん……私、熱が出ると見境なく上がるというのを言い忘れていた。迷惑を……その、かけた……」
少し照れくさそうに謝った翡翠は、布団を被っている。
「――医者も言ってた。そういうことなら早く言ってくれないと、そうとわかっていたらバイト早退してたのに……ま、いいけどね。危なかったけどなんともなかったんだから」

翡翠が申し訳なさそうに頷いて、ゆっくりと起き上がろうとする。
「わ、おい――」
俺は慌てて起こすのを手伝ったが、ふと自分に向けられる切なそうな表情が俺をじっと見ているのに気付き、正直ドキッとした――。
しかし、深い意味はなかったらしくトイレに行くと言って宙に浮いた。
俺はドキッとしてしまったことを密かに後悔した。
ゆっくりと廊下をふわりと進んで行くのを見守っていたが、どうやら一応辿り着いたようなので安堵した。
「じゃ、行って来るな――あ……はは、そんな寂しそうな顔するなよ。携帯は枕元に置いておけよ？　それが基本。でもってすぐ帰ってくるケド、昼に一度電話するし、くだらないことでも何でもいいからメールくらいは返してやれる時返せるから何かよこせ？　いいな？」
こくっと頷く翡翠にちゃんと返事をさせると、微笑んで俺は部屋の鍵を閉めた。
駅に向かう途中、俺はメールを打った。
“今日は六時頃帰れるから、ほんとに大人しく寝てるようにな☆”
翡翠からメールが返って来るまで携帯を握り締め、今日は天気がいいなと思っていた。
まだ地は濡れているものの、早朝に雨上がり雲を消し去ろうとする太陽の陽は暖かい。
思えば翡翠に逢った時はまだ残暑が残る時だった――。
あれから一ヶ月で随分と気温が冷えた。昨日は冷え込んだというのに今日は暖かい。
天気は不安定だ。
手に持っていた携帯が震えた。

“はーい☆　早く帰って来てね。なんかひとりだと寂しい”

翡翠にしては随分素直だと思った。

おそらくメールだからだろう。なんだかそれが可笑しかった。

昼に電話した時にはつんつんと『全然平気だ』とか言うくせに、電話が終わった後にメールが来た。

“ほんとは寂しくて死にそう。ていうか暇。おかゆじゃなくてカレーが食べたい”

ふっ、と俺は呆れたように微笑んだ。

……カレーは刺激物だから駄目だ（笑）――と。

「宮部くん、何にやにやしてメール打ってるの？　休憩のたびに楽しそうね」

「あ、主任……お疲れ様です」

休憩所にてメールを打っていた俺に携帯コーナーの窪田主任が話しかけて来た。

「――ついにイケメンくんのハートを射止めた彼女でも出来た？」

「あ、いえ。全然違いますよ、な、何言ってるんですか」

「あらそう。てっきり嬉しそうにメールしてるから彼女でも出来たのかしらと思ってねぇ」

女性である窪田主任は、時折彼女はいないのかとかモテるでしょうとか声をかけて来てからかう時がある。

歳は失礼に当たるかもしれないので聞けないが三十歳くらいで結婚している。

携帯コーナーの中で『イケメンくん』と呼ぶのはさすがに勘弁して欲しい。

「じゃ、誰とメールしてるのぉ？　さっきから」

「い、いえ……そ、その同居人です」
俺はついしどろもどろに言ってしまった。
窪田主任はにやっとした。
「女の子と同居？　同棲じゃなくて？」
「いえ同居ですが、いとこなんですよぉ」
「あぁなるほど。なぁんだ、つまんないの」
「主任、何を期待してるんですか……」
「あはは、さて、そろそろじゃあ売り場に戻りますか」
窪田主任と俺は売り場に戻った。
俺はよく考えてみたら女の子と一緒に住んでいるというのは、少々世間体が悪いことをしていると思った。
しかし、あいつはただの同居人ではない。――女神の同居人――だなんて誰も信じないし言ってはいけないだろう。

その日、帰宅すると翡翠は飛んで来た。
「ひっつくな――。熱は？」
俺はそう言いながらも心臓がドキドキしていた。
翡翠が離れて首を横に振る。
額に手を当てて、大分よくはなったもののおそらく三十七度五分ほどはあるだろう体温にため息を吐く。
ベッドに寝かせた翡翠は、口を尖らせている。
「まだ熱あるんだから仕方ないだろう？」
「……寂しかったのに」
翡翠がぼそっと言った一言に、俺は思わず絶句した。
時々素直に言われると駄目だ。可愛い。
俺は深呼吸をした。
心の乱れを振り払った俺は困った様に微笑んで、冷えピタリを額に張り替えてベッドを背もたれにして口を開いた。
「お前さ……わざとやってんの？」
翡翠が『え……』と小さく声を漏らす。

「そういうのツンデレって言うんだぞ。こっちの世界じゃ」
「はぁ？」
「――悔しいけど、可愛いヤツだと思ってな」
翡翠は何も答えない。
しかし、すすり泣く声がして俺ははっと振り返った。
翡翠は俺に抱きついてきて、泣いていた。
だ、だからどうでもいい時に何故泣くんだっ。こいつは……。
聞いても――いいよな？　そろそろ……。
「あ、翡翠あのさ……、お前がそうやって時々泣く理由、全然わかんないんだ……っ。すごく辛そうでさ、どうにかしてやりたくてもお前、何も言わないしっ。なんか俺、それが苦しい。力になって――やりたい……のに……」
俺は言っていて、徐々に声が小さくなってしまった。
翡翠の顔が徐々に近づいて来て、言い終わった瞬間に唇が触れていた。

――あ、翡翠さま？　そ、それはマズうございませんか？

俺は何故か心で冷静に突っ込みを入れていたが、拒否などする気もさらさらないことも知っていた。
ゆっくりと離れる翡翠の顔。切なそうに俺に向けられている。

「――あの……えと、え？」

「あぁ、なんとなく」
と翡翠は簡単に言ってにっこりと悪びれた様子もなく微笑んでいた。

い、いや困るって。
どうしてそうやって俺の固い決意を揺るがしてしまいそうな悪戯をしてくれるんだろうか。

「こら、今のは重罪に値するぞ？」
「別にいいじゃないか。減るもんじゃなし」
「お、お前が言う台詞じゃないだろ。そういうのは男が言う台詞だ」
「わかったわかった悪かった。謝る」
んー。謝られては逆に少し調子が狂うけど……まぁいいか。

しかし、この日から俺は妙に翡翠を意識してしまい、寝付けない日々が続くこととなった。
おまけにそうやって起きていてみると翡翠はよく寝言を言う。

『子供扱い……するなぁ……』
だとか、はっきりと聞こえなかったが誰かの人の名前――。

そして、病院で聞いた『リュシファー』という名――。

ひょっとしたら、翡翠の恋人なのかもしれない――。
その名を呼ぶ時だけ、とても辛そうに俺に寝ぼけてしがみ付くようだった。

こいつ、そうだよなぁ……これだけの容姿なら恋人のひとりやふたりいてもおかしくない。
強がってるくせに、こういうところを見るとどうも放っておけない。
でも、何故か心が痛い。

駄目だ……振り回されてると思ってはいたけど、何だ……？　このモヤモヤ。
俺、ひょっとして翡翠の事……。

いや、しかし。
とんでもないことだ。名前も知らない。ていうか俺は何も翡翠のことなんかわかっちゃいないだろう。
そう、何も――知らない……。
ただ、お願いだから翡翠には笑っていて欲しいと――そう思ってはいけない……だろうか？
その後俺は少し切ないため息を吐くと、翡翠を抱きしめるように包んで眠ったのだった。
つづく。

8　一件追加

大学構内――。
ここ最近は授業に翡翠を一緒に連れて来ている。
携帯を持たせようが何だろうが寄って来る男共は、俺のいない時――すなわち俺が授業に出ている間を狙って翡翠を誘う。
番号は教えていないらしいが、しつこく聞かれたという。
「したがって＝π／２－α－［－ｃｏｓ（ｘ＋α）］（０，π／２－α）から＝π／２－α－ｃｏｓαとこうなる。そのくらい分かればいいのに」
「なるほど翡翠……お前意外と頭いいな……」
「はぁ？　お前にそんなこと言われたく……ない……」
あ、マズイまた俺何か翡翠の笑顔を消してしまった――。
俺は何なんだろう。何か最近こういうことが特に多い気がする。
ほ、褒めたつもりだったのに――。
よしよしと頭を撫でて慰めていた。
やはり翡翠がいると授業に集中出来ないようだ。
「こら、そこ。いちゃつくなら外でやれ」
「ぁ、す、すみません……」
その言葉に翡翠はくす、と微笑んだ。
やっと笑ったはいいものの、災難である。
そして講師はついでだから前に出て解けと言った問題を、翡翠が前に出てすらすらと解いた。
「ほ、ほぉ……聞いていたようだな……よろしい」
と同時に湧き上がる歓声――。
一体何だっていつの間にか翡翠は大学構内じゃ有名人となってしまったのか。
何人か翡翠に告白しては振られ撃沈していった。

そして、次の月がやってきて学校祭がやって来た。
翡翠は大はしゃぎでたこ焼きや焼きそば、クレープなどをねだる。
「お前そんなに食ってよく太らないなぁ……」
そう言った時だった――。
翡翠が人ごみの中足を止めた。
「……兄……様……」
そう呟いた。
視線の先には、自治会会長の『東条珀矢（とうじょうはくや）』がいた。
兄様――？
と不思議に思ったが翡翠は駆けて行く。
「あ、おいっコラっっ」
珀矢は女子に人気があり、容姿端麗、おまけに東条家といえば名門で年商一千億円を超えるという東条グループの時期頭取と言われているエリート中のエリートだ。東条珀矢の周りには女の子達が取り巻いていた。
そのすぐ目の前に走って行った翡翠は立っていたのである――。
「ん？　君は――確か二年の葉月さんと言ったね？　構内じゃ人気だから聞いたことあるが見た事はなかったが、確かに綺麗だな。しかし、何か用かな？」
「翡翠っ！　こら、突然いなくなって東条先輩こんにちわ。す、すみません。俺のいとこで突然走って行っちゃったので」
俺は慌てて詫びて翡翠を連れて行こうとしたが、翡翠はこともあろうか東条先輩に抱きついていた。
「！？」
唖然――。
おまけに泣いているようだ。
東条先輩はというと突然泣かれて困った様子だったが、慌てながらも「とりあえず落ち着いた場所にでも――」と優しく言って、何

故か俺も連れられ空いている教室へとやって来た。一方で、東条先輩に「少し失礼する――」と言われ取り巻く物を失った女の子たちは不満の声を漏らしていた。
東条先輩に抱きついたままで泣いている翡翠――。
東条先輩自身も理由はわからないが俺と同じ気持ちになったのだろうか。
優しく撫でるその手さえも綺麗なその容姿に、翡翠を合わせるとまるで絵の様だった。
悔しいけど、ものすごく似合う――……。
「……どうしたものかな……君と私は初めて逢った筈だが、何か知っているのかな？」
黙って翡翠は頷いた。でも、少しだけ首を傾げてからのことだった。
「……藍……人っ、説明――してっ……」
「！？　え、おっ俺！？」
黙ってこくこくと頷いている翡翠に、俺は信じられないといった表情を向けていた。
とりあえず、俺は翡翠が女神であることと人探しをしていて異世界から来たということくらいしか知らないというのに、何を説明できるというのだろうか――。
「宮部藍人君と言ったか……えと、君も事情を知っているのかな？」
東条先輩は穏やかに言った。
俺はどうすればいいのかわからなかったが、『一応』とつけて事情を説明した。
「……まさかとは思うが私をからかっているのではない……よなぁ？」
やはりそう来たかと俺は思った。
普通はそうだ。
ただ、こいつの姿を見れば信じざるを得なくなるだろう――。
「翡翠――東条先輩も何かお前に関係するんだろ……？　こっちじ

ゃそういう話はありえなくて、話しただけじゃ理解に苦しむのは仕方ない……姿、戻して見せた方がいいと思う……」
「姿――？」
東条先輩は怪訝そうな表情を俺に向けた。
翡翠はゆっくりと涙で濡れた顔を俺に向けた。
俺は安心させるように深く一度頷いた。
翡翠は、金色の光をその体に纏い一瞬だけ眩しい光に目を奪われて俺は目を閉じた。
「！！」
東条先輩は驚愕の表情で絶句していた。
光がおさまって見えたふわりと浮く翡翠のその身体には、うっすらとまだ金色の光が纏っている。
照明が消され薄暗いこの教室の一室は、鍵も閉めていたし、カーテンも閉めていた。
明るいとわからないがうっすらと光を纏う翡翠のその身は、神々しくも幻想的にここに存在していた。
やはりその姿は、誰もがはっとするほど綺麗だろうと俺は思う。
東条先輩も、はっとした表情のまま身を硬直させている。
翡翠が言った。
「すまない。――まだ姿を見せるくらいしか事情はほとんど話せない……。とりあえず、あと一人だけ見つけた時に話すから、それまで何も聞かずに協力して欲しい……」
「葉月さん……その、ごめん。少し驚いて声も出なかったが、協力させて貰う。私も思うところがある……姿は戻した方がいいだろう。もうわかったから……」
東条先輩のその声に、翡翠は姿を元に戻した。
「――で、今は宮部君のところに世話になっているということか……。しかし、俺のところなら部屋はいくらでも余っているし、家に来てもいいぞ？　失礼だがおそらく学生なんて貧乏暮らしが普通だ

からな……不自由はしていないか？」
学校祭が終わり、俺と翡翠は東条先輩を迎えに来た高級車の中に一緒に乗せられていた。
送ってくれるらしい。東条先輩は優しいことでも有名だった。
「それ、ほんとに先輩失礼です。一応貧乏学生なりにこいつには不自由させてませんから心配なく」
東条珀矢は少しだけムカつくことを言った。
でも翡翠を心配してのことだったのだろう。
それはよくわかる。
しかし、正直厄介払いが出来るとは思うものの、俺は翡翠に出て行って欲しくなかったのかもしれない。
翡翠の判断に任せるしかないが、翡翠は少し考えている様子だ。
――おい、ま、まさか……。

「先輩、私、藍人の面倒見なきゃなんないんだ。こいつは寂しがりやなので一緒にいてやっているんだ」

「！」
な、なんだと……？　お、俺がいつ寂しがったんだ。
言い方はムカつくが、東条先輩のところより俺の部屋を選んだ翡翠は何を考えていたのだろう。
「ははは、そうか。でもまぁ、不自由があれば何でも言ってくれ。使用人もいるし俺は一向に構わない」
「あぁ、ありがとう」
翡翠には少し後で叱ってやらなくてはと俺は心に思惑をめぐらせていた。
東条グループの直頭取と言われる東条先輩が翡翠の探す者の一人だったなんて、思ってもみなかった――。
俺を含めて大学に二人もいたなんて――。
翡翠は知ってて俺のところに来たのだろうか……。どうせ聞いて

も教えてはくれないだろう。
というか東条先輩のことを『兄』と言ったのはどういう意味なんだろうか――。

翡翠が探す人というのは異世界の住人のはずだがこちらの世界で翡翠は探している。
こちらに兄などいるはずがなかったが、何かの波紋によりこちらの世界に紛れ込んだ自分の周りの者たちを探しているとでもいうのだろうか。兄という言葉を聞いた以上、それしか考えられない。
しかし、一体何故？　というところまではいくら考えても分からない。

何はともあれ、もう一人見つけた時にと言った翡翠の言葉通り、捜すのを手伝ってやらなければ謎はとけないのだろう。

こうして、翡翠の携帯に『東条珀矢』という電話帳が一件追加されたことは言うまでもない――。

つづく。

8　一件追加（後書き）

ここまでＵＰしました。

9　東条珀矢

俺と翡翠――。
それと東条先輩の三人が俺の部屋にいる。
送ってくれるとは行ったものの、少しお茶でもと誘ったのであった。
東条先輩の家にも今度招待されているものの、多分俺のマンションの部屋とはうって変わってお屋敷なのだろう。
東条先輩は部屋に上がるなり、『さすがに狭いな……』と言って苦笑していた。
しかし、一般的な大学生にとって八畳と六畳の部屋がある１ＬＤＫは悪くない方だと俺は思う。
翡翠はお茶くらいは淹れられると言って台所に立っているが、『あ……入れすぎか？』だとか『熱ッ』だとか『わっ』だとか、何とも不安なので結局俺がお茶を淹れているのだった。
「……宮部藍人……東条珀矢……電話帳が増えた」
「ん？　それしか入っていないのか？　その電話」
東条先輩は翡翠に怪訝そうに聞いた。
翡翠は嬉しそうに『そう』と答えている。
「おい、宮部……友達いないのか、葉月さんは」
ため息を吐いて俺はそういえば友達という友達は俺以外に作らせていないのでいないと言った。
構内には良からぬ連中が翡翠に声をかけ、何も知らない翡翠はついて行ってしまいそうだと不安だとも言った。
「はは、確かにそうだな。葉月さんはちょっとばかり有名だな。しかしまさか異世界から来たとは誰も思うまいな」
「私別に大人しくしてるぞ？　アイトの言う通り。なるべく目立たぬようにしている」
「うーん。その……黙って大人しくしていても君の様に美しいと目

立ってしまうのだよ」
と、東条先輩恥ずかしさも微塵に感じずに簡単に『美しい』なんて言っちゃって――。
翡翠は首を傾げてため息を吐いている。
翡翠と東条先輩がテーブルで話す姿を見て、なんだかやっぱり綺麗な二人だと思った。
この東条先輩が翡翠の兄――だとしたら、それも納得するほどだ。
俺はしばらくお茶を淹れたトレーを持ったままぼーっとそれを見ていた。
「ん？　なんだアイト。ぼーっと立ち尽くしちゃって」
「あ――ご、ごめん。ちょっとぼーっとして」
翡翠がトレーを代わりに持ってくれた。
心配そうに顔を覗きこんで大丈夫かと声をかける翡翠に、俺は微笑んで隣に座った。
「しかし、どこで寝ているんだ？」
「あ……そ、それはその――」
俺はマズイところを突っ込まれたと思い、どぎまぎしていたが翡翠があっさりベッドで俺と一緒に寝ていると答えてしまったので俺は慌てて翡翠の口を手で塞いだが――少々どころか全然遅かった。
東条先輩は意味ありげに目を細めたかと思うと『なるほど？』と得意気に言った。
翡翠は不思議そうな顔をして東条先輩を見ている。
「い、いえ……あの、別に俺達はそういうことは決してありませんから変な想像はしないでください」
「ん？　いや別にどっちでもいいが、確かにここじゃあ一緒に寝るしかないだろうなぁと思って聞いただけだ。しかし、何もないとはまたおかしな話だな」
「いいいえっ本当にそういうのは絶対にあってはならないと……」
「何の話だ？」
翡翠のその言葉に東条先輩も納得したらしく、苦笑して再び『な

るほど』と言った。
おそらく俺の潔白は証明されただろう――。
翡翠はシャワーに入ると言って少し話した後に風呂場へ行った。
しかし、バスタオルを巻いたままで翡翠は風呂場から顔を覗きこませて言った。
「アイト～っ、シャンプーがもうなーい」
――はいはい。買い置きがありますよ……と思ったらもうなかった。
俺はため息を吐いて、翡翠に詫びた。
「悪い、ちょっとコンビニ行ってくるから待っててくれ。すぐに戻る。東条先輩俺、ちょっと行ってきます」
「あはは、そうか。はいはい。俺も一緒に行こう」
俺と東条先輩は一緒にコンビニに買出しに出た。
その途中で東条先輩は俺ににやにやしながら聞いた。
「――宮部お前さ、葉月さん……翡翠と呼べといってたか。翡翠とよく一緒にいられるな」
「……え……？」
「あの貞操の危機観念がない感じは調子が狂うだろうなぁと思ってな……」
「あ、俺は別に……」
疑問を投げかける目を向け続ける東条先輩には敵わないと思った。
そりゃ男だから一度は手が伸びなかったわけではない。
しかし、翡翠は動揺も何もせずに真っ直ぐに俺を純粋そうな曇りなき瞳で見つめる。
それを汚してはならないと何かが留まらせてきて、いい加減に諦めて俺は絶対に手は出さないと決めたことを東条先輩に打ち明けた。
すると東条先輩は腹を抱えて笑っていた。
正直、この人は楽しんでいるのではないだろうかと不信に思ってもいた。
しかしながら、その洞察力は鋭いものがあると思う――。

「いやすまないすまない。あまりにも予想通りだったのでおかしくて」
「笑い事じゃないですよー。あんな美少女と何もなしに寝なくてはならないという苦悩は、先輩も一度でいいから絶対に味わった方がいいです。あれは修行になります」
尚も笑う東条先輩はマンションのエレベーターに乗って言った。
「――女神だからな、汚してはならない気に何かがさせるのだろう。まぁ俺のところならば部屋もあるしその様に一緒に寝なくてはならないという心配もないから引き取ってやってもいいが――」
そこまで言って東条先輩は一度開いたドアを再び閉めた。
「――お前はそうしたくないのだろう。好意があるのが見え見えだ。はははは」
「!?」
バ、バレてる……。
東条先輩は笑いながらエレベーターの扉の開閉ボタンを押してドアを開けると先へと進んだ。
侮れないなぁ、東条先輩……。

俺は嫌な顔をしながら部屋へと戻る。
玄関の鍵を開けて中に入ると、思わず固まった。
「ひ、翡翠っ！　お前、バスタオル巻いただけでうろうろするなっていっつも言ってるだろッ」
「シャンプー待ってたら暑くて、アイス食べてたー」
翡翠はにっこり微笑んで俺が楽しみに取っておいたハーゲンダッツのグリーンティーのアイスを食べている。
「あっ、お……俺のハーゲンダッツ……」
ため息を吐きながらやれやれと東条先輩は一口くれと翡翠に食べさせて貰っている。

しかも、二人して俺のアイスを……。
「アイトも食べる？」
「いや、それ俺のだし……」
「あ、そう」
翡翠は俺の密かな怒りよりアイスに夢中らしい。
そっけない返事を俺に返した。
「シャンプー買って来たからそれ食べたらさっさと入って洗って来い」
怒ろうかと思ったがやはり東条先輩の言った通り、俺はこいつを本気で怒ろうとは思えなかった。
悲しい男の性だ。
「そういえば翡翠って何歳なんだ？」
東条先輩が唐突に聞いた。
「十八歳」
「ほぉ、十八か。なんだか妹のようだな」
「！」
翡翠の表情が明らかに変わった。

あ……今まで俺が翡翠が時々泣きそうにさせる時、理由も意味がわからないと思ってた……。
でも、なんとなく……わかった気がする――。
やっぱりだ――。
こいつ、泣きそうだ――。
翡翠は驚愕の視線を向けたあと顔を曇らせて一瞬俯き、すぐに顔をあげて微笑んでいた。
何事もなかったかのように笑みを浮かべて――無理して……。
俺は胸がしめつけられるような気持ちになった。
「えへへ……私、じゃあ風呂行って来るっ」

――今、無理して翡翠は笑ったことに東条先輩は気付いていないだろう。
シャンプーを俺の手から奪うようにぱっと取って翡翠は風呂場へと駆けて行った。
すぐに、行ってやりたかったが今は東条先輩がいる。
それに行っても多分何も言わないし、よく考えてみれば風呂のドアを開けるわけにはいなかないだろう。
俺は苦笑すると、翡翠が残していったアイスを食べる。
一口くらいしか残っていないのは腹が立つが、味わえただけよしとするかと俺はそうため息を吐いた。
「お、そういえばもうこんな時間か。そろそろおいとましようかな。また明日にでも話そう」
「あ、はい。その、東条先輩も何かに巻き込まれてしまったようですが、その……ありがとうございます……」
俺のその言葉に東条先輩は少しの間の後に、くすっと微笑んだ。
「別にお前が礼を言う事もないだろう。ははは。まぁ、一応保護者か……では翡翠の事、よろしく頼む」
ん？　東条先輩……？
そういえばお互いに何故翡翠を保護しようとか、よろしくだとか挨拶をしていること自体がおかしな話だ。
もともと翡翠は誰のものでもないのだ――。
だが何となく普通にそんなやり取りをしてしまったことに、東条先輩も不思議に思っていたのか互いに苦笑した。
その後、俺は東条先輩を見送ると、おそらく風呂場で多分泣いている翡翠の元へと足を運んだのだった――。

つづく。

１０　翡翠の涙

風呂場の曇りガラス――。
聞こえるお湯の揺れる音と、わずかに聞こえる翡翠のすすり泣く声。
俺は浴室と洗面台のあるこの空間に足を踏み入れずに、風呂場のドアから曇りガラスに向かって声をかける。
「ひ、翡翠――。その……さすがに風呂場だから行ってやれないけど、またどうせ泣いてるんだろう？」
翡翠の声の替わりにお湯が先程よりも少し大きな音を立てて揺れるのが聞こえた。
少し待ってみたが、翡翠は答えたくないのか一向に返事はない――。
――はぁ、やっぱりか……。
……アイツが泣くと、こう――なんか俺まで切ない気持ちになって来て……いてもたってもいられなくなる。
翡翠の事が知りたい――。だが、翡翠は自分から頼ろうとか理解してほしいなどという態度はみせない。
すごくもどかしいような――はっきり言って、辛い――。
お願いだ、翡翠。
そろそろ何か話してくれてもいいじゃないか？
辛そうな顔見せるだけじゃなくて、少しは頼ってくれてもいいと俺はそう思って止まない……。
俺はため息を吐いて風呂場を後にした――。

バルコニーに出る――。
俺はバルコニーで煙草を吸うことにしていた。
翡翠が吸わないから気を使っていたのだ。
バルコニーから見える星空は、今日は雲ひとつ見えずに綺麗に瞬いていた。
月は満月で――、星たちを従がえるように漆黒の闇にその姿をはっきりと浮かばせている。
バルコニーの格子に肘をつき、俺は白い煙を闇に重ねる。
上へ上へと煙は昇るのに、薄っすらとその姿は消えていく。

あいつもその羽根で、上へ上へと昇って消える日がいつか来るのだろうか――――。

俺はそう思った時だった。
目の前に突如現れた翡翠の顔に、俺は驚いて声をあげた――。
「わぁぁっ！！」
「あははは っ。大成功っっ」
笑う翡翠を捕まえようとするが、ひょいひょいと軽々避ける翡翠に俺は呆れてため息を吐いた。
元気に戻って来たつもりか……。
やはりここは知らないフリ、続けてやるしかないのかな――。
「ていうか、誰かに見られたら困るから降りて来い。んでもって近所に飯食いに行こう」

俺はそう言って部屋へと戻ると翡翠もついて来た。
どうせ近所だとどうでもいいトレーナーなど、適当な格好で俺と翡翠はラーメン屋に行った。
このラーメン屋は何気に上手い。

北海道らーめんと書かれているがどうせ胡散臭いのだろうと思って舐めていたら、意外にも美味しい店だ。
『北海道らーめん』とは何と芸のない名前の店なのだろう。
しかし、この店のおじちゃんはとても豪快で人柄がいい。
俺と翡翠は俺のおすすめのラーメン坦々麺を二つオーダーして食べ終わると店を出た。
マンションまでの帰り道――。おそらく残業の後に帰宅するサラリーマンが、ゆっくりと駅から帰路についている。
少し散歩がてらに遠回りした俺達は、公園に寄った。

「ねぇ、アイト。『がっはっはっは』って笑うだろう？　さっきの店のおじさん」
翡翠がブランコを楽しそうにこぐ中で、俺は動かずに隣のブランコに座ったまま一服をしていた。
「あぁ」
「あぁやって笑う者はとってもいいヤツだ」
俺はよくわからないが確かに人柄はすごくいいおじちゃんだ。
豪快でいつも学生の俺には食事代を負けてくれる。
おまけに今日は翡翠を連れて行ったので『可愛い彼女連れて来たなあ』と勘違いされたが苺までデザートにくれた。
「はは、そうだな……。確かにあのおじちゃんはいいヤツだ」
俺はそう答えて、誰もいない夜の公園を見渡した。
砂場には昼間に子供達が作った砂の山と、忘れて行ったらしい小さなスコップやバケツが置き去りにされている。
それ以外は回るアスレチックと滑り台があるくらいで、他は何もない。
草木が周りを取り囲み、風も吹いていないため翡翠がこぐブランコの音がなければ、ここには静寂が支配しているのだろう。俺はそこにザッという音を重ね、アスレチックまで歩みを進めた。
青く塗装された鉄の棒が織り成すアスレチック。

俺は一番上まで上ると、ブランコに乗っている翡翠を微笑みながら見下ろした。
ブランコがザッという音を立てて止まる。
翡翠はこちらまでゆっくりと歩いて来た。
「へへ、一番上は俺のものだ」
その俺の放った言葉に翡翠は宙に浮いてあっさりと上って来ると、向かい合わせに座った。
「それ、ずるって言うんだぞ」
「ずるじゃない」
「ていうか、人に見られたら困るから外で飛ぶのは禁止って言っただろう」
「あ……そうだったな。……悪かった」
翡翠は珍しく素直に謝ったので少し拍子抜けした。
翡翠はその後少しの間、夜の静寂のたちこめた公園を見下ろしていた。
いい年して、こんな公園のアスレチックの上にいる二人は時々通る人からどう思われているのだろう。
見下ろすのに飽きたのか、翡翠は俺の顔を見た。
翡翠は変わった目の輝きをしている。黒い瞳かと思っていたが時々新緑の様な色に見える時がある。
いや、少し違うか……とにかく光の加減なのかうっすらと黄緑色に見える時があるのだ。
今もそうだった――。
それはとても綺麗で、思わず吸い込まれそうになる。
気がつけば何か言おうとして俺は口を開いて言っていた。
「――翡翠、お前さ……泣きたい時。泣いていいからな？」
「え……」
翡翠は俺の言葉に小さく声を漏らし驚いているようだった。

「俺、なんとなく気付いたんだ。お前が泣きたい時――それ、……大事な思い出……なんだろ？」

「！」

翡翠の目が、明らかにはっとした様に見開いていた。

じっと見つめる翡翠の目。

切なそうにそれは俺から視線を逸らす――。

俯いた翡翠のトレーナーに目から涙が零れ落ち、はっとして俺は翡翠を抱き寄せた。

そして、ただ黙って慰めるように頭を撫でた。

――翡翠は否定も肯定もしなかった。

それでも俺は確信していた。

翡翠はやはり何かの記憶のかけらたちを思い出して泣いているのだと――……

――――……

――……

つづく。

11　事件

俺は翡翠についに言ってしまった。
俺がなんとなく気付いていた――翡翠が時々すごく寂しそうな顔をして泣く理由。
翡翠は驚いた顔をした後に、もちろん否定した。
しかし俺はあの反応は、絶対にその通りだと告げているようなものだと思っていたが、それでも……。
「そっ……か。まぁいいけど、じゃそろそろ帰ろうか」
と俺はそう言って、また知らないフリをしてあげたのだった。
そうでもしなければ、翡翠は消えいりそうな小さな声と動揺を隠せないといった困った顔で俯いていたのだ。
これ以上問い詰めたら、なんだか可哀想かな――とつい俺は思ってしまった。

謎が多い翡翠――。

話してはくれないけど、いつのまにか翡翠の微妙な変化を感じ取れるほどに俺は翡翠の近くにいる。
公園の帰り道、手を繋いで月明かりを背に二人で帰った。
翡翠も何かを考えていたのだろう――。ずっと、無言でマンションまで歩いて帰る途中コンビニでアイスを買った。
ハーゲンダッツのチョコクッキー味とグリーンティー味。
家に帰るなりこうして俺は風呂に浸かって、ひとり翡翠についてぼーっと考えていた。

「――アイト……」
「！？」
突然の声と曇りガラスに見える人影――。

俺は曇りガラスを開けた。
「な……なんだ？　どした？」
翡翠は明らかに無理して微笑んだかと思うと、その場に背を向けて体育座りをして言った。
「別に……何となく」
少々長風呂してしまったか……。
なんだかその背中は、とても寂しそうだった。
ひとり待っていた翡翠は寂しかったのだろうか……素直じゃないけど、そういうとこは可愛いヤツだ。
俺は微笑んで湯に浸かりながらどうでもいい話をしてやった。
それでも、どっか行ってみたいところはないかとか、旅行でも行こうかとか……それはカップルみたいな話だと思いながら話すその内容に、翡翠は「ディズニーランド。雑誌で見た」と言った。
がく……っ。
翡翠の言った場所は、旅行――とはならない距離の場所だ……。
しかし翡翠が行ってみたいというならば仕方ない。
「じゃ、来月にでも休み取って連れて行ってやるよ。はは……。じゃ……、俺そろそろ出たいんだけど、居間戻っててくれないか。暑い……」
長く話しをしていて逆上せそうになっていた俺がそう言うと、翡翠は頷いて軽く詫びると部屋へと戻って行った。
頭にタオルをわしゃわしゃと擦りつけながら部屋へと戻ると、翡翠は床に寝転んで雑誌を広げて見ていた。
俺はくすっと微笑んだ。
翡翠の開いていたそのページは、ディズニーランド特集のページだったのだ。
そして、ひょっとしたらこれを見ておねだりに来たのかもしれないと思った。
冷凍庫からアイスを出した俺も、翡翠の隣にうつ伏せに足を伸ばし翡翠の開く本を横から見てみたが、そのページにはディズニーシ

ーの方の記事も載っていた。
「あ、ディズニーランドは少し子供向け。少し大人はシーに行くんだぞ」
と俺がそう言うと翡翠は案の定、『やはりシーにするっ』と言って来た。
俺は冷めた目で翡翠を見る。
「……どっちでもいい。子供向けと言っても……別に大人も楽しめるとこだ」
「シーでいいんだっ」
ほ……本当に子供扱いされるのが嫌いらしい。
仕方ないなぁと思い承諾した俺の言葉に、嬉しそうに微笑む翡翠は子供のようだ。

こういう時ふと思う――。
平和な日常だなと思う反面、少し切ないなと……。

こうして過ごす毎日は恋人同士みたいなものだというのに、別に俺と翡翠はそういう関係ではない。
そして、そうあってはいけないと思うのに、もしそうだったらとも思ってしまう。
妹――でもない。
友達――でもない。
じゃ、なんだ？　この関係――。
同居人――というか面倒を見てやっていると言ってしまえばそれまでだが、もっと言いたくないのは翡翠は女神だということだろう。
異世界から人探しのために来た女神――。
女神がディズニーランドに行きたいと言っていると思うと笑える。
女神の翡翠の要望。喜んでくれるならそれでいいと俺は思う。
そういえば最近ネットでアニメとか見なくなった。
二次元のギャルゲーじゃなく、実際に美少女が目の前にいて一緒

に生活をしてくれるという今のこの日常。
確実に俺は楽しくて仕方がない――。
「さーて、寝るぞ」
俺は翡翠を先にベッドに入れて自分も後から入った。
同じシャンプーの匂い、同じベッドで寝る俺と翡翠。
……やはり、いろんな意味で切ない状況だなぁ～夜中は。
とその時、翡翠は後ろ向きに寝ていたのだが俺の方を向き直ると、じーっと俺を見つめた。
「アイト……」
翡翠が少し戸惑っている様に視線を落とす。
え……何だ？
ついドキッとしてしまうのが哀しい。
しかし翡翠は思わぬ言葉を言った。
「ごめん……詳しい事情も話さないで付き合わせて……。もし、アイトが私が迷惑だと思っているのならハクヤのところに移ってもいいと、言おうと思っていた……」

え……っ
東条先輩のところに――――！？

翡翠は少し俺にくっついて丸くおさまって続けた。
「その……アイトのせいにしてここにいてやってるなんて言ったけど、本当は少し迷惑じゃ……ないかと思ったり……」
翡翠……。
俺は呆れた様に微笑んで、ため息混じりに言った。
「――いーや、あれはあながち間違っていなかった……かな。正直、翡翠がいなくなったら多分俺は寂しいと思う」
「え……ほんと？」
翡翠は少し意外そうに言った。
「嘘ついてどうする。何でばれてるかと思ったもんだ。ははは。気

にするな……お前が東条先輩のところに行きたいっていうなら仕方ないけど、そうじゃないなら……いてくれ」
穏やかに言ってやったそれに、翡翠は少し照れたように顔を紅くして頷いた。
この時の俺の脳内では騒ぐ俺の分身がいたことは内緒だが、内心、「ちくしょー……今すっごく可愛いしいい雰囲気なのに何も出来ず……」と落ち込んでもいた。
ん？　待てよ？　そういや俺、前に翡翠にキスされなかったか？
減るもんじゃなしとかいって……。
それを思い出した俺は、勝手に心臓が高鳴るのを感じていた。
迷い躊躇しながら時計の秒針が時を刻む音と心臓の重奏を聴いていた。
ごくっと息を呑んで覚悟を決めると、俺は翡翠の顎に手を触れる。
しかし、ゆっくりと近づいて顔を覗き込もうとしたここで俺はある重大な事に気が付いた。
翡翠は全く動揺も見せないどころか……この、肝心な時に……。
既に寝ていやがる……（泣）
む、無防備にも……。
警戒も何もある筈がなかったのである。
あ～あ、馬鹿馬鹿しい。何やってるんだ俺は。
俺は仰向けにため息を吐いて天井を見上げ、自分に呆れていた――。

いつから俺は女に奥手になったんだ……中学生じゃあるまいし。
いや、違うか。
――。
それは翡翠だからだ――。
初めて手を出そうとした時から、俺はそれになんとなく気付いて

はいた。

なんとも無防備に俺の隣で寝る翡翠に、俺はこっそりともう一度近づいたが全く気付いていない様子だ。

そして俺は何を血迷ったか、無抵抗の翡翠の唇に口づけた。

「ん……」

翡翠は寝ながら少し声を漏らし、俺の首の後ろに手を回してきた。

ま、マズイ……翡翠さま、そ、それはマズイ……。

お、俺が悪かった。

目は開けるな……今外して抜けるから――頼むっ……！

翡翠から唇を離してこっそりと腕から抜けようとしていた俺の願いも虚しく、その時翡翠は目をゆっくりと開けた。

「！？」

目を見開いたまま硬直して、俺の困った様な笑みをじっと見つめている。

ま、マズイ。

ヤバス……これは完全にヤバイ。

どうする……！　どうするんだ俺――っ！

つづく。

１２　翡翠からのメール（前書き）

ごめんなさい。以前載せていたものと変えております。
変更内容は、今後の時間経過のために曜日を設定間違えていたので
今日は火曜日に変更しました。
明日、水曜の日替わり定食はビビンバ丼でございます。
ということでお願いします（汗）
書いていて日にちが合わなくなってしまい、やむを得ず変更させて
いただきました。お詫び申し上げます。

12　翡翠からのメール

大学構内――。
食堂にいる俺と翡翠。
席は向かい側、ひとつ飛ばして斜めの位置に翡翠は座っている。
ちなみにいつもは向かい側。
ひとつの席分、距離が感じられる様だった。
――その原因はもちろん昨日の一件。
弁解をしようがなかったあの状況。
あの部屋は俺の部屋だというのに俺は床、翡翠はベッドで眠った。
――――……
――……
昨晩その後の会話――。
『いや、翡翠違うんだっ……あ、えとその……』
『……ね、寝込みを襲うやつだとは思ってもみなかったぞ！』
『いやだから、お前が手を回して来て外そうとしていただけでっ』
そう言った俺をじーっと疑わしげに見る翡翠の瞳――。
潔白ではないと見通されるようなその視線に、俺はつい焦って目を逸らした。
ため息を吐いた翡翠は、床を指差した。
『へ？』と言った俺に、翡翠は言った――。

――わかってるだろ……？――

冷めた目で言われるそれを、承諾するより他なかった。

さすがに床で寝ては俺の背中や腰は朝からだるく、全然疲れは取れていなかった。

起きると翡翠は既に準備できており、珍しいと思いながらも『お、おはよ……』と気まずく声をかけたが、翡翠はそっけなく『おはよ』と言った。

や……やはり、怒っている――と俺はそう思った。

口数も少なく準備をすると大学へと二人で向かったのだが……。

俺達の異変は何故か周りにもわかったのだろう。

授業に一緒に出ずに図書館にでも行っていると言った翡翠のいない教室で、戸塚が聞いて来た。

「――なぁ、何で今日翡翠ちゃん授業出てないの？　さっき翡翠ちゃんに佐々木が話しかけたらしいけど、何か機嫌悪そうだったとか言ってたぜ？」

やっぱり、怒っている……。

どうしたものか……俺はため息を吐いて言った。

「……たまには喧嘩もするだろう」

「ふーん。翡翠ちゃんにお前と喧嘩でもしてるのかって聞いたら『別にっ。何でもないっ』とか言ってたらしいけど、やっぱり喧嘩か……で、やっぱりお前らなんか怪しいと俺は思うんだけど、本当に付き合ってないわけ？」

戸塚が言った言葉に、俺はため息を吐いて否定した。

「あいつは、誰とも付き合わないよ。どうせいつか外国に戻るんだから……」

――そう……いつか。

翡翠はこの世界を去るのだろう……俺はいつもの窓際の席で外を眺めていた。

今日は朝から雨が降っている。

時折チカッっと空が白く光る雷が、雷鳴を轟かせて激しい雨とともに騒いでいる。
窓に映る雨の螺旋図と、鉛色の雨雲が俺の気分を余計に沈ませるようなその天候にため息を吐く。
「――戸塚……。なんか今度合コンあったら誘ってくれ。俺、少し気晴らししたい気分だ」
「え？　あぁ、いいけど、翡翠ちゃんも連れて来てくれたらだ」
そう来ると思った。
「あのな……一応誘ってみるけど、出来ればアイツ抜きで行きたい。保護するの俺の役目だし」
「じゃ、違う合コンの時には翡翠ちゃんを連れてくるって約束しろ」
「……あいつがいいって言ったらな」
俺はそう心なく答えた――。

そして授業が終わり現在――。
食堂にいる俺と翡翠は、翡翠がそっぽを向いて何も言わないで日替わり定食を食べる。
火曜日の日替わり定食は『サバの味噌煮定食』。
ちなみに明日水曜日の日替わり定食は『ビビンバ丼』で翡翠の大好物だ。

好物ではないもののあっという間に完食した翡翠は、トレーを下げに席を立つ。
視線でそれを追う。
翡翠は食堂の食器の返却カウンターにトレーを置くと、テーブルには戻って来ずに食堂を去ろうとしていた。
「あっ……おい！」
俺は慌ててそう呼び止めて食堂を出たが、廊下に既に翡翠の姿はない――。
ど、どこ行ったんだ……っ。

もう……勘弁してくれ。反省してるから……。
ほんと俺、なんかアイツに振り回されてばかりじゃないか……？
その時、時計を見るともう教室に向かった方がいい時間だった。
俺は教室へ向かう――。

一体翡翠はどこへ行ったのか、そればっかり頭に浮かぶ。
あ、そうだ。
俺は連絡を取ろうとポケットから携帯を取り出した。
「あ」
メールが一件来ており、それを開くと翡翠からのメールだったのですぐに開く。
しかしメールを開いた瞬間、俺は目を疑った。
そこに書かれていたその文字は拒絶を示す文面だった。

件名：藍人へ
本文：しばらく、珀矢の所に世話
になる事にする。
メールでＯＫは貰った。

今日から行っていいそうだ
から。

そういうことで。

―翡翠―

「そ、そんな……嘘だろ……？」
携帯を力なく閉じた時、雷と雨が交差する悪天候はさらに輪をかけて激しく外を騒がせていたのだった。

――――……

――――……

つづく。

13　拒絶

俺は授業が終わって翡翠に電話した――。
「あ、もしもしっ？　翡翠！？」
俺は携帯からブツっという音が聞こえたのでそう言った。
しかし、聞こえてきたのは翡翠の声ではなかった――。
「……宮部、すまんな。俺だ」
「とっ、東条先輩っ。そこに翡翠いるんですよね？」
「あぁ、まぁいるが……出たくないそうなんでな。代わりに俺が出たというわけだ」
お、俺と……話したく――ない……？
俺は衝撃を受けて思わず沈黙した。
東条先輩は電話の先で翡翠に何か声をかけているようだったが、ため息を吐くと俺にこう言った。
「心配するな……何があったかは知らんが翡翠の部屋くらいいくらでも用意できる。しばらく預かってほしいと言うのでな……お前に一応連絡はしておかなくてはと思ってはいたので、ちょうど良かった。後でまた俺から連絡する。もう迎えの車の中だ」
あ……ちょ、ちょっと待ってくれよ翡翠……っ。
何か言おうとしたが東条先輩に言っても仕方がない。
俺はそうですかと言って電話を切った。

――や、やっぱり寝込みを襲おうとした代償は大きかったようだ。
俺はなんてことをしたんだぁぁぁぁと仰け反っていると、戸塚が声をかけてきた。
「おぉ、何やってんだ？」
「あ……戸塚か。別に、何でもない……」
「それより宮部、急に決まったんだが今日合コンあるぞ？　来るか？　って言っても翡翠ちゃんどうするんだ？　構内にまだいるんだ

ろ？」
戸塚の一言に、俺はため息を吐いて首を横に振った。
「あ……いや、さ、先に帰ると連絡があったからいない」
「お、じゃあ行けるか」
「そうだな……ちょうど良かった。恩に着る」
「別にいい。それより、約束忘れるなよ？」
戸塚の期待に、俺は再びため息を吐く。
期待に応えられるのだろうか――。
翡翠……そんなに怒らなくてもいいのに……。
あれは半分事故だ――と言っても、あれは確かに自分が招いて否は俺にある。
なんだかやけくそだ――。
今日は合コンでぱっと騒いで忘れよう。

俺は戸塚の誘いに乗って合コンに行くことにした――。
俺は別にいつも自分から誰かを狙ってアプローチをするといったことをしない。
勝手に気に入られ、勝手にほろ酔い気分で寄って来る女の子を適当に相手しているだけなのだが、帰り道必ずと言っていいほどにホテルへと誘われる。
女の子というのは意外と大胆だと思う。
いつもなら別に断るのも面倒だし行っていたと思う。
しかし、俺は携帯の時間を見るともう時刻は終電に近い。
「悪い。また今度。今日はちょっとレポート仕上げなきゃいけなくてさ……メールでもなんでもして」
とそう言うと、俺は電車に乗った。
女の子と電車が反対方向なのが救いだった。
雨はもう上がっており、傘は居酒屋に置いて来た。
不満そうな言葉を投げて仕方なく同じ駅に来たその女の子は、上の下といった所か。

戸塚に連れられる合コンはレベルは高めだ。
悪くなかったものの、気乗りがしなくなったのだった。
そして俺は携帯を気にしていた。
翡翠からのメールではと、携帯が震えるたびにトイレに立ったりもしていた。
……しかし、来ていたのは東条先輩からの電話の不在着信とメールだった。
トイレで電話をしてみた俺に東条先輩は言った。
『とりあえず報告しておこうと思ってな……。翡翠には広めの部屋を与えてやったが、使用人の話だと寂しそうに窓の外ばかり眺めているそうだ。俺も様子は見に行ったが、別になんでもないと言った。しかし、やはり元気はないように見えた』
「そ……そうですか……」
『なんかあったのか。お前のことを聞くと何も言わず黙ってしまうのでな――連絡くらいしてやれと言ったが連絡は？』
「い……いえ……ありません。すみません……明日、そちら伺ってもいいですか？」
「うーん。ここ何日か平日は少し用があるのでな。父親の会社の仕事も少し手伝っているので申し訳ない。まぁ、翡翠ひとりじゃお前に会いたがらないだろう。土日は駄目か？』
「あ……ちょっとバイトが……」
『ふーむ……まぁ出来るだけ力になってはやりたいが、こればっかりはどうにもなぁ……じゃ月曜にでも来い』

「はい、すみません。それじゃ……」

――俺に、会いたくないか……。

参った――。

こんなことになるなんて……。

電車の中、思えば終電で帰るのは久しぶりだ。

俺は酒で少し酔っ払ってはいたが、どうも気になるのはアイツのことばかり。

電車は俺のマンションのある駅に止まり、人ゴミを掻き分けて電車を降りる。

改札口を抜け歩く帰路は、いつからこんなに寂しかったのだろう。

翡翠と昇ったアスレチックのある小さな公園。

俺はブランコを揺らした。

『あのおじさん、がっはっはって笑うだろう？　ああいうヤツはいい者だ』

――そうだな。確かにあのおじさんはいい人だ。

そう会話したことを思い出すと、何だか目に熱いものが込み上げて来て切なくなった。

ブランコは揺れていない。

翡翠が乗ってこぐ音がしない夜の公園は、まるで違う公園に来たかのように静寂が支配していた。

「やっちまったなぁ……」

俺はそう呟いて公園を後にしたのだった――。

――――……

――……

つづく。

１４　その程度

事件が起きた火曜日。
合コンに行って部屋に帰ってきてももちろん翡翠はいない。
俺は翡翠がやっぱりいないことを実感させられた瞬間だった。
ひょっとしたら戻って来ているかとも僅かに期待していたのだろう。
しんと静まり返った部屋はとても寂しく、ため息を吐きながらベッドにうな垂れた俺はすぐに寝ていたのだった。

水曜日――。大学へ行っても翡翠の姿は見当たらない。
食堂で翡翠の好きなビビンバ丼に手をつけていたがため息が出る。
翡翠が今日はひょっとしたらコレを食べるために来るかと思っていたのだ。
ビビンバ丼の日の喜びようと言ったら少しうざいくらいだったのに……。
突然俺の俯く視界にトレーを置くのが見え、はっとして顔をあげるとそこには東条先輩がいた――。
呆れたように微笑んだ東条先輩は、聞いてもいないのに翡翠の話をして来た。
東条先輩によると、東条先輩が渡したプラチナカードとＳＵＣＡＩに一万円入った交通機関利用のための十分な暮らし……。俺といる時とは天と地の差だ。
別に好きに使えばいいと渡したらしいが、と……東条先輩……さすがにプラチナカードはやりすぎでは……。
俺は引きつりながらもとりあえず俺は『とにかく、翡翠を……よろしくお願いします』と挨拶を言って何だか切なくなった。
今度は俺が言う羽目になるとは、思ってもみなかったのである。

翡翠がいない大学構内――。

授業が終わるとそそくさと駅へと向かい、電車に乗る帰路――どこか物足りない。

人ゴミの中、翡翠の黒髪の様な女の子を見ては振り返って違うと肩を落とす。

ため息を吐いて降りるいつもの駅――。

気分が重く感じられる。翡翠はいつも飛ぶようにはしゃいでちょろちょろとする翡翠を注意したり、呆れて冗談を言ったり、そんなことが普通だった――。

そして、自分の腕にいつも掴まっているようにと言っていたその温もりがないことが一番応えていた。

家に帰っても気分が沈む。

翡翠が食べると言って買ったハーゲンダッツのチョコナッツ味のアイス――。

アイツは俺のアイスを勝手に食べたんだし、俺も食べてやろうかと思って蓋に手をかけた。

しかし、ふと……もし帰ってきたらアイツは怒るだろうなと思うと、アイスは大事に冷凍庫に残しておいてやるより他はないと思い直した。

木曜日――。

食堂には東条先輩が俺を待つように端っこの席から俺を見て頷いていた。

「先輩……翡翠どうしてますか？」

「まぁ部屋与えてるからそんなに知っているという訳でもないが…

…」
翡翠は、調べたところプラチナカードでとくに何か大きな買い物をした様子もないらしいが、昨日は少し出かけていたようだ。しかし、どこへ行っていたのかは東条先輩も忙しくてそれは知らないと言う。
「――ところで、宮部……。こんなこと聞くのは無粋かもしれないが、お前何か翡翠にしたのか？」
ぎっくぅっ……いつか聞かれるかとは思ってはいたが、やはり聞いて来た――。

――鋭い。というか絶対に聞かなかっただけで、この人の場合気付いてはいたと思う。

もはや否定するだけ無駄だと思って、不本意ながら俺は経緯をおおまかに話した。
東条先輩の軽蔑するような視線、それは覚悟の上だった。
ため息を吐いた東条先輩は、食事の手を止めた。
「お……お前なぁ……怒って当然だ。大体まともに正面からぶつかる勇気もないくせに寝込みを襲うなど、最低だぞ……」
東条先輩の言う事は正論だ。
俺も物凄く反省していると伝えると東条先輩はため息を吐いた。
「わからんでもないぞ？　ただ、俺が言っているのは好きなら好きと何故言わないということだ」
「そ……それは――」
口を噤んだ俺に東条先輩は続ける。
「――まさか、女神だからとかそういうことを言うわけではないだろうな？　何の関係がある。そんなこと」
「で、でもそれはかなり大きな問題だと――」
そこまで言った俺にため息を吐くと東条先輩は食事の済んだトレーを持って席を立って言った。

「では、その程度の気持ちということだな……付き合ってられんな……ったく……」
とそう言って東条先輩は「とにかく月曜日な」とさらに言い残し去って行った。

東条先輩――その程度ってわけじゃないよ、俺。
そんなことくらいわかっている。かなり真剣ではある……。
その程度の気持ちでこんなに悩むわけがない。
でも、翡翠に連絡しても全然メールも返信なし。電話も出ないし。
どうしたらいいか……わからないんだ……っ。

――でも、東条先輩が言うのも確かに言えてるかもしれない……。

俺は女神だというのにアイツのことがどうしようもなく好きになってしまっていて――、そうなってはいけないと自分に言い聞かせて来たのかもしれない。
だが、そうすれば治まるものでもなく、俺はどんどん惹き込まれて抜け出せなくなるほどに好きになっていると、この三日間思い知らされるようなこの翡翠のいない寂しい日々――。
俺は、間違っているのだろうか――。
翡翠がただ笑っていてくれればいいなんて、自分の気持ちを抑えようとしただけだったのか？
だからってどうすればいい――。
女神なんかに恋なんか……。
どうせ、いつか消えていなくなってしまうとわかっているのに――。
消えてなくなればいいのに、こんな感情。
俺はトレーを持ち、席を立った。
その時だった――。

電話……？

俺はトレーを置いて電話を開いた。

「！」

翡翠――――！

「もっ、もしもしっ！？　翡翠！？」

「……屋上」

ブツッ……

え？　おい、それだけ？　って『屋上』って随分そっけない一言だ。

ていうか、屋上って……今、屋上にいるのか！？

俺は走った。

屋上まで猛ダッシュしていた。

息を切らしながらもなんとか辿り着いた屋上に、翡翠はいた――。

「はぁ、はぁ、ひっ……翡翠っっ……！」

翡翠は何も言わずに俺の前まで歩みを進めてきた。

その顔は俺の顔を見ないで少し景色を見ながらというものだった。

すぐ目の前まで歩みを進めた時、立ち止まりため息を吐いた。

「東条先輩がどうしてもお前と話せと言うので来てやった」

な、なんですと――！？

東条先輩……あの後翡翠に連絡を……！？

俺は戸惑いながらも翡翠に頭を下げた。

「ご、ごめん！　本当にごめんっ……出来心でやってしまったことを簡単に許して貰おうとは思っていない。ただっ……」

俺はそこまで言って思わず口を噤んではっとした――。

俺の馬鹿――。何を言うつもりだ。

翡翠、不機嫌そうに眉吊り上げてるし……早く何か言わなきゃ。
えとえとっ
「何だ。ただなんだと言うんだっ……」
あぁぁ、完璧怒っている……。
慌てふためく俺に翡翠はため息を吐い言った。
「――話はそれだけなら、私はもう行く」
そう言って構内に戻る階段を降りようとする翡翠の腕を俺は掴んだ。
「痛いっ……離してくれっ」
「翡翠、いいから聞けッ……お前のこと女神だからとか何だとか理由つけて諦めようと、俺はただ見守ろうとしていた。でももう駄目だ」
「何を――」
翡翠は俺の言葉に怪訝そうな表情を浮かべていた。
やはり、言わない方がいいだろうか――。躊躇もした。
しかし、もうここまで言ったのなら言うしかない……。
いや……やはりやめておいたほうがいいだろうか。
と悩んでいると、翡翠が冷たく言い放ってきた言葉があった。
「何か言いたいことがあるならばさっさと言えばいいだろう。私は帰る」と――。
俺はついその言葉にかっとなり、どの道言おうとしていた言葉を乱暴に吐いた。
「簡単に言えたらこんなに苦労はしていない！　大体な、お前のことがどうしようもなく好きだなんて言えるわけないだろうッッ！！」
そう言って俺は翡翠を抱きしめていた。
――東条先輩の言うその程度。

やっとわかった――。
俺はただ翡翠が女神であることが原因で、好きになっても無駄だと思っていた。
しかし、翡翠の姿を見たらやっぱり抱きしめたくなった。
たとえ翡翠の拒絶を味わったとしても――伝えられずにはいられなかったこの想い……。
翡翠は、どう思ったのだろう。先程からもう長く時間がたった気がするが何も言わずに俺に体を預けている。
動けない――。翡翠の顔も見れない――。
ただ、たった一晩いなかっただけだというのに、翡翠の髪の毛から漂って来るシャンプーの匂い……。
それは俺と同じシャンプーの匂いではないことに、俺は距離を感じて切なくなっていた。

沈黙したまま、翡翠は俺の告白に動揺しているだろうか。
翡翠はどう思っているのだろうか。
嫌な沈黙の時間が続く中、これだけは言える――。
翡翠が俺にどう答えようと、後悔はしないと誓うと――。

そしてもう後戻りは出来ないということにも、俺は気付いていただろう――。

――――……

――……

つづく。

15　後悔先に立たず？

「翡翠……？」
「……」
翡翠は何も言わない。
そろそろ何か言ってくれてもいい頃合いだというのに、まるで地獄のような時間が続く。
俺はそっと身を離して翡翠の顔を見た。
「わっ……！　な、何泣いてるんだ」
き、気付かなかった――。
また泣いた……。
「泣いてなど……いない……っ」
翡翠はそう言って俺の肩で涙を拭く。
ちょっと待て、だから……泣いてるじゃないか。
仕方ないな――。相変わらず素直じゃない。
俺はそう思いながらも翡翠をひょいっと軽々と抱き上げると、屋上の階段のある入り口から見て死角になる横側の場所に歩みを進めた。
床に座り込んで翡翠を少し横に降ろす。
「――翡翠……」
俺は翡翠を抱き寄せて頭を撫でた。
「……俺は翡翠がどう思っているか聞きたいだけだ……それとも何か思い出したのか……？」
翡翠が黙りこくっている間、言葉を穏やかに紡ぐ俺は何かに吹っ切れたような気持ちだった。
言ってしまうと返事などどうでもよくなってくる。
今ここに翡翠が傍にいるということ――。
それがたとえひと時のものであっても、手をこうして焼かされていても、俺は久しぶりに安堵していた。

でも俺、いつから世話焼きになったんだと思ってもいた。
「――ここまで来たら、もう今までお前に言えなかった事全部言おうかな……」
翡翠が一瞬その言葉に顔を見上げた。
が、やはり黙っている――。

「――お前、時々寝言で『リュシファー』って名前を呼ぶ。それから、俺にしがみついてくる。……その人、あっちの世界のヤツだろ？　でもって俺の予想は……お前の恋人……違うか？」
「！」
やっぱりな……本当言うと、そのこともあって言えなかったのかもしれない。
勝てるわけがないだろう。人探しに来ているだけで知り合ったこの世界の住人の俺と、元の世界で愛し合っていたヤツ。
どちらに勝算があるかなんて目に見えていた――。
それでも、こっちに来ているってことは離れ離れ……。寂しくはないのかなとも時々思っていた……。
他の男の所に転がり込んで、浮気でもしたいならお応えしても一向に構わなかったが、翡翠はちっともそういうわけでもなさそうだった――。
純粋に人探しに来ているだけなのだろうと俺は思っていたのだ。

それでもずっと気になっていたその人物について、真意が聞きたかった。

他の事情より、俺はそのライバルの情報が知りたい――それだけだった。
翡翠は少し驚愕の表情を浮かべてため息を吐くと、俺を目に哀しそうに涙を溜めて見つめていた。
でも、今慰めればきっと翡翠はそのまま答えないだろう。

俺はじっと祈るような気持ちで翡翠に視線を注いだ。
諦めたらしく翡翠は静かに口を開いた。
「やはりお前には敵わないな――。いつから知っていたんだ？」
え……俺にはやっぱり敵わないって？
どういう意味だ？
少なくとも翡翠がいつも優位に立っていた筈だ。
俺は少し怪訝そうな顔をしながら、病院で点滴を受けていた時にその名を口にしたことを告げた。
「そう……か。じゃ、結構長い間黙っていたのだな……。そういうところは似ているな……」
ん？　似ているって――どういう意味だ……？
俺とそのリュシファーってヤツが似ているとでも言っているのか？
「ひ、翡翠――わかるように説明してくれないか。もういい加減話してくれてもいいだろう。それに、お前東条先輩のこと兄上って呟いて泣いただろ。コーヒー嫌いなのかって聞いた時も泣くし、その前に俺を異世界に連れてった時もじっと見たかと思ったら泣いて困ったし、それから可愛いヤツだと言った時、東条先輩がお前を妹みたいだなと言った時――それに、そいつの名を寝言で呟く時も必ず泣くッ……一体、何なんだッ。もう黙って知らないフリをしてやるのも限界だっ」
何故か言っている内に感情が高ぶって来た俺は、やけくそに今まで押し隠してきた思いを全てぶちまけていた。
もう、振られようが何だろうがどうだっていいと思った。
答えもどうせわかっていた。
俺は自分のことを後先を考えないタイプでは決してないとそう思っていたが、よく考えてみれば後先を考えないことも多い気がしてきた。
だんだんと忍び寄る後悔の念に俺はぎこちない微笑みを浮かべ始

めていた。

「――そういうところは似ていないな……言っただろう？　時期ではないと……」

翡翠は呆れた様にあっさりと俺の質問をスルーして微笑んだので、俺は苛立ちが頂点に達していた。

俺は翡翠の腕を掴み、乱暴に壁へと押し付けた。

「痛ッ、ちょっ……アイト……！？」

翡翠は動揺を見せて俺を見上げていた。

俺はなるべく穏やかに言おうとしたが出来なかった。

「翡翠……何も言わずに俺を振り回すのも、もういい加減にしてくれ……！　俺、お前のことちゃんと理解したかった。ずっと……聞いちゃいけないと我慢してここまで来た。――面倒も見てやった。お前は、俺の気持ちを何だと思っている……！？　大事なことには何も答えないで……ッ、お前は少し勝手すぎる……！」

俺の目にはついに涙まで浮かんで来て、はっとして俺は翡翠の前から走り去っていた。

翡翠の呼ぶ声がしていたが、振り返らずに俺は走って家まで帰っていた。

そして――。

授業をサボった挙句に家に帰ってから物凄く後悔した――。

うわーーーー駄目だ駄目だ……ッ、俺は翡翠のあの性格を知りながら何て事を言ったんだ……！！

ますます溝が……ッ。み、溝が……俺は深い海に沈んで行くみた

いだ。
終わった――。
東条先輩が俺に与えてくれた微かな希望――。
わぁ～……俺、もう生きていけないだろ……。
翡翠、人探しなんてやめて帰ってしまわないだろうかとか、東条先輩に連絡した方がいいだろうかとか……。
しまいには最低だが合コンで気に入られた女の子に連絡でもしようかとまで考えた。
いや、わかっている。それは最低だ――。
部屋の中をうろうろと発狂しそうなほどに行ったり来たりと、とにかく落ち着かずに俺はベッドに潜り込んだ。
胸がずきずきと痛んで苦しさを訴えている。
……。全部アイツのせいだ……。
はぁ……と俺はため息を吐いて眠ったのであった。
つづく。

16　夢から醒めて

――なぁ、覚えてるか？

『何だ？』

――もし父上に認められなかったらかけおちでもしようって言ったの。

『あぁ、言ったな』

――あれ、本気だったのか？

『俺が冗談でそんなこと言うと思うか？』

――犯罪者だぞ？　犯罪者っ

『はは……何を言うかと思ったらそんなことか。……あぁ、喜んでなってやるとも。あと、逃げ切ってもみせると思っていた』

――！　……ばっ、馬鹿じゃないのかっ！？　何を大真面目にそのようなことをっっ……か、からかっているのだな？

『ん？？　俺のこと信じていないのか？　信じろ――――。それに、俺は女神と禁忌を犯した馬鹿者だ。罰でもなんでも喜んで受けるつもりだ。はは……、最愛の人のためならなんとやらだ』

――リュ、リュシファー……

――――……

――……

がばっと俺は起き上がった。

え……？　あぁ、夢――？

……翡翠の声だったよ……な――？？

時計は朝の五時を差し――起きるにはまだ早い時間だが、かといってもう眠れるような気もしない。

そして思い返してみる先程の夢――。

夢に見るほどに俺は気にしているのだろうか……。確かに俺は気にはなっているが――今のは……。

声だけだったが、なんかどこかの広い庭園みたいな所で綺麗な薔薇が咲いている場所で語らう翡翠とソイツ。

それにしても相変わらず照れて素直な物言いをしていなかったな、翡翠のヤツ。ほんと、もう少し素直に嬉しいとか言えばいいのに。

その隣で翡翠とベッドで語り合うみたいに優しく穏やかな口調で、そして迷いのない翡翠への強い気持ち――そんな言葉を紡いでいたあの男。――なんか悔しい……。俺、あんなに翡翠を安心させる程に迷いのない言葉なんか……言ったことがない――。夢とはいえ、これは翡翠の不安な気持ちなのだろうか――それがあの男の言葉で溶けていくのがよく伝わって来るような会話だった……。

俺はこの夢の男みたいに安心感とか与えられていないだろうし、翡翠も俺をそこまで信頼してはいないだろう。

俺は胸がズキッと痛む早朝を迎えていた――。

そしてため息を吐き、携帯を開いた俺の目に飛び込んできた――

『新着メール　1件』の文字。

「！」

――翡翠からだ……！！

俺はおそるおそるメールを開こうと息を呑んだ。いや、その前に深呼吸だ。

見るのが少し怖い。でも、少しだけ期待もしている。

心臓が高鳴る中、俺は目を瞑ったままボタンを押したはいいが、目を開けるのを躊躇してため息を吐いた。

そして決意をして見開いた俺の目に飛び込んできた――翡翠にしては珍しい長文のメール。

驚いたものの俺はじっくりと一字一字を丁寧に目を通していった。

“Ｒｅ：アイトへ

本文：ごめん。

勝手だったかもしれない。

先に謝る…。

でもどうしてもお前の聞く質問に私は答えられない。

それに今言ったところでお前にはわからぬと前にも言ったことがあるが、やはり時期が来るまでは言えない事を、許せないとお前が言うならそれは仕方がない。

珀矢の所に来てから二日。

お前と過ごす時間が、何だか遠く昔みたいに感じる。

正直、寂しいと何度思ったか知らない……。

でも、私といる間にお前がそうやって色々と知らないふりをして密かに抱えて来た想いを知ると、申し訳なくなった。←昨日のこと。

その……ありがとう。
それとあと、ひとつだけ。

私はアイトの事は好き。
一緒にいると楽しい。
安心する。

どうしても帰って来て欲しいなら、別に帰ってやっても構わないが、昨日怒ってたし……怒ってるなら怖いからまだ帰らないっ☆

珀矢の家も悪くないしな。

それだけだ。

―翡翠―

ひ、翡翠……っ

俺は携帯をにやけながら持つ手を震わせていた。
素直じゃないものの、帰ってきてくれる光が見えるっ。神様――ありがとうと俺は感謝した。
とりあえず落ち着くんだ俺、このメールはとりあえず保護――。
女子みたいなことを俺はしていると気付いた時、思わず保護をやめようかと思ったがため息を吐いてそのままにした。
全然落ち着けるわけがなかったのだ。気分の高揚を抑える事が出来ず俺は一人でにやけて仕方がなかった。
ふとメールの受信時間を見ると、メールが来たのはほんの三十分前のこと。
「電話……したら出るかな？　アイツ……」
俺は発信履歴の“翡翠さま”という名前を見つめながら発信ボタンを押すかを悩んでいた。
あ、ちなみにこの翡翠さまというのは翡翠が面白がって勝手に変えたのだった。
それ以来変えてなくてそれを見るたびにイラッとした時もあった。
しかし、今はなんとも都合のいい解釈だと思うが、確実に『翡翠さま』と入れておいてよかったと思っていた。
一度深く呼吸をすると、発信ボタンを押した。

プルルル……

ブツッ
「あ……アイト？　も、もう起きたのか？」
翡翠が意外そうにそう言った。
俺は「あぁ、早く目が覚めてな」と言った後、穏やかにこう言った。
「――怒ってないから、今すぐ東条先輩に置き手紙でもして帰って来い」

翡翠は少し間を空けて『う……うん』と戸惑いを見せながら言って電話を切った。
やはりご飯でも作った方がいいかと思い、俺は台所に立った。そういや、昨日飯も食わなかったから腹が減った。
パンがあるから、ベーコンと卵でいっか。あ、でもこんなのすぐ出来る。
それに翡翠だって何時に帰ってくるかも実際わからない。
帰ってきてから作り始めても遅くはないなと思い直した俺は、台所からトイレへと向かった。
用を済ませて部屋に戻ろうと廊下を居間へと進み、寝室のベッドが見えた時に俺は足を止めた。
枕元に僅かに見える黒い髪――。少しもそもそと動く布団――。
既に翡翠さまはご帰宅なさっていたかと、俺はほっとした。
しかし、どういう顔をしていいのかわからない。翡翠も俺も同じ気持ちなのだろう。
ここは大人に、俺から口を開くべきだろうなとはわかっていた――。
俺はベッドへと近づいて、ため息を吐いて言った。

「おかえり――」と――。

――……

つづく。

17　翡翠さま

藍人のところへ戻ることにした。
とりあえず急がなくてはならないので
また大学でっっ
世話になったっっ

―翡翠―

東条先輩に書いて来たという翡翠の置き手紙の文章――。
かの有名なあの東条珀矢にその様なタメ口を聞く翡翠は、怖いものとかないのだろうか――。

あ、そうだ。
苦手なのは真っ暗な所。夜は間接照明を少し点けていてやらないと、翡翠は怖がってトイレも行けない。
本当に子供のようなことを言う女神だと思う。

翡翠はベッドに潜り込んだままで俺に『た、ただいま……』とぎこちなく言って目だけ覗かせたので、俺は思わず笑った。
「いつまで隠れてるんだよ……。まぁいいけど」
「アイト……」
そう言った翡翠は、ゆっくりと起き上がって目を合わせずに慌てて言った。
「あの……あのあの、あのメールに書いたのはっ。ぇぇとあのっ……っ」
どうやらあのメールに書いたことを少し否定したいようだ。
しかし、メールに書いてあったことはもうどう取り繕っても俺はもう見てしまったものだ。
後悔先に立たず――。

俺はお互いにそんな思いを抱いていたのかと微笑んだ。
「……いいよ。別に否定しても――。俺は、お前と一緒にこうして過ごせるだけで満足……その、本当に悪かった」
俺は頭を下げて言った。
翡翠は戸惑いながら慌てた様子で言った。
「あぁぁっあのあのっ……私もっ……謝る。ごめん。色々と都合もあるとはいえ、お前が黙ってくれていたこととか……知らなくてっ……確かに寝ているところを何していると思って腹が立ったのは事実だが、えと、そのっこそこそするくらいなら堂々とすればいいだろうと思って、えとっえぇとぉ……」
……おい、今なんつった??
こそこそするくらいなら堂々とすれば――いいって……。
俺は思わず口を押さえながら驚愕していた。
翡翠はといえば顔が真っ赤である。自分が恥ずかしいことを言ったときちんと認識している様子だ。
しかし、俺は敢えて慌てふためいている翡翠に聞いた。
「お前、それ……何言ってるか……わかってんの？」
「あぁぁぁぁっいやっ、だからっ……別にそういう変な意味じゃなくっ。ぁ、いや、あぁぁ……もう何を言っているか、わからなくなった……」
結局、支離滅裂になってしまった翡翠は布団に潜り込んでしまった。
ていうか翡翠……さっきのは大胆発言だ。
まぁ俺としては好都合――だけど……。
……ってそうじゃない。いや、翡翠も『好き』と言ってくれたようなものじゃないか。
メールを否定するつもりが言葉でも素直にそう言ってしまい、これはしばらくは布団から出てこれない程に恥ずかしいのだろう。
俺はため息を吐きながらもふっと微笑むと、少しだけ翡翠を放っておいてやることにした。

ところが俺が歯を磨きに洗面台に向かおうとすると、翡翠もやって来て俺を通り過ぎるとトイレに入った。
呆れて俺は洗面台で歯を磨いていたが、トイレから出た翡翠も手を洗いに洗面台にやって来て、一緒に歯を磨き出した。その間は終始無言――。俺が鏡越しに映る翡翠を見ると、ぷいっとそっぽを向いていた。
やれやれだ――。

先に歯を磨き終えた俺は、台所に行ってパンをトースターに入れる。
冷蔵庫から卵とベーコンを取り出してスクランブルエッグを作ってベーコンをフライパンで焼き始めると、翡翠がその横を通過して再び布団に入ったので振り返ると、やはり布団に潜っていった。
ため息を吐きながらベーコンを焼いていると、食欲を増すようなベーコンの焦げる匂いがそこに発ち込め始めた。
そして丁度いい頃合で火を止め、スクランブルエッグとベーコンを焼きあがったパンの横に一緒に皿に乗せる。
こんな作業はあっという間に終わってしまう――。
あとは翡翠を呼ぶだけかと思いながら、テーブルに出来上がった朝食を乗せた皿をコトッと置くと、翡翠は飛び起きてテーブルへと走ってきた。

――お、お前は犬か。

俺は絶対に翡翠さまに口にしてはならないツッコミを脳裏でして、ぎこちなく微笑んだ。
しかし、翡翠はちらっとそんな俺を見たかと思うとすぐに視線を逸らして朝食に手をつけ始めた。
やれやれと呆れながら、俺はグレープフルーツジュースをコップに入れてからテレビをつけた。

テレビに映ったニュースでは、何やら最近起こっている不審な出来事について報道していた。
すると突然、翡翠の手が止まり――パンを皿に置くと、驚愕の表情でテレビに食いつくようにニュースを観ていた。
「ん？　どうした？　翡翠」
「しぃっ！　黙っていろっ」
俺は何だと思って翡翠が食い入る様に観るニュースに耳を傾けると、渋谷、新宿、池袋、秋葉原で同じ質問をする不審者がいるのだと言っている。それはおそらく全て同一人物で特徴が一致するらしく、またその質問は『羽根の生えた女を見なかったか』というものとここまでアナウンサーが言った言葉に、俺も驚愕して翡翠を見た。
「翡翠――これって……！」
「アイト――ごめん。今日は大学行かない。少し気になることがあるから調べてみる」
「ひ……翡翠ッ」
「大丈夫。少し出かけるだけだ。アイトは大学へ行っているといい」
「……理由……聞いても、教えては――くれないよな……？」
翡翠は哀しそうな顔で頷いた。
俺はまた胸が痛んだ――。

……あ……

俺、なんかこういう光景どっかで見た気がする。
それが何かはわからないけどこうやって翡翠がひとりで何かを背負って苦しんでいながら、何も言ってくれないことが苦しくて……頼られても何も力になんてなれないのかもしれないと、自分の無力さを恥じるような――。
翡翠が哀しそうな顔をすると胸が痛むのは――そうだ。そういう感じ……。

昔にも、そんな嫌な思い出があったような気がする。
思い出せない――。
でも、何故だかわからないけど翡翠をひとりで行かせては駄目な気がする。

「ひ、翡翠ッ――」
「！」
俺は翡翠を強く抱きしめていた。
驚いて俺の顔を見る翡翠に俺は口づけた。
「アッ、アイト……！？　と、ととと突然何だっ」
顔を真っ赤にして俺から離れて翡翠は言ったが、俺は悪びれる様子もなく言った。
「ははは、いいだろう？　減るもんじゃなし」
ぽかんと口を開けて唖然としている翡翠は、以前自分が言った言葉だと気付いたらしく俺に猛抗議した。
「それからもうひとつ――。したい時があるなら堂々としろとも言った」
と先程の翡翠自身の失態を掘り起こすように言われたそれに、翡翠は顔を紅く染めてはっと俯いてしまった。
あ……お、おい――。
俺は少し慌てて謝ったが翡翠は俯いたまま言った。
「アイ……ト、最近頭回るようになったんじゃないか？　言い返……せない……」
はは……とその後黙って俯く翡翠の頭を撫でて落ち着かせながら言った。
「翡翠――俺さ、お前がどうして女神なんだろなぁ……ってよく思う」
「え……？　何だ……それ。め、女神らしくないと……言いたいのか？」
俺はふっと微笑んで頷いた。

怒るかとも思ったが、翡翠は何故か怒らずに困った様に微笑んで言った。
「そうだ……っな……女神……にしては出来が悪いかもしれん……っ……」
いや微笑んでいたんじゃなかった。ずっと、さっきから泣くのを我慢していたんだと気付いたのは泣いてからの事。
俺は駄目なヤツだ――。翡翠をこうやってよく泣かせてしまうことしか出来ないのかと胸が痛んだ。
そして俺はそれをまた慰める――。
そんな日常をまた、今日から再び繰り返していくのだろうとそう思った――。

――俺は、翡翠が先程なく前に言った言葉の意味を……その時はまだ。
知らなかった――――。

「――翡翠、放課後に俺も一緒に行く」
翡翠が落ち着いた頃に俺はそう言った。しかし翡翠は首を横に振ってひとりで行くと言って聞かない。
苛々とした俺と翡翠は言い合いをした結果。
大学の学食の水曜の日替わり定食であるビビンバ丼を引き合いに出すと、翡翠はあっさりと承諾した。
なんという単純さだろうと思ったが、翡翠にとっての幸せのひとときを奪うその言葉には勝てなかったようだ。
「ビ、ビビンバ丼が食べられないならしょうがない……わかった」
「……か、かなりどうしようもない理由で妥協したな……そんなことで折れていいのか……」
「えぇぇっ！？　ど、どうしようもない理由ではないっ。これは重

大な事件だっ！　私が異世界に来ての一番の楽しみと言っても過言ではないっ！　それを取り上げられるのだぞ？」

物凄くご立腹の翡翠さまは腕を組んで強い口調で言っているが、俺はそこまでとは知らなかった。

い、異世界に来て一番の楽しみが――……あんなたった三百五十円の日替わり定食とは――。

女神の好物がビビンバ丼だなんて、誰も信じないだろうな――。

こうして、俺と翡翠の空いていた時間はビビンバ丼の魅力を語る翡翠さまによって、取り戻されたのであった。

つづく。

１８　リク～翡翠との出会い～

渋谷――ハチ公口。
若者の街といわれるその場所は待ち合わせ場所として多くの人が集まり、携帯で連絡を取り合う若者達はそこら中に溢れ返っている。俺もその中の一人であることに変わりはないが、ひとり待つというのは少し孤独感を覚える。
群れを持たない一匹狼にでもなった気分だ。
勿論待ち合わせの時間になれば群れの中に戻れるのだが、少し早く着いたこの時間ただ待つというのも退屈である。

スクランブル交差点で信号を待つ先は上に見える電光掲示板の液晶――。
『不審者を見たら１１０番』なんて文字が表示されている。

世の中不審者だらけじゃないか――。
俺はふっと微笑んで青に変わった信号を突き進む。

目を止めた前方から歩いて来る俺と同い年くらいの黒い髪の女の子――。

人ゴミで出来た急流の流れにひとり杭を打つかの様に突然そこに歩みを止めた。
人はその杭を避けるように交差して渡っていく中、女の子はど真ん中で立ち止まり俺を真っ直ぐに見ていた。

突然立ち止まったその存在はとても異質な存在だ。
しかし、この人ゴミの中のひとかけらでしかない――。
そんなことここ渋谷では、誰も気にもとめない。

街にそんな不審者など、そこら中に溢れている。

何の興味も示さずにただ通過していく中、俺にはその子だけが色づいて見えた。

近づけば近づくほど整った綺麗な顔立ちについ見とれてしまっていた。

はっとして俺はぱっと女の子の手を掴んで引いた。

青信号の点滅が消える前に走って向こう岸へ渡る。

驚愕の視線で俺を見ていた女の子は次第に涙を目に浮かべ始め、俺に言った――。

「――会いたかった……」

と――。

――――……

――――……

「リクっ、じゃあっちのは何？」

「あ？　あれは、マルキュー。服屋だ」

「リクっ、じゃああれは？　美味しそう」

「クレープ？　食いたいの？　食べたいの？　……いいよ、好きなの選べば？」

この状況は、ちょっとしたデートかもしれない。

あの時、俺はその子を叱ろうと思っていた。

『危ないだろうっ。道路の真ん中で突っ立ってたらっ』
と――――。

しかし、それは言えなくなった。
女の子は何故か俺に抱きついて泣いていた。

芸能人みたいな可愛さの女の子に抱きつかれるのは願ったり叶ったりではあったが、とりあえず路上で泣かれるのはちと困る――。

仕方がなく俺はカフェにこの子を連れて来た。
しかしちっとも抱きついて離れようとしない女の子。
よくはわからないが呆れながらも席について慰めてやっていた。

「名前は？　俺は椎名（しいな）　陸（りく）――リクでいいよ」

女の子の名前は葉月　翡翠というらしい。
名前をお互い名乗ればもう今日から友達だ――。

翡翠は歳は十八歳だったので、俺よりも年上だ。
といってもひとつなので同年代のようなものだった。

翡翠は渋谷に来たのは初めてらしい。
外国に住んでいて日本にしばらくいることにはなっているようだ。
家は従兄弟の二つ年上の大学生の男の家に世話になっているのだとか。

ちなみにひとりで買い物にでも渋谷に来てみたかったのだろうかと思ったら全然違った。
そして目的を聞いて正直、驚いたし変なやつだと思った。
最近、ニュースで話題の背中に羽根が生えた人を探すヤツについ

て調べに来たらしい――。
俺は怪訝そうな表情を浮かべていたが、翡翠は別にふざけているという様子ではなく真剣な表情をしていた。

翡翠は放っておくと興味を注がれるものがあれば、うろちょろと落ち着きがないので手を繋いで歩いた。
しっかり掴んでいないと人に揉まれてはぐれてしまいそうだと俺は思った。
「翡翠さ、ガキの頃成績表に『落ち着きがない』って書かれたことあるだろう」
って聞いたら案の定頷いていた。
でもどうやら学校ではなく家庭教師みたいなものに教わっている様子だ。
翡翠はどこかの金持ちの世間知らずのお嬢様――なのだろうか。
それに、知らないことが多い気がする。
――ひょっとしたらどこか違う世界からやって来たのではと思うほど、不思議な雰囲気が漂っている。
翡翠は「会いたかった」と俺に言ったが、最初意味がわからなかった。
しかし、良く考えたらどこかで会った気もする。子供の頃？　う……ん。わからない。覚えてないや。

俺は携帯が震えているのでメールだと画面を見ると、待ち合わせのヤツらが着いたらしい。
苦笑しながら携帯をパタッと閉じる。
「？」
翡翠が首を傾げている。
何だろう……待ち合わせの間の暇つぶしのつもりが、まだ翡翠と一緒にいたいと思う。
アイツらはいつでも会えるけど、翡翠はレアキャラだ。

さっきも一度少しひとりにしたら水商売のスカウトに声かけられたりして慌てて救出した。
キャッチだとかうろうろといるから女の子は大変なんだってその時俺は翡翠に教えた。
初めて渋谷を訪れた翡翠を、俺は放っておくことは出来ない。
これだけ可愛ければ変なヤツに目をつけられてもおかしくない。
それに翡翠はこの知らぬ街で俺以外翡翠を知る者はいなくなる。頼る者もいなくなってしまう世間知らずの美少女と、単なる遊び仲間の天秤。
もちろんそれは翡翠の方に傾くに決まっていたのだ。
俺はため息を吐くと『何でもないよ』とにっこりと微笑んだ。
「??」
翡翠は首を傾げながらも微笑んでクレープを食べ終わると、思い出したかのように携帯の電源を入れた。
「ん？　ていうか切ってたの？」
「電車のアナウンスで『携帯電話の電源をお切りください』と聞こえたので切ってそのままだった」
「え……あぁそう……律儀に守る必要なんかないんだよ……ははは」
俺は笑って言ったが、その時電源が入った翡翠の携帯はすぐに鳴り出した。
「――あ？　あっ……やばい。アイトのことすっかり忘れてたっ！」
慌てながらもおそるおそる通話ボタンを押した翡翠は――電話口から聞こえる怒鳴り声に肩をすくめた。
どうやらそれは世話になっている従兄弟からの電話のようで、話の内容から察するに従兄弟は翡翠を大学に一緒に連れて来ていた筈なのに、突然いなくなった翡翠を探しても見つからず、おまけに翡翠が電源を切っていたために電話も繋がらずに怒り狂っているようだ。
そ……そりゃ心配するに決まっているなと、俺は呆れてため息を吐いた。

電話を切った翡翠は苦笑を浮かべて帰らなくてはいけないと俺に告げた。
「しょーがないな……お前は」
俺はぎこちなく微笑む翡翠に連絡先を聞き、赤外線通信で電話帳を交換した。
これでいつでも連絡は取れる。

最後に手を振って微笑んだ翡翠の笑顔――。
それを見た時――俺はふと何かを思い出しかけた気がしてはっと翡翠を呼び止めようとした。
しかし翡翠は気付かずに走って改札を既に抜けている。
あ……まぁいいか。どうせまた連絡とれるし。

あれ？　でも、何思い出しかけたか忘れた――何だっけ？

……。

さ、さて。
帰るかぁ……そのうち思い出すだろう。

俺はＪＲではなく地下鉄の階段を降りて行った。
東京メトロ半蔵門線のホーム。
そこで翡翠の事を考えていた。

少し変わったコだけど、めちゃくちゃ可愛かったな……。
美少女の番号をゲット。
今日はついてる日だなぁ～。

電車の中で、翡翠にメールを送った。
そして少ししして返って来た翡翠の返信メール。

件名：Ｒｅ：翡翠へ
本文：あっこちらこそ今日はありがとう★楽しかった☆

うんっ。全然メールとか電話とかしてくれてＯＫだ★

わりと暇だし。

とくに土日は藍人もバイトで忙しくて構ってくれないんだ（ノД`Ｔ）うぅぅ……

じゃあまたっ（´Д`）ノシ

―翡翠―

俺はその文面を見て、つい、ふふっとひとり笑ってしまっていた。

――――……

つづく。

１９　夜道の不審者（前書き）

今回少し長い話になってしまいました。
４９００文字台（汗）

19　夜道の不審者

「ご、ごめんなさい」
翡翠は帰って来るなり俺に怒鳴りつけられて正座させられている。
ため息を吐いて俺は腕を組んで目の前に胡坐をかいて座っている。
時折翡翠は様子を伺うかのようにちらっと上目遣いで俺を見る。
視線が合うと慌てたように視線をぱっと下へと向けるのだ。
多分、俺はものすごく怖い顔をしているのだろう。
「ひとりで行かないって言ったよなぁ？」
「あぁぁ、はいっ。あぁあのっ……つい、気になって仕方がなくなって――」
ぎこちなく困った様に微笑んで言われたそれに、俺は翡翠を一喝した。
「だからって携帯の電源まで切って俺がどれだけ探し回ったと思っているんだっ」
「ひぃぃぃ……あ、アイト……電車のアナウンスが電源を切ろというので切ってそのまま忘れていてっ――」
「――言いたいことはそれだけか……」
「……ご、ごめんと言っているのに……」
翡翠は尚も小さく肩をすくめて上目遣いで俺を見る。
だから……それは可愛いからやめて欲しい。
今度の今度こそは勝手すぎると怒ってやろうと思ったのに、これでは良心との戦いになってしまう。
仕方がない……許してやるか。しかし――。
「約束――わかっているな？」
と俺は言った。
翡翠は口を開きかけたが俺の口調の冷淡さに諦めたらしい。

「ぁぅ……ビビンバ丼……」
そう――。
くだらないようだがビビンバ丼。
翡翠の好物である水曜日のビビンバ丼の威力は大きい。
――ひとまずそれだけはけじめをつけておこうと俺は思ったのだ。
だがそれは水曜日になった時、この翡翠の目に勝てればの話ではあるものの、今落ち込ませるだけでも十分な指導となろう。俺はそう思い深く頷くと「よし。じゃこの話は終わりだ」と言って台所へと足を運んだ。
しかし、台所に立ったはいいものの、今日は何か作る気にはならなかった。
学校が終わってから色々と構内を探し回り、本当に疲労感でいっぱいだったのだ。
後ろでは説教から解放された翡翠が、足を伸ばして安堵している様子だ。
少し迷ったが金曜日ということもあり、外食することにしようと俺は思った。
「翡翠――」
俺が声をかけると翡翠はびくっとして正座し直したので、俺はふっと呆れたように微笑んで言った。
「はは、もう怒っていない。楽にすればいい」
「う、うん」
とは返事はしたものの翡翠はまだ少し緊張気味のようだ。
そして、外食の事を告げてやって来た居酒屋――。
とりあえずドリンクメニューを見ている翡翠を見ていてふと思った。
――そういえば、翡翠は酒は飲めるのだろうか――ということだった。

「グレープフルーツジュース」
そう言った翡翠のドリンクメニューを変更させる方法など、俺はすっかり知っていた。
「ふーん。ジュースなんて子供だな」
これでＯＫ。なんとも単純で楽な方法である。
翡翠はメニューにあるソルティドックがグレープフルーツジュースみたいな酒だと言った俺の言う通りにそれにすると言い、『翡翠に酒を飲ませてみよう作戦』にまんまと引っかかってくれた。
酒が届く。じっと見つめる翡翠。ビールを片手に俺が言う一言。
「じゃ、今日も一日お疲れさま」
「お……おつかれさま」
翡翠はあまり気乗りしていない様子でそう言うと、まだ口をつけなかった。
そして俺がごくごくと飲む様子を少し見ていたかと思うと、ため息を吐いてから口を開いた。
「アイト……先に言っておく。私、酒は弱くて……多分迷惑をかけるからそのつもりで」
げ、こいつまさか酒乱か？
ま……まぁ別に近所だしいいか……。
「ははは、いいよ別に。そんなこと気にしなくて。どうせ帰る方向一緒だし面倒くらい覚悟の上だ」
「そ、そうか。じゃ」
そう言って翡翠は一口口をつけた。ジュースみたいなものだと思うのだが、翡翠は少しだけ感じられる酒の味に顔を強張らせた。少し目を閉じて口をきつく閉じて耐えるような表情の後に感想を述べた。
「お……美味しいけど、後から酒の味がするぅ～……」
「そりゃそうだ。酒だもん」
そう言って微笑むとその後届いた料理に、俺も翡翠も箸をつけて

いき特に何もないように思えた。

しかし――、事件は十分後くらいにやって来た――。

「あいとぉぉ～ねーってばぁ」

甘えたような声でにゃんにゃんと喋り出す翡翠に俺は引きつった笑みを浮かべていた。

「ひ、翡翠……聞いてるって」

「ふふっ。やっぱりこまってるー」

「いや別に困ってないぞ」

つーか一口だけだというのに、酔いが完全に回っているようだ。

演技するヤツも何人か今まで見てきたが、翡翠のそれは絶対に違うだろう。

顔も体も真っ赤で、声や口調まで変わり――正直、壊れすぎである。

「あははっでもこまってるあいと面白～い」

俺が困っているのがそんなに面白いか……酒、弱いんだな……本当に。

そう思ってぎこちない笑みを浮かべていると、もう別に飲まなくても十分なのにもう一口翡翠が酒をこくっと飲んで、テーブルにジョッキを置くなり、虚ろな目が閉じていき『ふみぃ～……』と猫のような声を漏らしながらこてっと横に倒れていった。どうやら……寝たようだ。

「……あ～あ。なるほどね」

仕方がないので翡翠をそのままにしてとりあえず会計を頼む。

「あらあら、少ししか飲んでないのに随分弱いのねぇ」

居酒屋のおばちゃんがそう言って翡翠の寝顔を見ていた。

優しく微笑むおばちゃんに翡翠を俺の背中に乗せて貰い、「ごちそうさまでした」と言って店を後にする。

ビール二杯程しか飲んでいない俺は、ほろ酔い程度で翡翠を抱え

たまま夜道を歩く。
街灯に照らされる道を、冷たい旋風が枯葉を巻き込んで横切っていく。
ほろ酔いの体温の高揚にその外気は心地よくもあったが、少し限度を超えるほど冷えている。
「ん～……」
翡翠はそう唸るように声を漏らしたので横目でちらっと見ると、やはり寝ている。
なんだ――と俺は呆れてため息を吐いてこう独り言の様に言った。
「ほんと弱いなぁ～お前は。まぁ、未成年だしな……酒はまずかったか」
「……あいと……」
ん？
再び翡翠が口を開いたので、聞こえていたかと思ったが寝言で名前を呼んだだけのようである。
その後、何も言わずただ俺の背中で寝息だけが聞こえていた。
しょうがないなぁ……。はは、女神さまを背負って歩く夜道も悪くないかと帰路につく俺の目に止まった次の電信柱。
街灯に照らされた場所に、何かやら人が立っている。
黒く煤けた様なコートを着ていて顔は良く見えないが、ただ黙って立ってこちらを見ている姿は少し不気味だ。
その時、ジジ……と音を立てて電信柱の上にある街灯の光が点滅したので、少しびくっとして俺は立ち止まった。
そして何だかこの黒いコートの人物のところまでは、もう目前であった。
どうしてかわからないが、俺はこの人物が不審者である気がした時だった。
「見つけたぞ……地上の女神――！」

不審人物は男の声でそう物静かに差し迫る様に言ったのだ。
「！？」
な、何！？　こいつ、まさかニュースで翡翠を探していたヤツ……！？
ちょ、ちょっと待て。
翡翠は寝ちゃってるしッ！　俺、何も対抗する力はないぞ……！？
俺はくるっとそいつから急いで背を向けると走った――。
マンションの部屋からは逆方向だが戻ろうとただひたすら走っていた。
「ひ、翡翠！！　こらっ、起きろ！！！」
翡翠は俺が大声をあげているにも拘らずちっとも起きない。
人通りもほとんどない角を曲がった路地に入り込んで、俺は唖然とした。
――い、行き止まり……！！
そして振り返る後ろを見た瞬間にかざされている手。俺に向かってかざすその手から黒く浮き上がる魔法陣――。さらにそこから出てきた黒き炎を纏った竜が、物凄い勢いでこちらに迫り来る。
おおおいッ！！　ちょ、ちょっと待てッッ！！！
俺死ぬのか――！？
どう頑張っても避け切れそうもないそれに、俺は思わず目をきつく閉じてその場に蹲った。
距離と時間を考えるともう危害を加えられていてもいい頃だと思ったが、何も感じなかった俺は目を開けた。
「くっ……特殊防壁……！　ほぉ、お前に……なるほど。少しは頭使っているのだな」
そう言った不審人物の黒いコートが僅かにすす汚れている。
「！？」
はぁ、はぁと少し息を切らしている不審人物は手を降ろし、その場に膝をつくとぎゅっと拳を強く握り締めて悔しそうにしている。
俺は翡翠を起こそうと背中から降ろし声をかけるが、やはり起き

ない。
正直――つ、使えない女神だと思った事は翡翠には内緒だが――。
俺は翡翠を抱きかかえて立ち上がると不審人物に言った。
「――お前は、何者だっ……！」
そう言った瞬間に俺は物凄くカッコイイ気がしていた。いや、しかし何の能力も持たない俺はただこの台詞を吐いただけで無能だとはわかってはいたが、それでも一度言ってみると体が震えるほどに興奮を憶えたのだ。
しかし、緊迫した間を開けて俺を睨みつける様な不気味な紫色の瞳に、冷や汗が額に浮かんでくる。
不審人物はふっと無理に口元を吊り上げて、余裕めいて冷淡な口調でこう答えた。
「名乗る必要などない――ひとまずお前に特殊防壁を張っていたなら仕方がない。退散してやろう」
俺の目の前で不審人物は紫の炎に巻かれていき、完全に炎に覆われて見えなったかと思うとスッと消え去った。
「！！」
な、――なんだ。今の……ヤツ……。
翡翠を――狙って……？
と、とりあえず早く家へ帰ろう。

俺は足を急がせてマンションに入ると翡翠をベッドに降ろした。
俺はまだ冷や汗が止まっていなかった。
翡翠は、何故あんなヤツに狙われていることを言ってくれなかったんだ。
それにアイツが言っていた……『特殊防壁』って何のことだ……。
とにかくその防壁のお陰で、アイツの力が俺に及ばないのがわかり退散して行ったということなのだろうか――。
俺に防壁を張っていたなんて、いつ張ったんだろう？
あぁもう、そろそろ教えてくれないとなんかただの人探しって話

じゃなくなってきてるじゃないかっ。
――そうだ。
そもそもゲームやアニメだって、ただ女神様や何かが現われてただのんびり過ごしていた試しなどないじゃないか。
こういう事がつき物だと、どうして始めから考えなかったのだろう――。

俺は翡翠を寝かせたベッドに行って、すやすやと眠る翡翠の頭を撫でて語りかけるように言った。

「翡翠――お前、一体何をしようとしているんだ……？」

「……」
もちろん翡翠は寝ているから返事をしない。
翡翠が話そうとするまで待つことは、俺はもう出来そうもない……。
何も答えない翡翠に、眠っている間に起きたこのことを俺は何と説明すればよいのだろう。

俺にとって始めは平凡な毎日を崩すとんでもないものが転がり込んできたと思った。
そして次第に楽しくなって来た翡翠との平和に見えたこの生活――。

しかし、俺とそうやって平和に暮らしながらも翡翠はタダ事じゃない何かのために、ひとり頭を悩ませたり問題を抱えて動いていたのだろうと思うと、胸がきゅっと締め付けられる思いだった。

――翡翠……俺決めた。

俺に何が出来るかはわからないけど、これから何があっても、お前が何を言おうと一緒に立ち向かってやる。
だから、もう全部聞かせてくれ。
頼むから――翡翠。――話してくれ……ッ。

翡翠の眠るベッドの隣。俺はひとりでそう決意していたのだった。

そして翌朝――。

つづく。

20　嫉妬

翡翠を抱き枕のように脚と腕を翡翠の体の上に乗せていた俺は、翡翠が放つ大きな怒鳴り声で目を覚ました。

「くっくっつきすぎだっっ！」

顔を真っ赤にして怒る翡翠は、寝ぼけながら『あぁ……？』と言った俺の腕から抜けて宙でくるっと背を向ける。

そしてトイレへと進み、少しして戻って来た翡翠は、不機嫌そうにベッドにボフッっと座った。

揺れるベッドの動きが一瞬でおさまった後、俺はゆっくりと起き上がってため息を吐く。

「悪かった。最近寒かったから寝てる間に抱き枕にしてたみたいだ」

不機嫌そうな翡翠が腕を組んでぷいっとそっぽを向いている。

そんな翡翠におもむろに俺はこう尋ねた。

「それより翡翠――。防壁……特殊防壁とは、一体何のことだ……答えろ」

「！？」

はっとして翡翠の表情が変わる。

目を見開いて驚愕の視線を俺に向け、そして口を開こうか迷っている様子だ。

俺は冷めた目を向けたまま翡翠を捕らえて離さなかった。

翡翠はその脳裏で浮かんでいるであろう疑惑を、もちろん俺に尋ねてきた。

何故、そのことを知っているのかと――。

昨日の一件をすぐに詳しく話してもいいのだが、聞いたのは俺が先だ。

まずは俺の質問に答えてもらいたい。

「とっ……特殊防壁というのは、だな。その……悪いヤツに何かさ

れても無効にする魔法だ。お、お前に何かあっては困ると思ってだな……その……」
「なるほど……？　で、それはいつかけたんだ。全然俺は知らなかったが？」
その俺の言葉に明らかに戸惑いを見せた翡翠は、とっさに話を摩り替える行動に出たようだ。
「こ、答えたんだから先に私の質問に答えろっ。それは後だっ」
まぁ翡翠が求める譲歩案は確かに正しいと、俺は昨日の一件を大まかに聞かせた。
「何ッ！？　何故もっと早く言わない！！」
翡翠は青にも見える様な黒い目を、鋭く俺に向けて強い口調でそう言った。
それに少し圧倒されながらも一応反論の意を俺は述べる。
「お……お前寝てて全然起きないから仕方がなかったんだ」
翡翠、お前はもうここまで来たら俺に全て話すべきだと思う――。

さぁ教えてくれ――。お前の知ってることを――。

俺はそう願いを込め、話の流れを先程の質問に戻した。
すると翡翠は顔を真っ赤にして、慌てた様子を見せた。
そして後ろめたいことがある子供の様に小さな声で言った。
「く……口づけ。かけたのは私が高熱で病院に運ばれた次の日、お前がバイトから帰って来た時だ――。『なんとなくだ』とか『減るもんじゃなし』と言ったが、あの時かけたんだ。奴らがいつ動き出すかもわからないからな……」
え……じゃあ、あのキスは別に好意どうこうじゃないって、そういうこと……？
何故かそれにショックを受けた俺はため息を吐いた。
でも、その後に翡翠が説明した詳しい特殊防壁の話にそのテンションは再び上がった。

「その特殊防壁は、その……好意を持つ者にしか与えられ……なくて。そっ……そのとにかくっ、二人あるところは守られるというもので、二人が離れればその効果は半分といったところだ。私は元々力を持つから良いとして、お前はこちらの普通の人間だ。気休め程度かもしれないが、もし私のせいで何か危険な目にさらされた時に助けられないかもしれないからな」

翡翠――……そ、それは――。

ちゃんと、俺のこと好きって言ってくれたようなものじゃないか……？

結局俺が気持ちを伝えはしたもののどうなのかとも思ってはいたが、まさしくそれは好意がなければかけられぬ術。

正直、照れた――。

俺は嬉しくて翡翠という目の前の女神さま（一応）が紡ぐその言葉に飛び跳ねたい気分だった。

……それに、何も考えていないようで俺のこと守ろうとしてくれていたなんて、ちっとも知らなかった。

それも仕方がないことだ。翡翠は本当に何も言ってくれないのだ。

「翡翠――」

「！」

俺はごくっと息を呑んだ翡翠に、相変わらずの真剣な目を向けて言った。

「もういいだろう……ここまでお前の言う通りに黙って付き合ってやったんだ。そろそろ、何か訳を聞かせてくれても」

翡翠は俺の真剣な目に、諦めたのか穏やかにな目をしてベッドに横になった。

「はぁ……そうだな。今まですまなかった……。わけもわからずに振り回していたかもしれないな……」

そう呟くとため息を再び吐いた翡翠は言った。

「それと、とりあえず主要人物の一人。見つかったんだ……昨日」
「えっ！　し、渋谷で！？」
「――そう。だからそろそろ時期も来た。どっちにしても三人一緒に話そうと思っていた……だからすまないが、三人一緒に集まった時に話す――それで、勘弁してくれぬか？　ま、まだ探す者はいるがひとまず主要な三人を見つけたので少し話してやろうと思っていた」
翡翠は俺を見ずに、ベッドにうな垂れたままそう言った。
話してくれるというならそれでも構わないかと俺は息を吐いた。
「了解だ。……で、どんなヤツなんだ？」
俺が尋ねると翡翠はその人物の名を言った。
椎名　陸――。
昨日渋谷のスクランブル交差点で出逢ったのだそうだ。
思わず何かを感じるその陸という高校生を見た翡翠は目が離せなくなって交差点――それもど真ん中に立って動けなかったところを、陸の方も気にとめて信号が変わる寸前に手を引いて向こう岸へと連れ走ったのだという。
その後少しカフェでお茶したり観光したり、昨日の現れた不審人物を探す手伝いをしてくれた陸とのその話は、まるでデートでもしているかのようで俺は怪訝そうな表情で翡翠を見た。
「なぁ、それって軽くナンパされていないか？　お前」
「え？　ナンパ？　何言ってる。いいヤツだぞ？　こう、何ていうかお前みたいに面倒見てくれただけだ」
「な……なんか、面倒見てくれれば誰でもいいみたいだな……」
「そ、そういうわけではないってば」
「……ふーん」
俺は何だかそれを聞いてもちっとも気が治まらなかった。
翡翠が困っている。
俺は陸のことを気をつけておこうと思った。
テレビで観た芸能人みたいに可愛い感じだと翡翠が言っていたの

がそうさせた。
それに、面倒見てくれれば誰でもいいのかと実際に思った事も確かだった。
俺は黙って息を吐くと朝ごはんを作りに行った。
今日は土曜日。
俺はバイト――。
翡翠にどうするか聞いた。
「……うーん。お前なんか怒っているし……適当に過ごそうかなぁ」
「ふぅん。そう。それなら別にいいけど……」
翡翠はどこかつっかかる口調の俺に怪訝そうな目を向けた。
俺はため息を吐くとバイトのために家を出た。
「何怒ってるんだ……」
翡翠がそう呟くのも俺は無視した。
なんか苛々とする……。
翡翠が探しているのは男ばっかりだ。
女はいないのか女は……。
全く――。
そう思っていたが、それは紛れもなく嫉妬そのものであった。
子供じみた様子で翡翠に冷たく当たって、翡翠のことを言えないな……俺も。
嫉妬というのは醜い――。
しかし、俺は実感していた。
嫉妬させるほど、あいつの存在が俺の中で大きいということ。
そして、あいつが近々話す話ということに考えを巡らせながらバイト先へと向かったのだった。
――――……
――……

つづく。

21　東条家にて

俺は昼の休憩時間。
翡翠に電話した――。
やはり、嫉妬などみっともないことをしたと詫びるためだ。
「あ……翡翠。えと……暇してないかなと思って――」
そう言った俺は翡翠の言葉に耳を疑った――。
翡翠は今、東条先輩の家にいてそして事もあろうか、翡翠がリクと呼ぶあの高校生の男の子も一緒なんだとか。
俺は正直心配して電話したことを後悔した。そしてこみ上げて来る怒りを抑えて言った。
「お前……七時半にはそっち向かえるから、大人しく待ってろよ。迎えに行くから……」
翡翠は俺の隠し持った含みに気付いてはいない様で、調子よく返事をすると電話を切った。
あぁぁ苛々する――――と思考を巡らせようとして、俺はある事を思い出した。
“……三人一緒に揃った時に少し話して聞かせるから――。”
そうだ――。翡翠は俺たち三人に大事な話をするために陸ってヤツも呼んだのか？
俺の個人的感情で陸に嫉妬するどころか東条先輩にまで嫉妬する勢いだった。
――まぁとにかく東条先輩が一緒なら安心だ……。
保護者みたいなもんだしと思い直した。
――陸ってヤツも面倒を見てくれる俺みたいなヤツと言ってたか……。

翡翠にとって俺らは単なる保護者なのか？
多分そうじゃないだろうけど、俺たちが翡翠に何故探されていたのか――。
それが今日聞けると思うとなんだか緊張するような、変な気持ちだ。

「――ね？　やっぱり彼女じゃないのぉ？？」
「！」
で、出た。
何故この窪田主任はいつも俺と休憩が被るんだ。
電話の内容をしっかり聞いているし、本当に困った人だ。
俺はぎこちなく微笑むとため息を吐いた。
「いえ……別に彼女というわけでは」
「じゃああれだ。片想いっ」
「……あ、あの……俺別に」
そう言った俺を意味ありげに見つめた窪田主任は「なるほど」と言うと先に休憩室を出て行った。
翡翠は少しは好きと思ってくれているかもしれないが、寝言で言っていたあの異世界の男の名――。
翡翠の寂しさの穴埋めでしか俺はないのかもしれない。
窪田主任は、このはっきりとしない――女神への俺の片想いなのか両思いなのかよくわからないこの状況の何をいったい気付いたというのか。俺は問いてみたいものである。

仕事後――。
時刻は七時半――。
満員電車とまではいかないが込み合う電車の中で俺は焦り急ぎ、東条先輩の屋敷までの道のりも急いで走って来た。
大きな土地の東条先輩の豪華な屋敷の門の前。俺はベルを押した――。

「はい。あ、宮部様でございますね。どうぞ――」
インターホンから聞こえてくる声は、おそらく執事か何かだろう。
鉄の棒で出来た門がキィィ……と音を立てて開いていき、広い庭園が広がった玄関前までの敷地を歩く俺の元へとやってきた男。漆黒にストライプの縫い目がついているスーツにネクタイをびしっと締め、肩位までの髪をオールバックに後ろに一つに結んだ若めの執事は、おそらくいざという時には頼りになりそうだ。
動きに微塵の無駄がないのだ。俺の言った豪華な屋敷や庭園に対する褒め言葉に、適当に微笑みながら答えてはくれるのだがその目は笑ってはいない。何かに警戒をして許さないといったところだ。
さすがに豪邸だと思った。
「こちらです」と連れられた庭園の先へと通じる道のりは長かった。
俺は、やっと豪華なプレハブといった隠れ家のような建物まで連れて来られた。
へぇ……さすがは東条グループの御曹司――。
ま、まさに金持ち住まいという感じだな……。
「失礼します。珀矢様……宮部様がお見えになられました」
「――そうか。真壁。ご苦労だった」
「いえ、では失礼いたします」
そう言って真壁と呼ばれたその執事は去って行き、東条先輩が扉の中へと俺を通し歩みを進めながら言った。
中はテーブルと椅子が並んだり、ソファーがあったりとくつろぐ休憩場所となっているのだろうか。
すでにご飯は並んでいてメイドが料理を並べたり準備をしている。
すげぇ……なんか高級レストランに来たみたいだ。
「と、東条先輩さすがにすごいお屋敷ですねぇ……」
そう言った俺の言葉に、東条先輩は飽き飽きとしたように『別に大したことはない』とため息混じりに微笑むと奥に見えるのは階段――ではなくエレベーター。家の中にエレベーターとはその時点で羨ましいほどの豪華絢爛な屋敷だと俺は思うのだが――。『世知辛

い世の中だなぁ……』という心の中で時々浮かぶ言葉が、久しぶりに聞こえた気がする。
「宮部――ここは単なる遊び用の部屋で、ダーツでもボーリングでもビリヤードでもテニスコートでもバッティングマシーンなど他にも色々あって、翡翠たちを遊ばせるにはちょうどいいと思ってここにいたんだ。地下三階まで続いていて、翡翠たちはダーツが気に入ったようで地下二階だ」
エレベーターが地下二階に辿り着き扉が開くと、翡翠が陸という同じ歳くらいの少年と一緒にダーツに夢中になっていた――。
髪はかなり明るいプラチナベージュ。――高校で注意はされないのだろうか。しかも、翡翠が言った通りテレビに出てくるジャニーズの男達みたいに美少年といったカッコ可愛らしい顔立ちをしている。
アイツが――『椎名　陸』か……。
じっと観察する俺の視線に気付いたのか、きょとん、とするその陸の視線。
翡翠も俺に気付いたようで振り返って顔を輝かせて走ってきた。
「――あっ！　アイト～、お帰り～っ」
意外だったのだが翡翠は嬉しそうに俺に抱きついてきた。
「あ――、おい翡翠……どうしたんだ。ははは」
皆の前だということもあって俺は呆れたように微笑んで抱きついて来た翡翠の頭を、ぽんぽんと優しく叩きながら身を離させた。その時の翡翠はとても嬉しそうにさらににっこりと俺に微笑んだので、俺は密かに翡翠は寂しかったのかもしれないとそう思った。時々、珍しいこともあるもんだ。
「――翡翠、この人がお前の従兄弟のお兄さん？」
陸という少年が少しこちらに歩みを進めながら翡翠にそう尋ね、翡翠が頷いたと同時に俺はじぃっと陸に観察されていた。そして、陸は冷静に口を開いた。
「そう――よろしく」

と。
一瞬だが、陸のその目は俺を敵視するような目だった気がした。
俺が少々戸惑いながらも陸というこの少年に挨拶をすると、東条先輩が何か電話を受けている。
「あぁ、わかった。では向かう」
そう言って携帯をパタンと閉じると、先程メイド達が用意していた食事の準備が整ったという連絡だったようだ。
俺は陸のその視線に不穏な気配を感じながら、東条先輩の言う通り再びエレベーターへと乗り込んだのだった。

つづく。

22　翡翠の謝罪

先程見た料理はビュッフェ形式に並べられており、普通の家だというのにホテルの豪華なビュッフェを楽しめるなんてことが出来るのは、東条家の財力の凄さを見ている気がした。ほんの片鱗だろうが……。

財力の凄さと言えば、東条先輩は俺が翡翠を保護しているのは大変だろうと言ってプラチナカードで自由に家賃だろうが娯楽費だろうが生活費云々を払えばいいと支援してくれているのだ。そんなこともあって、本当に東条先輩は神様的な存在――あ、いや列記とした女神様は翡翠だが、翡翠は本当に女神なのかを疑うほどに俺が世話をしていることは少し疑問だ。

とにかく、そんな東条先輩のご好意に甘えてバイトを増やそうか、しかし翡翠が一人では寂しがるなどと密かに悩んでいた俺の悩みが解決していたのだった。

――見方を変えれば翡翠のお陰で東条先輩に出逢い、この俺の負担がゼロになっているのだから女神様々なのかもしれないが……。

「翡翠――ニンジンも食べなきゃ駄目だからな」

そう言ったのは俺ではない。

翡翠は子供扱いされて怒るのかと思いきや、陸が言ったそれにちっとも怒らずに困った様な笑みをみせながら、ニンジンを皿に乗せられていた。

あれ？　陸の前だと、やけに素直……？

そしてやはり気になってしまうのが、馬が合う二人だなということだった。

嫉妬はもうしないと決めたのだったが、駄目だ。つい苛々としてきてため息を吐いた。

その時、東条先輩がため息を吐いたのが聞こえて視線を配ると東条先輩は同情するような目を俺に向けていた。

おそらく先輩は俺のそんな苛々した気持ちを察しているのだろうと思い、少し恥ずかしくなって俺は苦笑した。
しかし――食事中に翡翠と陸はダーツについて話したりだとか、話はずっと止まらなかったので俺はただ黙々と飯を食った。
「――あ、そうだ。藍人さんもダーツ出来ます？」
陸が言った。
陸のその目は何か敵意を感じる目で、やはりどこか挑戦的な表情をしていた。
「まぁ」
「じゃ、後で勝負しましょう。クリケットでいいですか？」
「あぁ構わないけど」
クリケットというのは簡単に言えば陣地取りだ。
１５から２０までの数字と真ん中のブル――三本先に矢を入れた者の陣地となり、そこに矢を射ると自分の得点となる。例えば２０を取った俺が２０のダブルに一本矢を射れば、４０点取得できる。しかし、この２０に陸が三本矢を射るとその陣地は死ぬ――。全ての陣地が死んだ時点で試合終了となり、その時点数の高い者の勝利となるという得点を稼ぐゲームのことだった。
「え？　藍人、ダーツ出来るのか？」
翡翠が不思議そうにそう言った。
俺は『まあな』とため息混じりにそう言って頷くと、陸の挑戦的な視線に呆れた目を返す。
「そう簡単に負けるほど弱くはないぞ」
仕方がないなという意味をおそらく陸は汲んだだろう。
「――じゃ、ハンデとかいらないですね」
「そうだな」
挑戦状を余裕の笑みで受けて立った俺と陸のそのやりとりに、東条先輩は呆れた様にため息を吐いていた。
翡翠も二人の睨み合うような視線に何だか圧倒された表情で俺たち二人を交互に見て言った。

「お、おい……二人とも何か無気になってないか？」
しかし俺は答えず、陸も何も言わず、互いに視線を逸らさない――。
そんな少しの間を空けてもなお陸から伝わって来る敵意の真意は、俺が翡翠と共に暮らす従兄弟というだけではない何かを感じ取り、俺を試そうとしているのかもしれない。男と男の勝負だと思う。
陸はやはり翡翠を――――。
「別に――無気になってなんかいないよ。翡翠」
やっとため息を吐いて俺から視線を逸らした陸が翡翠に静かに口を開いた。それも、少し冷淡に――。
そして、俺も呆れたように言った。
「そうだ。ただのゲームだ――」
俺と陸のそのやり取りの真相は東条先輩ひとり気付いていたと思う。
呆れた様子の東条先輩はやれやれとため息を吐いてエレベーターへと歩みを進めて、俺たちに声をかけたのだった。
「食事も済んだな。ダーツやるんだろう？　さ、早く乗れ……」
と――――。

――――……

「――い、いい加減にしろぉおおおおおおおッッ！」
そう言ったのは翡翠――。
そして――。
「……そうだ。お前ら、その辺にしておけ――大体宮部……高校生相手に何を無気になっているんだ」
という東条先輩の一言も俺と陸の抗争を止めさせた。
クリケットで俺は意外と命中率のいい陸に一点差で勝ったものの、

一点くらいでは満足も出来ずに勿論陸も一点だけで負けたことに不服の意を唱えた。
そして、もう一戦勝負を挑む陸の挑戦を受けて立った。
しかし今度は陸が勝ち、次は同点――。
なかなかやるなと思いながら、翡翠と東条先輩が呆れ始めているのにも気付かずに勝負は既に5戦目となっていた。
「お前ら何無気になっているんだっ。ただのゲームと言ったのに無気になりすぎだっ」
翡翠が言うのも最もだ。
おまけに互角に近いその戦い――。
一応俺が優位に立っていたが、時々負けるのが悔しくて無気になっていた。
勝負事というのは人を熱くさせる――ましてや、それが翡翠に関するものなのだから尚更だ――。
「……悪い」
「あ、ごめん。翡翠」
俺と陸は謝ったものの、お互いに顔は合わせずにそう言っていた。
東条先輩がとりあえずメイドに淹れさせたお茶を片手に『とっくに冷めてるが茶でも飲め』と促し、俺たちもソファーに座る。翡翠は東条先輩の隣に座り、腕を組んで俺たち二人の抗争に不機嫌そうだ。
「――全く、これでは大事な話どころではないではないか」
翡翠が言った一言に俺ははっとした――。
そうだ――。今日は翡翠が俺たちを集めて事情を少し聞かせる予定で皆集めたのだった。
思わず陸の挑戦に無気になっていた。俺は既に湯気も発っていない上品なティーカップに淹れられた紅茶を一口だけ口にしてから言った。
「わ、悪い。すまなかった」
不機嫌そうに腕を組んでそっぽを向いていた翡翠は、ため息を吐

いて腕を降ろした。
「――大事な話ぃ??」
と陸が言った一言に、翡翠はソファーから立ち上がって数歩先に進んだ。
そして振り返る。
「アイト、ハクヤはもう私の事を少し話している。しかしリク、お前にはまだ何も言っていないので話しておかなければならない」
陸は首を傾げて何かと尋ねている。
翡翠は静かに微笑んで言った。
「実は私は人を探していた。そして、三人見つけた。アイト――、ハクヤ――……そして、リク。お前だ」
ついに翡翠が詳しい素性を話すという緊張感に、俺はごくっと息を呑んでいたのだった。

つづく。

23　誰もが――。

「え？　どういうこと？　渋谷で偶然会っただけ……じゃ、なかったのか？」

陸の言ったその質問に、翡翠はじっと陸を見つめた。

その瞳は時々見える新緑の様な輝きを覗かせて、穏やかに陸を見つめていた。

静かに頷くと翡翠は陸にこう言った。

「――リク。先に詫びておく。最初に見つけた三人の内の一人がアイトで、私とアイトは実は従兄弟同士ということにしているだけで本当はそうじゃない。世話になっている……だけだ」

翡翠は俺を少しちらっと見た。しかし俺はその真意はわかっていたので気にはしていなかった。でも、その翡翠の行動は嬉しかった。

俺は翡翠に静かに微笑んで頷き、翡翠は口元だけ少し微笑ませた。

「ど、どういうことだ？　何を言っているのかわからない」

陸は動揺している様子で怪訝そうな表情を浮かべていたので、俺はため息を吐くと翡翠にこう言った。

「俺もそう思うぞ――。ただお前が人探しをしていて俺と従兄弟ではなくて世話になっていると明かしたところで、陸には何もわからない」

翡翠は『そうだな……』とそう言ってため息を吐いて深刻な表情で少し思考し始めた。

俺は何を躊躇しているのかがわからなかった。

おそらく翡翠が迷っているのは元の姿を見せようかどうしようかということに違いないと俺は踏んでいたのだが、俺や東条先輩にはすぐに見せたというのに、何故、陸にはすぐ見せようとしないのか――。

皆の視線が翡翠に集中して注がれる中、ついに翡翠は息を少し吐いた。

「――姿のことなんだが……。実はアイトやハクヤに見せた姿も完全に私の物というわけではなかったことを先に詫びねばならぬ。といっても髪の色や瞳の色が違うだけだし、これから見せるのも真の髪の色ではない。だがその真の姿自体はとくに誰かに見せたりせずに過ごしていたから、今から見せるのが本当の姿として認識してくれればいいということで」

「え！？」

な、何……！？

驚愕する俺や東条先輩にふっと翡翠は微笑んだ。

もちろん陸はさらに困惑している。

「うーん。三人揃ってからの方が説明がしやすいと思ったのですまないな。えと、リク――。少し語弊がなくもないが私は人間ではなく、女神なんだ――。まぁ人間とさほど変わりはないと思うが――」

「え、えぇぇっ！？」

驚いて目を見開いた陸は、額に手を当ててうーんと考え込んでいる。

ほらな……。

「翡翠……いいから早く姿を戻せ……このままではますます頭が痛いヤツだったのかと誤解を招くぞ？」

と俺は場を和ませるためにそう冗談を言ったが、翡翠は『頭が痛い』という単語にも特に動じずに真剣な表情で言った。

「……そうか。それもそうだな――」

翡翠は少し下を向いたかと思うと、呆れたように微笑んだ瞬間――視界が金色の光に覆われた。

「――うわっ！？」

陸が驚いて声をあげていたが、目を開けていられない程のその光に俺は腕を目に当てて防いでいた。

そして目を開けた瞬間――。

誰もが絶句していた――――。
正直、驚いた――。
なんと美しい姿だろう――。
そして神々しさに溢れていた。
翡翠の女神の羽根はもちろん存在していたが、髪の毛はいつもの黒髪ではなく瞳も青みがかった黒い瞳でもない。
まるで全く別人のようなその姿に、俺は目を疑っていた――。
これを見るまでは異世界の住人とはいえ髪の色などは、こちらと変わらないじゃないかと俺は思っていた――。

翡翠の本当の髪色や瞳――。

それは澄んだ翡翠の様な緑石色の髪の毛と瞳――――。だから名前も『翡翠』にしたのだろうか――。
こんな髪の毛の色……ゲームやアニメや映画などでしか見た事がない――。
しかし、自然に翡翠のその容姿にしっくり来る。
コスプレ……だったら笑い話で済んだのだが、そうではないその現状を翡翠はどう説明するのだろうか。
俺を含む誰もがそう思っていただろう。
そして翡翠は穏やかに微笑むと静かにこう言った。

「――私の本当の名は、レティシアだ」
と――。

翡翠は宙に浮いたまま、俺たちの前にやって来てその不思議な澄んだ翡翠の様な輝きを持つ瞳を向けていた。
その目に宿る何か神秘的な力を感じるように、俺は思わず吸い込まれそうになっていた。
綺麗すぎて言葉が出なかった。

視線をそのまま陸に、東条先輩へと順に送ると二人も声も発せない様子で黙っていた。
「私は、ほとんど女神というより人間に近いかもしれない。元は人間だ……」
「！？」
「えっ！？　死んだ！？　なっ何でっ」
皆驚く中で陸が言ったその言葉に、翡翠は穏やかに微笑むと俺の隣までふわりとやって来てソファーに座って言った。
「――まぁ驚くのも無理はないな。仕方がなかったので……自ら命を絶ったんだ。――世界の命運は私に託されていたようなものだったからな。まぁその話はいつかしてやろう。しかし、その選択により私は女神として生きる事となったということだが、元はお前達からすると異世界のエンブレミア王国という国のマールシェスタ城に住んでいた第一王女だったんだ」
「ひ、翡翠がお姫様！？」
「そうだ――。はは、驚かずとも本当はお前達も知っている筈なんだがな……記憶がないのだから仕方ないな――」
翡翠はしみじみと思い返す様に穏やかにそう言ってソファーに横になった。
長い髪が床にはらりと垂れ落ち、顔にも視界を遮るように垂れ下がる。
少し俯いたその翡翠の表情を俺は覗き込んではっとした。
口元をきつく閉じて微かに震わせている翡翠は、涙を目に浮かばせていたのだ。
「ひ、翡翠――」
そう言った俺に翡翠は声を震わせながら言った。
「すまぬ……少し待ってくれ……」
小さな肩を震わせ始めた翡翠を俺は抱きしめてやりたかったが今は頭を撫でてやることしか出来ない。
『泣くのを我慢しなくていい』と俺は以前言った――。

だがまた翡翠は泣きたくなるのを堪え、そして抑えられずに目から流れ落ちる涙を髪で隠しているのだ。
俺は胸がしめつけられるような思いで翡翠を見守るだけ。
何度――翡翠はこうして涙を堪えて来たのだろう。失敗に終わって俺に涙を見せた時以外にも、何度も堪えた時が合ったに違いない――。
俺たちは知っている筈だけど記憶がない――翡翠だけが知る思い出……。
そうか――そんな寂しい気持ちを抱いて泣いていたんだと今更気付く。
でも、俺達の覚えていないその記憶――。翡翠は何を知っていて、何を語ろうとしたのだろう。
わからないまま時は過ぎる中で、俺は先程までに聞いた話を思い出す。
女神となる前は人間であり王女であったこと。自分の命を絶たねば世界を救えないという悲しい出来事があったこと。
それにより翡翠は女神となったこと。そしてそれらのことを俺たち三人は知っているが記憶がないため知らないだろうという事――ここで続きを聞かなければわからないが、俺たちがまさか異世界の住人だとか言うつもりなのではと思った。
そしてそれは的中した――。
泣き止んだ頃に翡翠は言った――――。
「――私は……お前達を探しに来たのは……お前達が向こうの世界で私が知る者だからだ……姿は違うが、その者たちはお前達に“転生”している」
「!?」
転生――とは、少し話は違ったがあながち間違っていないだろう。
ん？　待てよ……？
夢で見たあの男女の声――――そういえば翡翠の声に似ていた。
そしてその時、男の方はこう言っていたのだ。

――信じろ。俺はいつでも本気だ――。女神と禁忌を犯した馬鹿者だ。罰でもなんでも喜んで受けよう――

「！！」

そうだ！　俺、何で今まで気付かなかったんだ。

女神って言ってたじゃないか。しかも、禁忌――？？

俺ははっとして翡翠に言った。

「翡翠っ――禁忌……。『信じろ。俺はいつでも本気だ。女神と禁忌を犯した馬鹿者だ。罰でも何でも喜んで受けよう』――この台詞、誰かに言われたことはないかっ？」

「な――何故それを……！？」

翡翠はそう言って起き上がって俺に詰め寄ってきた。

「あ、いや……その、夢で――見ただけだけど……」

俺は少し圧倒されながらもそう告げると、少し哀しそうに表情を曇らせた翡翠の目に再び涙が浮かび、再び泣いてしまった。

――もう駄目だ。こんな辛そうに打ち明ける話なんか聞かなくてもいいとさえ思った。

陸や東条先輩の目の前で翡翠を抱きしめるのは少し遠慮しておこうと思ったが、やはりもう限界だった。

少し油断すればすぐに涙を溢すような翡翠を、俺は我慢できずに抱きしめていた。

「アイ……ト……ごめん。――駄目だな私――……ちゃんと話すと決めたのに……」

「――いい。辛いなら今話さなくても……もう少し先でもいい」

そう言って抱きしめる俺に、東条先輩と陸は同じ気持ちだったのだろう。

同情するような表情で頷いて合図していた。

翡翠は『ごめんね？』を繰り返すように言いながら、俺の胸の中で泣いた。

そして、なかなか泣き止まない翡翠はとても話が出来そうもないと諦めた俺たちは、今夜は東条家に泊まることとなった。東条先輩は執事の真壁に携帯で連絡を取り部屋を頼んでくれていた。

――翡翠は、話そうとする度にこうして泣いてしまうのではないだろうか――。

見てるだけで俺も辛いが、翡翠は事情を話そうとし始めたことは確かだ。

ちゃんと翡翠が言えるまで待ってやりたいと誰もがそう思っただろう。

しかし、さらに深まってしまった謎――。

それが解けるのは、翡翠次第だと――俺はそう思いながら寝室へと歩みを進めていた。

つづく。

24　陸の思い出

寝室はひとり一部屋与えられ、それでもまだ部屋は余っているという東条家のお屋敷はどれだけの広さなのか。

ざっと三十畳くらいはあるだろう。アンティーク調の高級感の漂う家具やベッドのあるその寝室に、俺は翡翠を抱きかかえたままやって来た。無論、その後ろに陸もついて来ており下手な事は出来ないだろう。

――見張り……。

それしか考えられない。陸は目線をベッドに不機嫌そうに落としてから俺を見る。

ちっ……。早く降ろして翡翠から離れろという意味か――。

ため息を吐きながら俺は翡翠をベッドに降ろした。

「――アイト、リク……ごめん。……たいしたこと話せなくて……」

翡翠はそう言って既に戻している青みがかった黒い瞳を俺と陸に向けた。

俺は気にするなと微笑んだが陸はこう話し始めた。

「なぁ……昨日帰り際に聞こうと思ったんだけど、俺翡翠に似てる人と会った事あってさ……あれが翡翠だったわけはないんだけど気になってて――」

な、何だと？

陸が翡翠を見た事ある――！？

「ち、小さい時なんだけど昔迷子になった時、優しく声かけて来たお姉さんがいてさ。ちょうど今の俺らみたいな歳の人で、俺にこう言ったんだ。『泣くなっ。そう言う時は“まぁいっかぁっ”って散歩でもしてるつもりでいればいい』って。……俺、なんか不思議とそうだなぁって思って泣き止んで、お姉さんと一緒にその辺を散歩するみたいに歩いているうちに……ちっとも心細くなんかなくなっ

てて、少しして『いたぞ』って言ってお姉さんが指差した方向に両親がいたから、俺は走っていって、『優しいお姉さんが一緒にここまで来てくれたの、ほらっ』って言って振り返ったんだけど、もういなくなってて――。お礼もちゃんと言っていないのに……って哀しくなった。――あのお姉さん、今見ても翡翠にすごく似てるってさっきそのことばかり考えてたんだ」

陸は少し切なそうな目を翡翠に向けていた。

しかし、翡翠が来たのはここ最近のことだ。そんなに前からいる筈がない。

翡翠はというと、穏やかに微笑んでいたかと思うと、再び目に涙を浮かべ始めた。

「……リク――あの時まだ小さかったな……」

！？

な、何……だって？

「――ひ、翡翠ッ！　あれ、やっぱり翡翠だったのか！？　全然意味がわからないっ。ちゃんと説明してくれっ」

陸は驚いてベッドの翡翠の向く方向まで慌ててやって来て言った。

翡翠は少し圧倒されて困った表情をしている。

確かにこの今の翡翠の発言といい、先程から謎を深めさせているだけで何も翡翠は核心には触れていない。

――謎は深まるばかり……。

しかし、ここで問い詰めたところで翡翠はまだ話せる状態ではないだろうと俺は思った。

俺は陸の肩に手を置いて言った。

「り、陸。時期が来たらちゃんと話すから、もう少し翡翠が言える時まで待ってやってくれ……頼む」

陸ははっとした表情で俺を見た。

しばらく俺は頼み込むような視線を陸に向けていた。

陸は気に入らないといった表情で俺を睨むように見ていたが、諦めたらしくため息を吐いた。

「ア……アイト……、リク……」
翡翠が心配そうな表情を浮かべてそう呟いたと同時に、陸はベッドから手を退かして立ち上がった。
「しゃーない……じゃ、そうする」
そう言った陸に翡翠が何か言いかけた時、二十三時を告げる柱時計の鐘の音がその言葉を制止させるかのように鳴り響いた。翡翠は開こうとしていた口を閉じ、ため息を吐いて俯いた。
鐘が鳴り終わると、陸はため息を吐いてドアの方へと歩みを進めていった。
「あ……おい――」
声をかけた俺の方を振り向かずに陸はドアに手をかけてから言った。
「――時期を待つことにするよ。悪かった……。とりあえず今日はおやすみ――翡翠」
パタン……
閉じられたドアが音を立てた後、部屋の中には静寂が支配していた。
大人しく陸は引き下がったものの、翡翠にだけ述べられた陸の挨拶――。
明らかに俺への敵意が感じられたため息が出た。
ベッドの翡翠の横に座ると翡翠もため息を吐いてから言った。
「アイト――。その……ありがとう……」
「……別に……お礼してくれればいいよ」
「お礼？」
「そ、お礼」
そう言って俺は翡翠の顎に手を添えた。
翡翠は意味がわかったらしく、かっと顔を紅くして戸惑っていた。
「ぷっ……なんてな。嘘だ嘘――でも抱きしめさせてくれるくらい

ならいいよな？」
「え――」
翡翠の返事は聞かずに俺は抱きしめる。
何となくだが俺は翡翠はとんでもなく辛い事を背負っている気がしていた。
ひとりそれを背負い、苦しんでいるのではないかと――そう思った。
俺の腕の中にいた翡翠は少ししてから顔を見上げて言った。
「アイト……お礼――する。していい……」
「！？」
え、えと――その『していい』というのは一体どこまでを指すのか――と俺は馬鹿な事を考えていた。
無論それは口づけだけに決まっている。
翡翠をちらっと見ると恥ずかしそうに顔を真っ赤にして目を逸らした。
「……別に……無理しなくても、その……じょ、冗談だし……」
と言った俺の言葉に翡翠が何故そんな行動を取ったのか――。
俺は想像もしていなかった。
完全に思考が停止していただろう――。
翡翠の唇の感触だけが俺の思考を支配していた――。

ひひ、翡翠さま……だからその……唐突すぎて――ここ、困るってば。

やっとそう考えられるようになった時、翡翠はゆっくりと唇を離して俺を押し倒していた。
ドキッとしたが俺の期待通りではないようだ。
「――アイト……お前にだけ言う。言わねばならぬ……っ」
翡翠の目には涙が浮かんでいたのを俺は下から唖然として見つめていた。

「！」

翡翠は何を言おうというのか――。

俺は戸惑いながらもゆっくりとその体を起こしていたのだった――。

つづく。

25　長い時を超えて……（前書き）

先に謝ります……すみません。
主人公赤いカードですw

25　長い時を超えて……

「どうしたもんかなぁ……」
寝室のベッドの上、翡翠の隣で俺はため息混じりにそう声を小さく漏らしていた――。
ふと視線を配る翡翠は、既に眠ってしまっている。

翡翠の打ち明けた真実――それはかなり壮絶な物だった……。
何度か途中で翡翠は泣きながら真実を語っていた。
その度に俺は言葉をかけなかったのではなく、今回ばかりは驚いて何て言葉をかけていいかわからなかったのだ。
ただ頭を撫で、落ち着かせることしか出来ないという自分の無力さを思い知り、俺はとんでもないことをした。
後悔もしているが、済んでしまったことは仕方ない――。
今はゆっくり眠っていて欲しい。

俺は、平凡を望んでいるというのに平凡がつまらないと勝手なことを言う――現代を生きる普通の二十歳の大学生。
そう――。どこにでもいる普通の大学生――だった。
いや、翡翠に出逢っていなければおそらくそう思い続けていただろうし、普通ではないというのも“翡翠にとっては”という意味だ。
真実を聞いたあの瞬間より、そうではなかったと思い知っただけ――。
よくある――異世界へ行って特殊能力があって魔王を倒して俺はヒーローだ――などという、そんな次元の話ではない。
まだ話してくれていないことはあるものの、先程聞いた限りそんな事を言いに来た感じではない。
――それでも、俺たち三人の存在は翡翠にとっては特別で大切な

もの――。
そしてずっとずっと長い間――気の遠くなるような程に長い時の狭間で、翡翠はどうやってひとりで過ごし、どんな想いでここまで来たのだろう……それを思うと、俺も切なくなって泣きそうになった。
――その涙を拭い消し去るように、俺は口づけをして身勝手にも翡翠を抱かずにはいられなかった――。
勿論、その行為の最中だけでも翡翠の哀しみを消し去ってやりたかった思惑もあったが、やはり俺の身勝手な行為だったかもしれない。翡翠は少し抵抗もしていたという事をお構いナシで、俺は無理矢理押さえつけたようなものだ。
続くその行為に次第に翡翠は我を忘れていき、その後そのまま眠りについてしまった。
しかし、後からやってくる虚しさと後悔をこうして抱きながらも、今は許しを請うことも出来ない俺――。
穏やかに眠る翡翠の一糸纏わぬ姿を眺めながら、俺は人差し指を目元に触れた。
「……結局、泣かせてるな――」
人差し指に触れる翡翠の涙の雫――。
この涙は、何を意味しているのか――理由が様々浮かんで不安感や恐怖感も感じていた。
俺は翡翠にそっと服を着せると布団をかけてベッドから降りた。
「――ごめん……翡翠……」
そう呟いて俺は翡翠の寝室を後にした――。
――――……

――……
自分の寝室。そこは翡翠の部屋の隣。さらに隣には陸の部屋――。
しんと電気も点いていないその部屋には、外からの青白い月明か

りだけが僅かに部屋を照らしていた。
ベッドの横のライトだけを点けて、俺はひとり横になった。
微かに感じる心臓が脈打つ音と、思い返す翡翠の言葉――――。
『――ざっと多分百年前後といったところ……かな。陸だけはすぐにわかったんだ。でも、小さかった――。憶えてなどいないと思って声をかけてやったんだが、記憶に残っていたとは――少し驚いた。
……住まいは知っていたからいつでも会えると思っていたら途中で引越してしまって、行方がわからなくなって困っていたんだが……偶然――』
――でも、憶えていてくれたことは本当にさっき嬉しかった。
『兄上は――やっぱりこちらでも、やっぱり『優しい』『かっこいい』『頼りになる』人物だと思った。……あ、理想の兄三原則っていうの……考えたんだぁ……昔。会った瞬間に思わず泣いていた。顔立ちもよく似ていて……ハクヤが微妙に取る距離感なんかも、本当に兄上にそっくりで……。それなのに私だと言ってもわからないんだ――はは……』
――長い時を経てやっと会えても、自分のことを覚えていないというのは、とても哀しい……。
『そして――お前に逢えたことは、とても嬉しい反面どうしていいのか正直言ってわからなかった。アイツはお前、お前はアイツ――。でも、お前は少しアイツとは違うのに、時々やっぱりそうだと思わされたりして……何だかお前に近づくのが少し怖かった。アイツの記憶もないというのにお前は私を好きになり、それは偶然なのか――、運命なのか――よくわからない。でも、私は……、単純にアイツだからというわけでもなく……好きと思い始めていることも――いいのか悪いのかと思う……』
――でも、アイツならきっとそれでいいと言うと思う。

『だから、私にとってはアイツが一番――。お前は二番――』

「に、二番……」

俺は不満そうな顔をしていたのだろう。

少し慌てた後に翡翠は顔を真っ赤にして俯いて言っていた。

『……だって仕方ないじゃないか。アイツが先だ――。それに、初めて――その……す、好きになった者だ……』

確かにそりゃ敵う相手じゃないなと、俺は肩を落としていた。

先程から言っている『アイツ』というのは勿論、『リュシファー』という名の男のこと――。

そしてその男は、翡翠の恋人――というより……結婚までしていたとは敵う筈がない。

したがって不動の第一位がリュシファーというのは、これからもきっと覆されることはないのだろうと思う。

しかし、それが俺であるというのは嫉妬のしようがない事だとも、翡翠は言った――。

確かにそうとは言え、やはり少し悔しい……。

とは思いながらも、翡翠のこれまでの敬意を聞くとそんなことは小さなことだと思った。

翡翠は、異世界の住人――。もとよりこちらに存在する筈のない人間――いや女神。

百年もの長い永い時の狭間を彷徨って来たのだ。

翡翠が、この俺達の住む異世界へと来た理由――。

理由あって異世界に転生した自分の近しい者たちを探すこと。

そして……、俺や東条先輩や陸の三人が成長するのをたったひとりで待ち続けていたのだ――。

俺には気が遠くなりそうになる程の長い時を過ごしてきたなんて、思いもしなかった。

当然、年齢も偽りだ――。『十八歳』と言ったのは、翡翠の知る者達が翡翠の傍からいなくなった時の年齢のまま、時が止まっているようなものだからそう言ったらしい。見た目もそのくらいのままなので、百歳以上だと言った方が驚くだろうと翡翠は言った。

確かに言わなきゃ全くわからないし想像も出来なかったことに俺は唖然としていた。

東条先輩は、翡翠の兄で『エルト』という名前――。

陸は、翡翠の双子の兄で『ミグ』という名前――。

そして、翡翠には見ただけでそれがわかるというのに、俺たちにはその記憶は一切ないのだ。

翡翠はどんなに寂しく哀しいだろう――。

俺が夢に見た記憶の欠片。軽々しくも口にしてしまったが……それは翡翠の大切な思い出の言葉。

それに、ふと垣間見える知る者たちのしぐさ、口調。それはきっと偶然の一致ではないだろう――。

翡翠はそれを感じ取ってしまう度に、泣かないように耐えて来たのだという。

『――お前達には全然わからないというのに、私が突然泣いていては困るだろう……？　なるべく気付かれぬように気をつけたつもりだった――。でも、駄目だった――。自分の弱さを何度も思い知った――。とくに、お前の前だと私は甘えてつい思いっきり泣いてしまうことが多かった。ごめん……。今、話せるのはこのくらいだ……』

ここから先は聞いていないからわからないが。

俺の一番の収穫は……俺が密かに怖れていたリュシファーは俺であったことだろう――。

翡翠は俺の中にリュシファーの片鱗を見ているから俺に好意を持ち始めたのかもしれない。

しかし、俺はそれでもいいと――その時思った。
俺は初めから、翡翠の哀しみにどこか気付いていたのかもしれない――。
哀しい顔ではなく笑顔を見たい――ただそれだけを願い傍にいてやりたいと思っていたのだ。
そして、俺個人だけではないと思う。俺に転生しているというリュシファーの声でもある気がしていた――。
俺はアイツの代わりでもいいから、翡翠を支えてやりたいと思う――。

それに、今この世界にいるのはリュシファーのレティシアではなく、俺の翡翠なのだから……。

つづく。

26　失踪――そして……（前書き）

東条先輩がおそろしく油断ならないと思うのですが……。

26　失踪――そして……

――藍人、頼んだぞ……。

――――……

――……

「――あ……れ？　夢……か……」

俺は目を開けるなり、見慣れない天井に違和感を覚えた。

――しかし、ここは東条先輩の家だったことを思い出す。

寝ぼけてたか……。

つーか、だるい――。昨日……。何回したんだっけなぁ……。

俺は寝ぼけながらそんなことを考えてふと浮かぶ翡翠の切なそうな表情を、消し去るように慌てて頭を振り乱すとトイレへと向かう――。ドアを開けようとしてドアが開くというのは、とてもびっくりするものである。

「わぁっ」

「！」

互いに驚いて見合わせる顔に、俺はため息を吐いた。

「――なんだ、東条先輩だったんですか……お、おはようございます」

東条先輩は少しムッとしたように俺を冷めた目で見ると『なんだとは何だ』と口にした。

「いえ、誰かと思って……す、すいません」

と詫びる俺に東条先輩はこう言った。

「――あのな、宮部。私の家で好きな事をするのは構わんが、少し控えめにということは考えなかったのか……」

え――――……！？

東条先輩の口元は呆れたようにため息を吐かせ、見透かした様に目も据わらせてこちらをじっと見ている。

俺はひとつしか頭に浮かばなかった。マズイ――。

そ、そういや最初は翡翠が漏らす声をなるべく控えめに注意もしていたけど、はっきり言って途中から夢中になりどうでもよくなっていた事を思い出して俺は青ざめた。

「あぁあぁあぁっ、そ、そのっ――あぁぁのっ。も、もしかして……聞こえて――」

慌てふためく俺に東条先輩はにっと微笑んだ。それも、とても意地悪そうに……。

「――なるほど？　やっぱりそうか……」

「えっ！　そ、それは……どういう――」

俺が聞いた質問に、東条先輩は一言だけ述べて後ろ向きで手を振ると先に去って行った。

ガーン。

や、やられた。完全にハメられた――。

俺はしばらく顔面蒼白でその場から動けなかった――。

『この屋敷は全室防音完備だ』――。

この東条先輩の言葉。これはかなり、きついものがあった――。

その意味を理解した時、停止した思考のせいで振り返った廊下には既に東条先輩の姿はなかった。

俺は頭をくしゃくしゃとかき乱すとため息を吐いた。

やはり、あのお方は侮れない――。

バレたかと思っていた俺は、東条先輩に鎌をかけられただけだったようだ。

……。

そして、朝から今日一日の不運を案じながらトイレから出た俺に、陸が廊下を走って来る姿が目に止まった。

「――あっ！　藍人！！　ひ、翡翠はッ！？」

「ん？　何だ朝っぱらから。……つーかお前はいつの間に俺を呼び捨てに……」

俺は冷めた目で陸を見たが、陸は俺に掴みかかる様に詰め寄ってきた。

「そ、そんなことはどうでもいいッ！！　早く答えろっ。翡翠は――どこだッッ！？」

首を傾げる俺に、陸ははっと驚愕した表情で呟いた。

「――え……じゃ、どこに行ったんだよ」

「！？」

俺はまさかと思って陸とともに走って翡翠の寝室へと向かった。

乱暴に開けた寝室のドア――。そしてベッドの上にも翡翠は寝ていない――。

翡翠――！？

窓も開いていないし、部屋の隅々を探してもいない翡翠を屋敷中探し回ったがどこにもいないという――日曜の朝にやって来た難事件であった。

「翡翠――……」

ひょっとして俺があんな事したからなのだろうか……。

昨日の出来事を東条先輩と陸にひとまず“一部分を除いて”伝えるしかないか――。

翡翠は昨日言っていた。

適当にお前がこれを伝えてくれてもいいと――。

多分、代わりにある程度俺が伝えた方が良さそうだ。翡翠が話そうとしても、泣いてしまい話が進まないだろう。

「――な……何だって……俺、双子の兄……？」
陸はショックを受けた様子だったが、東条先輩はあっけらかんとこう言った。
「ふーむ。俺は確かに手のかかる妹の様に何故か翡翠を思っていた――翡翠の兄が転生していたというのも俺にとっては頷ける話だ……なるほどね」
そう言われてみればそんな感じもするなと陸も言い始め、ひとまず朝食を食べるため昨日の隠れ家的な建物へと俺達は向かう。
朝もビュッフェスタイルで朝食だというのに凄い量が並んでいる。スクランブルエッグ、焼ベーコン、トースト、サラダ、オニオンスープ等の洋食メニューの他、味噌汁、ご飯、卵焼き、焼き鮭、納豆等の和食も立ち並んでいる。ほんと、どっかのホテルか……この屋敷は――。
――俺の家の朝食とは大違いだ。
席に付きとりあえず手をつけていくが、隣の席にいない翡翠の事が気がかりだった。
いつもテーブルに皿を置いただけで犬のように飛んで来る翡翠が、朝食時にいないことはとても違和感があった。
「――しかし、転生したとはすんなり聞いたものの疑問がある。何故、転生なんだ？　既に死んでいるということか？」
「探した所で俺たち何も翡翠のこと知らないし、ただいることしか出来なくないか？　なんか心苦しいけど……」
東条先輩と陸はそうして疑問を投げかけて来るが、聞ける翡翠の姿はここにない。
皆それぞれそう思ったらしく、ため息を吐いた。
「あ、でもそれだけじゃなさそうで、実は翡翠を狙ってる変なヤツがいるんだ。そのことについてもまだ説明はない」
俺はそう言ってため息を吐いた。
あの時のことを話した俺は、翡翠がかけたという防壁がなければその時死んでいただろうということも二人に告げた。

二人は少し引きつった笑みを浮かべて先程と同じ理由でため息を吐いた。
そして、俺達三人とも思っただろう。
翡翠の傍にいても何も出来ないただの一般人であることが悔しいと――。

――リュシファー……お前は高位の魔術を扱っていたんだってな？
俺は、お前が羨ましいと思う――。
そんな力のない俺は、翡翠を――いざという時に守ってやることが出来ない。
お前と違って俺は本当に『無力』だ――。
それが心苦しい……。何か俺に力を分けてくれよ……。
……守ってやりたいんだ――。

俺はそんなことを思いながら食事を終え、何度吐いたかわからない深いため息を最後に吐いた。
そろそろ、バイトへと向かうため東条家を出なくてはならない時間だ――。
「すいません。じゃ、翡翠が見つかったら連絡してください。俺も連絡します――」
そう言って俺は東条家を後にしたのだった。

――――……

つづく。

27　失踪理由

その日――。バイト中も俺はずっと翡翠の事を考えていた。
見つけたりしたら連絡をと言っていたが休憩中も連絡はなく、午後休憩の際に電話をかけた東条先輩からは『やはりいないようだ』と言われた。そして翡翠にメールをするが返信もなければ電話も出なくて、仕事が終わって再び電話を翡翠にかけようとしたが、どうやら電源が切れたようで繋がらなかった――。
まさか、あの変な不審なヤツに――などと嫌な考えも浮かぶ俺を、突然後ろから呼び止める女の子の声――。
「――み、宮部君っ」
振り返るとそこには携帯コーナーで一緒に仕事をしている佐々木さんの姿があった。
佐々木さんは俺が働く携帯電話会社とは違う会社の担当で、配置されている売り場は隣同士で少し話す間柄。
「……あ、佐々木さん？　おつかれ」
他愛もない話をしながら駅まで向かう俺と佐々木さん。変な沈黙の後に佐々木さんが突然言った一言に俺は驚愕した。
「――み、宮部君っ……私、宮部君のこと好きでっ……そのっ、付き合ってもらえませんか？」
「！？」
客足が途絶えた時にちょくちょく話をしたりはしていたが、まさか佐々木さんが俺に好意を持っていたとは全く思っても見なかった。
佐々木さんはそれなりに可愛い部類に入るだろう。そして、おしとやかで素直な感じで真面目なコだ。
そんな佐々木さんが俺みたいなヤツに恋をしていたとは意外そのものだ。
俺は翡翠だからこそ心を入れ替えたように一途だが、結構最悪な事もして来た。

しかし、佐々木さんのこの想いはきっと真剣なのだろう。顔を真っ赤にして俯いている。
浮かぶ翡翠の顔は怒っている――。
俺は引きつって密かに微笑むとため息を吐いて言った。
佐々木さんの抱く好意というのは、今の俺には痛いほどよくわかるが俺は翡翠以外に心が揺らぐわけもなかった。
そして、あまりしんみりするのも何だなと思った俺はこう言った。
「ごめん……。俺、実は隠れオタクでさ……二次元とか女神様だとかそういうのにしか興味なくて、コスプレとかしてくれる人じゃないと駄目でさ」
・・・・・・・・・・・・・・。
何故そんなふざけたことを言ってしまったのか。
佐々木さんは明らかに引きつった笑みを浮かべて戸惑っている様子だったが、何故かこう返してきたので再び驚いた。
「……コ、コスプレくらいなら、私もっ……」
おいおい――マジか……！　冗談のつもりだったんだが……。
こんなふざけたことにまともに返してきた佐々木さんは、やはりとても真剣なのだろう。
俺は失礼な事をしたと後悔して、正直に言うしかないと思い直してこう言った。
「――俺、片想いしてる人がいて……どうしても、その子のこと守ってやりたくて……。だから――ほんとゴメン」
頭を下げた俺に、佐々木さんは言った。
「わかり……ました。すっ……好きな人に想いが通じると、いいですね……そ、それじゃあっごめんなさい……っ」
佐々木さんは最後に泣きそうになりながら走って行ってしまったが、無理して微笑もうとしていたのがわかった。
そう言えば佐々木さんは駅に用はなく、確かバスで通勤していた筈だとふと思い出した。
時々告白されることなんかはあったけど、やっぱり断る時という

のは何度経験しても後味が悪いものだと思う。
そして俺は、――断ったはいいけど俺の想いは届くようで届かない場所にあると心で呟いてため息を吐いた。
『好きな人に想いが通じると、いいですね……』か。――通じても所詮は……二番――。
だから、俺はある意味ずっと片想いなのかもしれない。
でも俺の中に一番はいるんだから、参っちゃうよ。
俺であって俺じゃない……。しかも、その一番に俺は絶対に勝てないだろう。

街灯の灯る午後八時――。
駅前にざわめく人々が白い息を吐きながら待ち合わせをしている。
通り過ぎる人々もコートを着始めている寒い季節に、そろそろ恒例イベントがやって来ようとしている。
駅ビルのショッピングデパートのポスターには赤い服と白いひげの例のヤツが今年も姿を見せ始めているようだ。
翡翠の世界にもクリスマスみたいな習慣はあるのだろうか。
何か欲しいもの――と聞いても、雑誌見ればすぐ出せちゃうんだろうし……プレゼントって言ってもなんか……元々城のお姫様にあげるような高価な物は買えないしなぁ……。
その前に翡翠がいないんじゃ……どうしようもない。

電車に乗り、駅を降り、帰り道を行く俺がひとり見上げた空。雲ひとつない夜空にはっきりと浮かぶ綺麗な満月。それに白い息が重なって消えていく。携帯をふと開いてみるが誰からも着信はない。
俺はため息を再び吐きながらマンションに辿り着く。真っ暗な部屋。しんと静まり返ったその部屋の電気を点け、こもった空気を換気するために窓を開ける。そしてそのままバルコニーへと出た。
翡翠は一体どこへ行ってしまったのだろう……。

まさか……あっちの世界に帰っちゃったなんてことは……。
満月を見ながら煙草に火をつけて、そういえばここでこうしていたら翡翠に驚かされたということを思い出した。
そしてそれはもう三ヶ月程も前になることも。
俺はしばらくそうして物思いに更けり、気がつけば涙を溜めながら満月に向かって言っていた。
「――翡翠……。つい抑えられなくなったことは謝る。お前のこと、支えてやりたいのに……何も出来ないのが辛いんだ……。お願いだ。お前がいないと俺やっぱり駄目だ。今週のビビンバ丼のこともチャラにするから……だから――」
「――ほんと？」
「！？」
突然聞こえた声――。
視線の先に視線を配ると、翡翠がバルコニーの格子に腰かけて微笑んでいた。
翡翠のその微笑みに俺は驚いて翡翠の名前を呼ぶと、そのまま抱きしめた。
「どこにっ――行ってたんだッ……！」
俺は気が付けば泣いていた。
「泣くな――男のくせに。仕方がない。お姉さんがよしよししてやろうなぁ～」
それに翡翠は戸惑っている様子でそう言って頭を撫でていたが、途中でそっぽを向くと静かに話し始めた。
「――は、恥ずかしくて……どうやって顔を合わせればよいかわからぬだろ？　朝目を覚まして思い出してあたふたして、もうどっかに消えたいっっ――なんて、私だって時々そう言う時くらい……あるのだ。そ、それに誰のせいだと思っている！」
・・・・・・・・・・・・・・・。
少しの間――。顔を真っ赤にしてそっぽを向く翡翠。
時折ちらっと様子を伺うように俺に向ける視線はすぐに逸らされ

る。
しかし――。
たったそれだけ？
――と疑問を持ったことも確かだった。
それでも俺は呆れてため息を吐きながらも、安堵して翡翠を離れない様に強く抱きしめていた。
「ごめん……」
月を背に俺はそう呟くように翡翠に言った。
――――……
――……
つづく。

28　覚悟

翡翠と俺はしばらくバルコニーから月を眺めていた。
翡翠が格子に座り、後ろから俺はしっかりと翡翠に腕を回して離さない。
何も言わないまま時は過ぎる。
夜空に浮かぶ満月と、散りばめられた砂の様な星――と言いたい所だがこの東京じゃそんなに多くの星は見えるはずもない。チカチカとビルのネオンに反射でもしているのか、少ないが見える星達はその彩色を変えながら瞬いていた。
外の空気は冷えてはいるが人の体温というのは温かいと、俺は実感していた。
同じ月を見る――その時間の流れの中で、穏やかに翡翠が話し始めた声は透き通るように綺麗に澄み、そして僅かに物悲しさを伴う口調だった。
「――え？　満月に祈り？」
「そう……お前が願ったんだ。あ……アイツがな。ここのバルコニーは狭いが、城の私の部屋のバルコニーで。前に言った様に私が命を落とした時に話だ。あのバルコニーで私がいなくて哀しいとアイツは泣いていた――さっきのお前みたいにな、はは。――私がいないと駄目なんだ……なんて言っても私はもういないという哀しみにくれていた。……それはとても哀しそうで、私は女神として生前の記憶も何一つなかったが、アイツが持っていた石――“女神の涙石”っていう石に零れ落ちたその涙のせいで私はアイツの願いを叶えにそこに来ていた。でも、声かけずらくてな……。少し待ったんだが声をかけた――。アイツは女神の私を見て驚いていたが、女神はどういう者がなるんだなどと聞いて来たかと思うと、三つの願いの内ひとつを『君の記憶を戻してほしい』だなんて――願ったんだ」
翡翠は遠い目をして穏やかに微笑んだ。俺は翡翠に尋ねた。

「――え……あ、で……女神というのはどういう者がなるっていう答えは？」
「あぁ、それ？　うーん。私がその時知っていたのは『とても良い事をした者がなる』ってことだったが、本当は違っていたけど、それはまた今度話すということで――まぁひとまずそう教えた。とにかく、そんなこんなで『もし嫌な記憶なら二つ目の願いを使って消してやるから』とまで言って頼みこんできたので仕方なく叶えたその願いにより、私は記憶が戻って愕然とした私は、アイツに対して怒りが湧いてきて怒鳴った。その記憶を持ったままお前と離れ離れになる事がどれだけ辛いかわからないから早く記憶を消せと願え――。何て意味のない願いをしたんだ――ってな……。でもアイツは余裕な表情で微笑んで言った。『――私が願う願いを叶えていい』って……」
「！」
俺は驚いた。
そうか――もし、似ているだけで翡翠じゃなかったり嫌な記憶なら他の願いで記憶を消せばいい。
そしてその女神が翡翠だとわかったなら、願いを叶えてやると言えば願う願いはわかりきっている――。
『――それとも、俺が願おうか？』
リュシファーはそう言って泣いている翡翠に優しく声をかけたのだとか。……悔しいがその台詞を言ったリュシファーは、俺から見てもカッコ良かった。密かに『くそ……』と思った事は内緒だが、やはり一番はリュシファーで――、俺は全然勝てる気がしなかった瞬間だった。
そうして願った願いにより、翡翠は地上でリュシファーと暮らすこととなった。
何故死んだのかは聞いていないが、その女神の涙石の奇跡により女神となった翡翠とリュシファーは再会出来た。
俺はため息を吐きながら、じゃあ『三つ目は何を叶えたんだ？』

と尋ねた。
「三つ目？　はは……内緒だ――」
「え……内緒ぉ？？」
「そう――」
翡翠はそう言うと外を向いていた俺の方を向き言った。
「バルコニーでお前が泣いているのを見て、久しぶりに思い出したから話した――」
「あ……翡翠……で、何でその……お前は命を落としたんだ？　って……聞いちゃだめかな……」
翡翠は一瞬顔を曇らせたので慌ててやっぱりいいと言って俺は謝った。
聞きたいのは山々だったが、翡翠の哀しい記憶触れる気がしてずっと聞けなかった。
翡翠はひとつ。ため息を吐いた――。
そして、まっすぐに覚悟を決めたように俺を鋭く見据えた。
ごくっと息を呑むほどに強い意思を秘めた翡翠の瞳は、月明かりを背にしているにも拘らずに澄んだ翡翠の様な緑石色の元の瞳が見えるように黄緑色に揺らめいている。
「覚悟は――ある？　辛く悲しい過去だ。そしてお前は、理解と哀しみに苦しむかもしれない」
それでも――と言いかけている翡翠の言葉を俺は遮って言った。
「――翡翠、俺……とっくに覚悟なんか出来てる。……教えてくれ――頼む」
少しの間、翡翠は俺の目をじっと見ていた。多分、俺の思いが通じたのか翡翠は息を吐くと格子からふわりと宙に体を浮かせた。かざした右手を夜空に向けて現れた一度だけ最初の頃に見た――異世界への入り口。
――白い魔法陣。その存在が頭上に現わした。
「ひ……すい？」
そう唖然として言った俺は、翡翠に再度聞かれた。

「……教えて欲しいなら異世界へ――。もう一度聞く――。覚悟は……本当にいいのか？」
その時、ひゅぅぅと音を鳴らしながら吹く風が翡翠の髪を揺らし、満月を背に手をかざす姿は少し妖しく見えた。
俺は翡翠自身の覚悟を垣間見せる様なその瞳に射抜かれたように圧倒されていた。
怪訝そうな表情を浮かべ始める翡翠に気付き、俺ははっとして頷いた。
「――も、もちろん」
翡翠が息を吐いて頷いた時、魔法陣からは以前の白い光ではなく水色の光が波打つように発生して視界を奪った。

――ここは……。

目を開けた瞬間、そこに翡翠がいない――。俺はひとりどこかの屋敷の廊下に立っていた。
俺は翡翠の名前を呼んだが、翡翠の返事はない――。
そうこうしていると廊下のつき当たりの部屋から、元の姿に戻したのか澄んだ翡翠の様な緑石色の髪の毛と瞳の翡翠が歩いて来た。見れば洋服も違う――。
「あ、翡翠！　な、何だ。着替えていたのか――」
とそう言っている俺に見向きもしないで翡翠は通り過ぎていく――。
あれ……？　――そう思ってその翡翠を俺は目で追っていくと、突然歩いて行く翡翠の足がぴたっと止まって動かない。
不思議に思い首を傾げる俺の心の奥底に響く翡翠の声――。

――藍人。今から見れるのは過去――。
今歩いているのは過去の私――そして私の身ではあるが私ではない。
あれは大魔神――ザロクサスに身を乗っ取られた私……。

「大魔神……ザロクサス！？」
……一度、倒した筈だったんだがどうやら私の心に潜入していたらしくてな――。
これからとんでもないことを見ることになる――。
「――と、とんでもないこと？」
俺はついにゲームのような話がやって来たと思った。
事情はよくわからないが『倒せ』『はいがんばります』『はい倒した』『平和ーおめでとーありがとー』みたいな流れのゲームはよくある。しかし、これはゲームではないのだろう。
翡翠の世界のこの城で、現実に起こったこと――。
「……やめるなら今だ。この後すぐに始まるからな」
翡翠のその言葉に怯まなかったと言ったら嘘になるが、俺は言った。
「……やめない」
「……そうか。じゃ――」
とそう翡翠が言った途端に目の前の翡翠の動きが再び歩みを進め出した。
俺はそこで何を見るのか――。
俺はごくっと息を呑んで、目の前の過去の翡翠が手を振り上げるのを凝視していたのだった。
つづく。

29　過去の惨劇

俺は絶句していた――。
過去の幻影とはわかってはいたものの、翡翠の言う通りこれはただの虐殺劇の様だった。

どうやら翡翠の説明も交えつつ見聞きした惨劇でわかったことは、翡翠は一国の王女でありながら、精霊の力を強く借りる事の出来る特別な存在だったらしい。
おてんば姫だった翡翠はひょんなことから冒険の旅に出て、偶然か運命か精霊の導きを受けながら大魔神ザロクサスをその手で闇に葬らなければならないという使命を担ったようだ。

しかし、倒したかと誰もが思っていた大魔神ザロクサスは、なんと翡翠の中にとっさに逃げて身を隠していた。
誰も予想もしていなかったその衝撃の事実を知った翡翠にも、もはやどうすることも出来なかった。
翡翠が大魔神ザロクサスに心をほぼ完全に奪われてしまったというこの惨事が起きたのは、城に戻って来てから三日目の事件のこと――。
はっきり言ってその翡翠の力は凄まじく、最強の力を手にしたと大魔神ザロクサスもあざ笑うかの様に言っていた。

そして――、俺の目の前に立ち尽くす二人の青年の姿――。

翡翠の髪と瞳と同じ色のそれを持つ美少年が、もう一人の青年に驚愕の声をあげる。
おそらく翡翠が言っていた陸に転生したという『ミグ』という双子の兄だろう。

「おい、リュシファーッ、どういうことだっ。こいつ死んだんじゃなかったのか！」
ゲームに出てくるエルフのような耳をしているこの男が、翡翠の――。
リュシファーは上空から深海を眺めた様な深い藍色の髪をしていて、その姿はとても幻想的に見える。
おまけに顔立ちも端整で――リュシファーと呼ばれた男は、俺も圧倒されるほど翡翠の初めて好きになった男だというのも頷けるほどに大人っぽい魅力が漂っていた。だが、そんなことより俺はごくっと息を呑んだ――。
大魔神ザロクサスである翡翠は、美少年の言った言葉にこうして乗っ取る事など容易かった事や、もはや最強の力を手にした自分に怖い物はないだとか言って周囲をあざ笑った。
そこに駆けつけた兵士たちに対しては、剣なら剣で相手をすると言って次々となぎ倒していく様は、まるでゲームの戦〇無双だと思った。正直、俺の発想はオタク的発想だがそれしか浮かばなかった。
正直愕然とその様を見ていただろう。
しかし――、兵士長らしき剣豪の雰囲気を持つ男が立ちはだかった時、その場の空気はがらっと変わったのだ。
剣を目の前に縦に構える兵士長と――、上段に剣を構えて剣先に僅かに片手を添える翡翠との緊迫した睨み合い――。
上段に剣を構える翡翠の様はとても一国の姫とは思えない程に美しき剣士そのもの。
どちらからともなく踏み出し、激しい金属音を奏でながら間合いを詰めて剣を合わせては離れ、再びまた重なり合う兵士長の剣技はとても一国の姫に向けるものではなかった。本気だと俺は思った。
それでも力の差は互角か翡翠の方が上回っていたのか、敵わなかった兵士長がその場に倒れた。
残った兵士達は完全に士気を失い恐れおののいている――。
――げ、コイツまじで強ぇ……翡翠って……凄かったんだな。

あ、あまり怒らせないでおこう――と俺はのん気に少しやって来た間の間に思った時だった。
「思いついた――」
大魔神ザロクサスはその様子につまらなさそうに剣を振りながら言ったのだ。
そして剣に魔力を秘めさせたのか、持っている剣が光を纏う――。
魔法剣として衝撃波を放ち始めたその翡翠の驚異的な力の前に、誰もが勝てる見込みがないと怯んで逃げ始めた。
それを翡翠は見えるところにいる兵士達だけでも衝撃波で攻撃した後に、くるっとリュシファーの方を向いて言った。
「――もう、誰もかかって来なければつまらぬ。やはりお前にしよう」
！　な、何……！？
おい、やめろって……こいつはお前のッ……！！
ひっ！　翡翠――――ッッ！！！！

大魔神ザロクサスは驚く俺やリュシファー達が困惑ている中、ゆっくりとその場から何故かスッと消えた。
そしてリュシファー後ろに突然スッと現われると剣を両手で握り締めて高々と掲げている。
リュシファーは気配に気付いているのかいないのか黙って動かない。
「――リュシファーーーーーーーー…ッッ！！」
という美少年の叫び声――。
しかしリュシファーの口元はふっと緩んだかと思うと、まるで翡翠に自ら殺されるのを望んだかのようにきつく目を閉じたのだ。
――お、おいッ！！！　ばっ馬鹿ッ！！
――し、死ぬ気か！！？？

「――オイ！！！！　避けろって――――！！！」
とそう言った所でこれは過去の出来事――。何の意味のない事だと翡翠に聞いてはいたが、俺は死を覚悟したこの男の愚かな行動に叫ばずにはいられなかった。
俺が言い終わるのが早かったか、それが早かったかわからない――。
俺は信じられない光景を目にしていた。

「うぐ……ッ！！！」
という声――。

そして、大魔神ザロクサスである翡翠の胸に深く突き刺さった剣――。
ふっと微かに漏れる笑み――。
「！？」

――う……嘘……だろ……？

――自害――！？

まさか――、翡翠……そんな……お前……命を落としたって、こんな――……

自分で思い切り突き刺したその剣が刺さった所から、血が服に滲んでいる――。
誰もが驚愕して動けない中、後退をして苦痛に顔を歪まる大魔神ザロクサスは翡翠の声じゃない声を発した。
「――グッ…オノレ…、コンナ事シテ、オ前モ命ヲ落トス…ノダゾ…！」

それは邪悪な声で、おそらく翡翠に乗り移った大魔神ザロクサス本人の声だ。

……！？　翡翠はまさかそのために――。

乗っ取られた心をなんとか取り戻したとでも――言うの……か？

リュシファーを傷つけようとするのを阻止――したかった……。

……え、ちょっと待てっ！！　い、嫌だ。こんなのッ――嘘だ！！！

「――リュシ…ファー…ッ、これで…いいね……ッ。ごめ――……ね」

――――――！

「や、やめろおおおおおぉぉぉっっーーーーーーーー…！！！」

――俺は叫んでいた。

届かないとわかっていても、もうこんなことやめて欲しかった。

翡翠にこんな哀しい過去があったなんて思いも寄らなかった。

剣に添えられた手から魔力が加えられたらしく剣が青白い光に包まれ、そして辺りをカッと眩しい光が包んだ。

奪われたその視界の中、翡翠の穏やかに微笑む姿を見た気がする――。

俺は泣いていた――。目から涙が零れて止まらなかった。

横たわる翡翠から流れる血が床にどくどくと流れて絨毯を濡らす――。

ここまで見た時、肩にぽんっとそっと手が触れる感触。

「！？」

見上げた翡翠の顔。申し訳なさそうだが穏やかに微笑んでいる―

―。
俺は翡翠を抱きしめて泣いていた。
翡翠がここに今いることがすごく嬉しかった――。
「――翡翠……翡翠っっ……」
「大丈夫。何を泣いているか。私はここにいるだろう？　……な？」
そう言って優しく声をかけてくれる翡翠は、俺をふわりと抱き抱えると以前も通された自分の部屋のベッドへと連れて来た。俺を寝かせて自分も隣で俺の頭を優しく撫でる。
「――少し、休んだ方がいい。あれは私でも今見ても辛い過去だ。そして私がかばったあの男がリュシファーだ……」
翡翠――お前すごいよ……。
自分の身を犠牲にしてまで守るなんて、俺は口ばっかりだったかもしれない。
俺はあそこまで誰かを守ることなんて出来るのか――？
それにアイツも、翡翠にならこの命差し出しても構わないと何もせずに刃にかかろうとしていた――。
互いが互いを強く想い信じあっている様を見た俺は、悔しいと思いながらも思った。
翡翠が最期に言った言葉で――俺ははっきりと気付いた。
つづく。

30　アイツが俺に

「翡翠――俺さ。やっぱ二番だなぁ……」
「え？」
翡翠は驚いた顔で俺の髪を撫でる手を止めた。俺は翡翠に抱かれる様に傍に横になったまま子供みたいに言ったと思う。そして、さらに俺は小さく呟いた。
「……一番が、リュシファーなのがよくわかった……悔しいけど」
翡翠はくすっと微笑んだ気がする。翡翠は何も答えずに俺の頭を再び撫で始めたのだった。
そうしていると、なんだかそれが優しく俺を寝かしつけてくれるように眠くなっていく。
異世界の見慣れない部屋。先程の惨劇からは一変して穏やかな時間がそこに流れていた――。
俺の受けた衝撃はかなり大きかった筈なのだが、そんな心の動揺も和らげられる翡翠の優しく撫でてくれる手。
そしてそこに香るほのかな薔薇な香り――。

――なんか落ち着く――……と俺はそう思った。

そしてつい翡翠に手を出したくなるのを密かに俺は抑えてもいた。
何も答えないままそんな時が過ぎ、俺は何も言わず、翡翠も何も言わないまま気がつけば眠っていた――。
――……
――――……
“――藍人……”

と俺の名を呼ぶ男の声――。
そしてその男の声はどこかで聞いた事がある気がしたがわからなかった。
目を開けてもそこは真っ暗で、起き上がっても何も見えない。
目が慣れてくれば見えると思ったのに、少ししても何も見えない暗闇が辺りを支配している――。
「ん？　だ、誰だっ？」
とそう言った俺の視界を、突然金色の光が奪い始めた。

――――！
眩しい光の中、薄っすらと見える人影――。
しかしそれが男であるということ以外、顔や特徴などは掴めないその男は穏やかな声で俺に話しかけて来た。
“――お前に頼みがある……”

戸惑いながらも何かと尋ねた俺に、男はさらにこう言った。
“――藍人、アイツを支えてやりたいという気持ちを抱いたお前に、俺の意志を託そう――。アイツにはまだ言うな。お前はレティの扱いを大体わかっているとは思うが、この事は知らないフリだ”

「……え！？」
この男――。間違いない――リュシファーだ……。
「お、おい――お前翡翠に命を奪われずに助かったんだろう……？
何で傍にいてやらないっ。俺じゃなくて翡翠はお前を探して百二十年も彷徨ってようやく俺を見つけて……でも俺はお前じゃないっ……！　俺はお前には悪いが翡翠が好きだ。だけどアイツはっ……お前をっ――」
俺は動揺していたことは確かだが、何故そんなことを言ったのか

――未だに自分でもよくわからない。
でも、翡翠の気持ちを思うと本当は俺よりもリュシファーと話したい筈だし、正直コイツには負けていると先程思い知ったばかりの俺は、リュシファーは何故自分が翡翠の傍にいてやらないのかと腹がたっていたのかもしれない。
しかし呆れたようにふっと微笑む声だけを俺に残して、光とともにリュシファーは遠ざかろうとしていた。
「――お、おい！！　ま、待て！！」
遠ざかっていく光に、俺は手を伸ばしてそう言っていた。
そして突然、全く目を開けていられない程の光がカッと視界を奪い、最後にリュシファーはこう言った。
“――レティに……これだけは夢で見たとか何とか言って伝えてくれ。『傍にいてやれなくてすまない』と――。そして、『全てわかっているから心配するな』と――。藍人……頼んだぞ”
……！？
――お、おいっ！
ま、待て――！！
ど、どういうことだっ……！！
――――……
――……
俺はベッドからガバッと起き上がっていた。
夢――だったようだ。
目を開けるとベッド際のランプだけが灯っていて、翡翠はというと隣でぐっすりと眠っている。
外はまだ真夜中らしく――真っ暗だ。俺はひとりベッドを出てバルコニーへと歩みを進めた。
相変わらず怖いくらいの静寂の支配する異世界のこの城――。
先程見せられた光景だと皆は助かっている筈だというのに、何も

音のない世界――。
何も音がしないというのは、ここに初めて来た時から俺は思っていた――。
ただ城の中に俺と翡翠だけがそこに存在していて、この世界に誰も人はいないんじゃないだろうか。
それほどに深い静寂のたち込めた闇夜――。風はそこに穏やかに吹くだけで何も言わず優しく俺を撫でる。
格子に手をかけて月を眺めながらひとり思い返すのは、夢で聞いたリュシファーの声――。
それは強くて、説得力のある意志の強い声色で――それでいて安心するような、優しい声だった。
でも……俺に『意志を託す』――と言ったアイツの意向はよく理解できないまま消えてしまった。
お前が傍にいてやるのが、一番だろうが……。
――俺は所詮二番。決して一番になることのない……入り込めない二人の深い絆――。
それを思うと俺は刹那さに――胸が痛む。近づきたいのにその大きな壁が行く手を阻むように。
翡翠の心に大きな存在として君臨していることだろう――。
それでも俺は――アイツに負けていても翡翠を守りたいと思う哀れな男なのかもしれない。
見上げた淡い金色の満月――。アイツが女神である翡翠に三つの願いを叶えて貰ったこの場所で、俺は切なくため息を漏らす。
翡翠があんな風に自分のために自らを犠牲にしたことも、俺は今こうして時間がたっても思い出すと胸が締め付けられて痛んでいた。一体、どんな気持ちだったのだろう――。すごく痛かっただろうし、辛い選択だっただろう……。
そう俺が思った時だった――。突然頭の中に声が浮かんで来て、俺ははっとした。

『ミグ――レティはこうなることを…知っていたのかもしれない』
――何を言っても何の意味もないことなど、わかっていた。

……え？

『――相変わらずひとりで背負おうとするヤツだと、思わないか？』
――ひとりで背負わせずに、力になってやりたかった。

……何だ？　これ……口にしてる言葉とその裏側の真意？

『でも、あいつはこうでもしなければ俺達を助けられないと、ああしたんだぜ？　…ほんと、馬鹿だよな…ほんと…っ――』

――――！

あ……これ……アイツの声だ――。
それにミグっていうのは、翡翠と同じ顔をした美少年――しかも陸に転生したヤツの名前だ。
ひょっとしてこれ……ミグとリュシファーが死後に話した言葉――！？
な――何だこれ……涙が……止まらない……辛い……っ。

『あのぅ、泣いているので声をかけずらかったのですが……願い事は何でしょう？』

「！！」
あ……翡翠――……！？
そして俺ははっとして顔を上げたがそこにはただ月が浮かんでいるだけである。
それでも頭の中で聞こえる声は、俺のマンションのバルコニーで翡翠に聞いた話と同じ流れのやり取りだった。

アイツの思考が全て手に取るようにわかり、俺ははっと気付いた――。

あ……これ過去の記憶だ――。アイツの記憶……？

俺はバルコニーでひとり立ち尽くしていた。

そして俺は思考する中で、ふと夢の中のアイツの声を思い出していた――。

――お前に、俺の意志を託そう――

つづく。

31　見え始める記憶

俺は倒れていたらしい――。
目を開けると心配そうな翡翠の顔があり、その後ろには窓からの日の光。
「大丈夫か？」
もうすっかり朝らしく俺は飛び起きて翡翠に時間を聞いた。
――まだ5時半だったらしい。
「なんだ。よかった――って、あ……れ？　ここ俺の部屋？」
そう言って見渡した俺は、いつものマンションの部屋の寝室にいたようだ。
東条家の寝室、異世界の翡翠の部屋といい、最近ずっと上層界の部屋に見慣れていたせいか『ここは狭い』と言った東条先輩や翡翠の言葉が理解できた気がした。俺の『普通』と翡翠や東条先輩の『普通』は明らかに違っていたのだ。
しかし俺は頭を振って『俺の部屋は悪くない方だ』と自分に言い聞かせた。
区切っている扉を横に開け広げれば、そこは寝室六畳と居間八畳の十四畳の部屋の出来上がりだし、狭いながらも落ち着くじゃないか。築年数だってそんなに悪くないし、それに駅からもそんなに遠くない。一応オートロックだしっ……と脳裏で言い訳をしている自分がとても虚しくなり、俺はため息を吐いた。
「――ぼ、ぼーっとしてるけど……やっぱりまだ具合が悪いのではないか？　目を覚ましたらいないしバルコニーで倒れてて、心配したんだぞ」
と翡翠が俺の顔を覗きこんで言ったので、俺ははっとして微笑んだ。
「ごめん……心配かけた。もう平気だ」
「――ほんとに……？」
翡翠はまだ心配らしくそう聞いて来たので俺は起き上がって翡翠

を抱きしめた。
「何なら証拠をみせようか？」
「え？　証拠？」
「……わかれよ。そのくらい」
とそう言った俺の言葉にやっと何の事かと気付いた翡翠は、慌てて
ばっと壁に背がつくまで俺から離れて後退した。
しかも、その表情は怯えたように戸惑いを見せていたので俺は内
心ものすごくダメージを受けた。
「そ、そんなに逃げなくてもいいだろう……冗談だって」
――もちろん、それは半分冗談ではなかった。
だがやはりほとんど無理矢理してしまったのがいけなかったのだ
ろう――。
……ちょっと怖かったのかもしれない。
翡翠はぎこちなく微笑んでそっぽを向いて言った。
「あ、いやごめん。何やら身の危険を察知したので……つい」
「そ……そう」
と言いながらも俺は凹んでいた。
……はぅ……誠実さのかけらもないな――俺。

朝食を食べ、シャワーに入って翡翠と大学へ向かう。
今日の翡翠は髪をコテでゆるく巻いたようにくるくると髪を整え
て、最近覚えたと言って今日はマスカラとアイラインをしていた。
いつもより一段と可愛いのだが――となれば、勿論大学は危険区域
だ。
というわけで俺は翡翠を全ての講義に付き合わせたが、つまらな
いらしく勿論机にうつ伏せて眠っている。
「……翡翠ちゃん、ずっと寝てるなぁ～」
戸塚がそう俺に話しかけると、翡翠がうつ伏せたままで言った。
「――眠いんだもん。心理学なんて別に興味ないし」
「そう？　結構面白いこともたまにやるぜ？」

と戸塚が言ったので翡翠はゆっくりと顔をあげた。
しかしそこで戸塚も俺もぎょっとした。
寝ていたせいか翡翠の片方の目のアイラインが目の下に滲んでいたのだった。
「……翡翠、鏡見た方がいいぞ……はは」
「え？」
翡翠は不思議そうな表情でポケットから手鏡を出すと、『あぁぁっ！』と少し大きい声で驚いていた。
教室にいる生徒が振り返るので翡翠は慌ててそっぽを向いて、鏡を見ながら目の下のアイラインを直している。
「――こら、授業中に大きな声でお前は……」
「あはは……直った？」
翡翠がそう言って顔を見せて来たので呆れたように微笑んで頷いた。
「この授業の先生は怖いんだから、追い出されるぞ？」
「――ははは」
と翡翠が笑った後にびくっと顔を強張らせている。そしてその視線は俺の後ろに向けられていたので、俺は振り返った。
「――わかっているじゃないか。そのようにして貰おうか。前の席のお前も」
という講師小崎の声と姿に俺は愕然とした。気付かなかったが俺の後ろにいたのだ。
あう……。
――というわけで翡翠のせいで教室を追い出された俺と翡翠と戸塚の三人は、仕方がないので学食へと向かった。
どうせさっきの心理学の授業が終わったら昼時だ。
「……ご、ごめん」
翡翠は申し訳なさそうに俺と戸塚をちらっと上目遣いで見る。
わざとやっているのではないだろうか……これでは怒る気半減だ。
「――まぁいいじゃんか。半分以上授業は出たから欠席にはなんな

いだろうし。翡翠ちゃん何かジュースでも買って来てあげるよ。何飲む？」
「え？　うーん。ミルクティー」
「戸塚、俺のもついでに頼む。コーラ」
俺はそう言って戸塚に二人分の二百四十円を渡したが、戸塚は百二十円返してきた。
怪訝そうな表情で戸塚を見ると翡翠のは奢ってくれるらしい。
――なるほど。
どうせなら保護者の俺のも奢って欲しい気持ちだったが、まぁいいかと戸塚が自販機まで走っていくのを見送った。
ため息を吐いて席に着いて俺は翡翠に言った。
「ミルクティーばっかだなぁ」
と――。
はっとして翡翠は俯いて小さく呟いた。
「……だって、こっちにはないんだもん」
こっちにはない飲み物？
俺は少し考えてみてふと頭に浮かんだ言葉にはっとした。

『――ほら。のど渇いただろう』

――知っていたのか？　私が赤の実のジュースが好きだと。

『……いや、いつもマリアさんに頼んでいたなと思っただけだ』
（そんなことはとっくに知っていたさ……。し、しかし、まるでチェックでもしていたみたいで……少し照れるな……いや、断じて違う。よく飲んでると城にいれば目に入ってもしまう……参ったな……言い訳のようだ）

――――……

あ――！

こ、これ……！？

つづく。

32　大学にて2

――――……

俺はずっと『赤の実』について考えていた――。

赤い実――。赤い色をした果物というのは意外と少ない気がする。

――りんご、苺、さくらんぼ、ざくろ……。

そしてその中でジュースとして売られていないものが翡翠の言う『赤の実』だと思うのだが、よく見かけるのはりんごだけだ。苺もかろうじて『いちご牛乳』があるが果汁１００％ジュースとしては売られていない。

ざくろジュース、さくらんぼジュース……どこかで見た事はある気がするが微妙な線である。

となると候補で一番可能性が高いのは、苺――だろうか……。

そういえば翡翠、近所のラーメン屋で苺をサービスに貰った時すっごく喜んで食べていたっけ。

あっ！　忘れてた。そういえば『赤の実』って言ってた！！

何で俺忘れてたんだ。そんな大事なことを――。

『赤の実？　苺だぞ？　まぁ、赤いけど……まぁいいか』

と俺は言ったことを思い出したのだった。

その時――赤の実についての考察を終了させた俺の耳に飛び込んできた戸塚の問題発言に俺はコーラを吹き出しそうになった。

「――だからな？　翡翠ちゃんはＭなんじゃないかなぁって話」

「と、戸塚ッ！　お前は一体何の話をしているんだっ」

「え？　あぁ、心理学の話だよ。翡翠ちゃん可愛いからＭじゃないかって話」

「だ、だからっ何故そんな話をっ」

さらに声を荒げて俺が聞いたその質問に戸塚は、講師小崎が以前授業で話した面白心理学だと言った。

あぁ、なんだと思って俺はため息を吐いたがあとあと面倒な事に

なると思い戸塚を止めた。
――世の中の女性には美人と不細工がいる。
実は美人はMが多く、不細工の方がSという統計があるらしい。
美人は普段からちやほやとされているのに、ベッドの上でまでちやほやなどされるより逆に苛められたいという心理になるらしい。
そして不細工はといえば、普段あまり持てはやされることのないうっぷんを晴らすかのように相手を苛めたいという心理になるらしいという――。

あくまでも統計上らしいが時々小崎はそういう実生活に役に立つような小話を混ぜて、結構興味をそそる話もしてくれるため意外と楽しく、俺はこの授業を選択して良かったと思っていた。
その統計に当て嵌め、また実体験に基づいて言うと翡翠は――。
おっとつい想像してしまった……。
そこから更に妄想しそうになった俺は頭を振って正気に戻そうとしていたところ、翡翠が怪訝そうな顔で戸塚に聞いている。
「ところで――Mだとか Sって何？」
あ――そこからか。お前は……。
何も知らないんだなぁ……。リュシファーはどうしていたんだ……。
なんとなく思っていたが翡翠はものすごく『世間知らず』だと思う――。
でもそれは異世界から来たからというだけではないと俺は思っていた。――そう。翡翠は異世界のとある城に住むお姫様だったんだ。当たり前か――と俺は結論を出した。
いや――待てよ？　ってことは、翡翠はアイツが初めての男ということか。
戸塚の説明を聞いて翡翠は顔を真っ赤にしているところを見ると、アイツも色々と思い返しているようだ。
俺の方をちらちらと見ながら目を逸らして逃げ出したそうな顔を

している。
――翡翠って本当に顔に良く出るからわかりやすいというか何と言うか……。
そして、この場合――。
「え……あっ！　お、お前らまさか――」
ほら来た。こういう事件を巻き起こすんだ。
俺は戸塚にため息を吐くと首を横に振って言った。
「何を言っているんだ。従兄弟とそんなことあるわけないだろうが。だから翡翠には過激すぎるからそういう話はやめとけって言ったんだよ」
「あ……悪い。心理学で面白い話と言えばそれが第一に話題も広がるかと……」
という戸塚に『それはお前の好奇心が広がってるんだろ』というとぎこちなく戸塚は微笑んだ。
翡翠を見ると頭はそれでいっぱいといった様子でミルクティーを飲んで心を落ち着けている。
子供扱いしたと怒るよりも衝撃の方が強かったのか、困惑した表情で何も言わない。
やれやれ――。

昼食の時間になり翡翠は徐々に話すようになったものの、それは無理をしている様子である。
まだ少しぎこちない笑みを浮かべたり、俺と目が合うと恥ずかしそうにぱっと目を逸らし気味なのだ――。
そういうところだけは可愛らしくもあるが、つい意地悪してやりたくなる衝動にかられる俺はそれを抑え、戸塚と他愛もない話をして少し翡翠を放って置くことにした。
昼食が終わると翡翠は言った。
「あ、私ちょっと疲れたから屋上にでもいる。お、終わったら電話してくれ」

「え――あ、あぁ……あんまりうろちょろするなよ？」
「わっわかってる。じゃ、じゃあなっ」
完全に動揺している――何というか……それは戸塚のせいだ。
翡翠がいない授業は何かはかどらない。『何やってるかなぁ』とか『うろちょろして狙われたりしないだろうか』だとか『また誰かに告られたりするんじゃないだろうか』とかそんなことばかり考えてしまうからだ。
それでもちゃんと授業を聞いてはいるが。つい窓の外を見てぼーっとしてしまうのだ。
外は晴れているというのに気温は寒く、暖房の温度が低めなのか教室内も少し冷えている。
下校する生徒達の姿もちらほらと見られ、羨ましくそれを見ていた俺の目にその時ふと止まった人物がいた。
そしてそれは知っている人物によく似ていた。もしその人物だとしたら疑問が湧いて出てくるのだが――と俺はそう思いその人物にメールをしてみることにした。

件名：お前今どこにいる？
本文：今授業中だからメールで。
―藍人―

送ってから歩いて来るその人物を目で追っていると、やはりポケットから携帯を出して見ているので間違いない。
――陸……！
何でお前が大学にっ……！
件名：お前の大学。
本文：別にお前には用はない。

翡翠に用があって来た。
翡翠も一緒？

―陸―

く……相変わらず可愛くないヤツ……。
俺はため息を吐きながらも仕方がないので翡翠の居場所を教えてやることにした。

――――。

つづく。

33　意志

翡翠と陸――二人は少し大学の外に出かけると陸が俺にメールを寄こしてきた。
おまけにこの文面の最後に『あっかんべー』のマークがついていることが俺の神経を逆撫でした。
あームカつく。
翡翠――俺の中で最重要危険人物だぞ……陸は。
異世界じゃ双子の兄弟かもしれないが、俺が『レティシア』がリュシファーのもので、『翡翠』は俺のものだと思っているのと同様――陸も『レティシア』とは双子の兄弟かもしれないが、『翡翠』は別に兄弟でも何でもないと思っているに違いないと俺は思う。
となると二人っきりにさせるのはどうかと俺は思うが現在二人っきりとなっているのだ。

件名：（件名なし）
本文：一応連絡しとくけど、今
お前のマンション。
翡翠に連れて来て貰った。
―陸―

「！」
ぐはっ……。俺は既に握っていた拳をさらに握り締めた。
俺の家に上がりこんでいると報告してきたのは褒めてやろう。しかし、何てまた俺の家に――。
まさか俺の家で良からぬことでも……あぁぁ～何だか物凄く嫌な予感が巡って授業に集中出来ない……。
授業が終わったら速攻帰らなければいけないと俺はそう思った。
しかし、この授業の後にはもう一つ講義があり、すぐに帰れない俺は苛々としながら授業を受けていた。

二つの講義をなんとか受け終わり、急いで自分のマンションの部屋に戻った俺は少し拍子抜けした。
「お……お前らは子供か」
そう言った俺の目に飛び込んできたのは陸と翡翠がごろごろとしながらテレビゲームをしている姿だった。
「――おかえり～。あっ！　駄目だ！！　それは私が取ろうとしたのにぃっ」
「ははは、あぁおかえり藍人～」
どうやらこの二人に変な心配をしたのが間違いだったのだろうか――夢中である。
翡翠が『赤いおじさんと緑のおじさんのゲーム』と呼ぶこのゲームをする二人の姿は、異世界の立場通り仲のいい双子の兄弟といった感じがした。そして妙にほのぼのとしている。
俺は怒りを抑えて仕方がないのでとりあえず座るとため息混じりに陸に言った。
「陸……お前何しに来たんだ？」
「ちょっと聞きたいことがあっただけでそろそろ帰ろうと思ったけど、お前が帰って欲しそうだからやっぱ泊まる～」
「！？」
陸はそう言ってにっこりと微笑んだ。
何てヤツだ――。
「リク今日泊まるの？　あれ？　学校は？」
翡翠がいい事を言ったと思ったが俺は気付いた。
十一月二十三日、明日は祝日だということに――。
「休みだ。こっちでは勤労感謝の日っていう皆お休みしていい日があるの」
「あぁ、そういや前にもあったなぁ。シュウブンの日とかブンカの日とか」
「そうそう、それそれ」
俺は翡翠も楽しそうだし、何の反論も出来ずに承諾するしかなか

った。
そして翡翠と陸は何だか本当に兄弟みたいにずっとゲームをやっては俺に叱られたり、何だか手のかかる妹と弟が出来たみたいな気分になって俺は台所で微笑んだ。
微笑ましい――とは思うが、さっきからずっと聞いていれば東条先輩の言う通り馬は合うらしい。
飽きずによくもずっと喋っていられるもんだなと俺は思った。
しかし陸が翡翠を狙っているは確かだろうな――。
「陸、コレ持って行ってくれ」
「はーい」
「翡翠、お前は風呂のお湯そろそろ止めて来てくれ」
「はーい」
うんうんと俺は頷いて手伝いをさせていた。
夕食が終わり風呂も交替交替で入るということで、翡翠が先に風呂に向かってからのことだった。
「――なぁ、藍人……翡翠のことなんだけど」
「ん？」
俺は何を陸が言うのか物凄く気になりながらも平静を装って聞いた。
陸は視線を逸らさずに真っ直ぐに俺を見据えて言った。
「夢で誰かが言ったんだ。『お前はアイツの力になってやれる』って――」
「！」
な、何！？　り、陸も夢を――？
俺はどんなヤツだったかと聞いた。
「眩しくてよく顔はわからなかったが、『俺はお前。お前は俺。アイツに伝えてくれ――“なんとかなるから泣くな”』ってさ。それ伝えたら翡翠泣いちゃってさ――。慰めるの大変だった。お前いつもよく慰めて来たもんだな……」
「り、陸――それって……異世界のミグという翡翠の双子の兄では

……！？」
陸は『多分』と言って頷いた。そして、やはりリュシファーと同じように『俺の意志を託すから』と言ったという。
陸に俺も同じような夢を見たことを話すと、陸はため息を吐いた。
「でさ、俺だんだんと多分異世界のミグの記憶がわかって来てさ……。きっと俺は何か翡翠に普通じゃないものを抱くのもそのせいかなって思い始めたよ。アイツも待ってたんだ――翡翠がこうして俺らの前に現れるのをさ……」
百二十年もの間――。根本的なものがわからないから何ともいえないが、きっと俺達の中に転生した翡翠の大切な者たちも翡翠が探していただけではなくて、翡翠を待っていたというのか？
一体どうなっているんだ。俺達の中で眠っている異世界の住人は『意志を託す』と俺や陸に言った――。
それがどういう意味なのか――。
しかし、その意志は『守ってやりたい』ということで、その意志を俺達に託したということは『守ってやって欲しい』という願い……。
！！
そ、そうか――！
“――翡翠を支えて、守って欲しい。自分達にはそれが出来ないから――！”
「陸！　きっと俺たちに翡翠をよろしく頼むと言っているんだ。アイツらは翡翠を守ってやって欲しいと、そう願っているんだ」
「！」
やっと少し謎だった夢でのリュシファーの言った言葉の意味がわかった気がする――。
翡翠の傍にいてやれない――今、俺達に託すしかない何か事情があるに違いない。

そして追っ手はあれ以来来ていないものの、一体何なのか――。
やはり全ては翡翠しか知らないのだろう――。

俺と陸は初めて意志を疎通する様に頷いたのだった。

つづく。

34　赤の実

翡翠に全てを明かして欲しい気持ちは陸も俺も同じ――。
しかし、理由などなくとも何故かものすごく翡翠の助けになってやりたいという気持ちになるというのは、異世界で翡翠がよく知るリュシファーやミグが俺達に転生しているからなのだろうか。
いや――陸も俺も自分の意志でもそう願っていると思う。
シャワーから出て来た翡翠は冷凍庫のアイスを探すが『ない』と大騒ぎする。
俺は苦笑して後で買ってきてやるとなだめたのだが不満そうに頬を膨らませている。
そんな平和な日常は表向き。その裏には何かとんでもないことが潜んでいるのをわかっていながら、俺達は知らないフリをする。いつまで――なんて事を思う反面、知らないまま平和に過ごせたらと思う俺は理不尽なことを言っているのかもしれない。
そして――俺には怖れもあった。
翡翠は――、俺達は――、一体いつまで一緒にいられるのだろう……。
それが怖いと感じていたこと――しかし受け入れなくてはいけないことというのも知っていた。

「――翡翠」
と俺が言った言葉に翡翠はびくっとして怯えたような表情をした。
あ……昼間の戸塚のせいでまだ少し警戒しているのかと俺はため息を吐いた。
「アイスじゃなくてもっといいデザートがあるぞ？」
俺はそう言って夕食前に一度スーパーへと向かって買って来たデザートを翡翠の前に出した。
それは勿論、『苺』。ヘタを取って洗って冷蔵庫に入れておいた

のだ。
「！」
翡翠は驚愕の表情で俺を見た後に顔を輝かせた。
予想通り――。
「赤の実ーっ」
翡翠はそう言って微笑んだ。
赤の実とはやはり苺のことで、ラーメン屋さんで見た時と同じ表情で喜んでいた。
とはいっても俺の家にジューサーはないので『赤の実のジュース』というのは作ってやれないことを詫びると、翡翠の顔色が変わる。そして食べようとした動きを止めたのだった。
あ――ヤバイ。口が滑った。
「――アイト……何で赤の実のジュースのこと、知ってるの？」
翡翠は苺の入った器をテーブルの上にコト……と置いた。
真っ直ぐに影を見せて俺を深刻な表情で見つめる翡翠は、瞳を潤ませ切なそうな表情へと変え始めている。
「あ……ごめん。さっき陸から聞いた……お前も聞いただろう？それ、俺もなんだ。アイツの記憶が見え始めている」
「！」
――翡翠が泣くのはわかりきっていた。
ついでだから俺はリュシファーが伝えてくれと言った言葉を翡翠に言った。
どうせもう泣いている。いつ言っても泣くのはわかりきっているのなら、今言ったところで同じだと俺は思ったのだ。
『傍にいてやれなくてすまない』『全てわかっているから心配するな』と――。
しかし、その言葉を聞いて翡翠は泣くかと思ったのだが涙をぴたっと止めた。そして、無理に微笑んでみせるとこう言った。

「――ごめん。少し一人になりたい。しばらく放っておいて欲しい」とそう言って翡翠はバルコニーの扉を開けて出ると扉を閉める。少しカーテンをこっそりと開けた陸がすぐに閉めて俯くと首を横に振った。バルコニーに出た翡翠はひとりで泣きたいのだろう。

とりあえず風呂に俺は入ることにした。上がったら泣き止んでいるといいのだが――。

「どうしたらいいかなぁ～……」

聞くべきか聞かないべきか――もちろん聞くべきじゃない。

きっと翡翠とリュシファーの間にある深い絆は、俺や陸が入り込んで欲しくないものなのだろう。

ひとり泣く翡翠。何を想い、何を哀しんでいるのか。

教えてくれよ――リュシファー……。一体俺はどうすればいいんだ……。

風呂から出ると翡翠はまだバルコニーにいるようだ。大好きな赤の実はテーブルに置かれたまま――ていうかっ！

陸はっ！？　……まさかとそう思い俺はこっそりとカーテンを開けると、ちゃっかりと陸が翡翠の隣にいる――。

おまけに陸は自分の胸に抱き寄せて翡翠の頭を撫でているではないか。

「ぐ……」

や、やられた――。こんなことなら陸を先に風呂に行かせればよかったと俺は後悔した。

油断の隙も何もないと思ったが、アイツにしかかけてやれない言葉もあるのかもしれないとそう思った。

仕方がないので俺は二人をしばらく放って置くことにした。

テーブルの上に置かれたままの赤の実を冷蔵庫に入れた。

そして、風呂が冷めてしまっても知るか――とそう思った。

――――……

――……

『――い、一応礼を言おう。ありがとう』

――なんて可愛くないんだ。『一応』とはまた余計な言葉を……まぁいいか。『一応』感謝はしているみたいだ。

レティシア＝ミールティア・オーグロンド・リーディア・マールシェスタ・オブ・エンブレミア……これが噂の美しい姫君か――。だが性格は本当に素直じゃないと言うか何と言うか問題児だろうなぁ……。

まさか俺が新しい教育係だということも知らないのだろうな……。当たり前か。挨拶はこれからだ――。やれやれ……さて、どうしようかな――。

ん？　宰相大臣レイモンド様だろうか……。

しかし、何故ドアをノックされているのに返事をしない……？

少し戸惑っているような……？

「ど、どうぞっ」

あぁ、なんだ。やっと返事をしたか――。

さぁて、この姫の驚く顔が見物といったところだな――。

――――……

……。

俺ははっとして目を開けると、そこは暗闇で何も見えなかった。

まだ――夢の……中？

そう思っていた俺の目に飛び込んできたどこかの薔薇の庭園に佇む翡翠の姿。俺はそこに駆け寄ろうと思ったがその足を陸が掴んでいる。

『陸ッ！　離せっ！　邪魔するな』

俺は陸にそう言った。しかし、陸は呆れたようにため息を吐いた。

『――邪魔してるのは、どっち？』

『え――……？』

陸がもう一度よく見てみろと目で合図した翡翠の隣には、いつの間にか過去の惨劇で見たリュシファーの姿があった。
リュシファーが翡翠の髪に青い薔薇の花を髪飾りの様につけた。
驚きながらも翡翠はそれを手で触れて少し微笑んだ。
……翡翠……あんな風に笑うんだ。アイツの前だと……。
俺はその後照れくさそうにそっぽを向く翡翠の姿を見て、本当は嬉しいくせに――と思った。
リュシファーは呆れたように微笑んでいる。でも、その光景は幸せそうだった。
『――わかっただろう？　お前は所詮二番なんだよ。そして、二番から抗おうともしない臆病者だろう？』
『！！』
お、俺はっ……別にッ……べつ……に――……
陸の言葉にはっとした俺は、何か言い返そうとしたが言葉が出て来なかった――。
そしてただ眺めていた二人は、そっとどちらからともなくキスをした。
何故かその場所が勝手にベッドに変わって、リュシファーが何とも自然に押し倒しながら翡翠を脱がしていく様を見た時、俺は胸が締め付けられるような気分になった。
こ、こんなの見たくない――！！
きつく目を閉じた俺に聞こえてきた翡翠の悩ましい声に――俺は耳を塞いで叫んでいた。
『やめてくれーーーーっ！』と――。
「――あぁぁっ！　あ……あぁ、アイトっ……だだ……大丈……夫？」
という怯えたような翡翠の声に俺は目を開けた。
俺はどうやら床で眠っていたようで、毛布がかけてあった。
おまけに部屋の電気が消されていて、テレビの明かりしかない部

屋で翡翠と陸は二人ともぴったりとくっついて怯えた表情で俺を見ている。テレビの画面を見ると翡翠と陸はホラーゲームをしていたらしい。
シャキンシャキンというハサミを持った男が追っかけて来るゲーム――。
話を聞くと、雰囲気を出すために電気を消したらしいが、俺の『やめてくれーーー』という寝言に本気で怖かったようである。
「ぷっ……あはははっ……そりゃ、悪かった。怖がりだな……そんなゲームごときで」
「べ、別に怖くないっ！　ただ、このゲームはいつシャキンシャキンってハサミ持ったヤツが出てくるかわからなくてドキドキしながらやっていたのに、お前が突然大声で叫ぶからちょっと驚いただけだっ」
「そうだ。何の夢見てたんだよ……驚かすなっ」
翡翠と陸は何だか可愛らしい弟や妹に思えるほどに一緒に俺に文句を言った。
俺は詫びながらも風呂からあがって翡翠たちを待っている間に横になって、気がついたら寝ていたことを思い出した。
「あぁぁ、陸っそこは逃げても見つかる場所だっっ！！」
「あーーやべぇっ……今出てもあいつ外にいるよな……」
「もーっ……ぎゃぁぁぁっ来たっ！　来た！！！」
翡翠と陸はどうやらゲームに夢中らしい。
ま、明日は休みだ――と思って俺もゲームを見ていた。
ふとそう言えば冷やしておいた赤の実はと思って冷蔵庫を開けたが、どうやら見当たらない。
「――翡翠、苺……食べた？」
と俺が聞いた質問に、翡翠はぎくっとしてぎこちない笑みを浮かべて言った。
「あぁえと……さっき、陸と一緒に食べちゃった。すまぬ……」
「あ、お前の分くらい残しておこうと思ったんだけど、つい……全

部」
陸も同じくぎこちない笑みを浮かべている。
「そうか、別にそんな罰の悪そうな顔しなくても、俺は怒ってないよ……」
ほっと安堵している様子の二人を見て俺は改めて思った。
二人揃うと本当に仕方ない妹と弟が出来たみたいに思えると――。
俺は呆れながらも何だか可笑しくなって微笑んでいたのだった。
つづく。

35　再び現われし者

陸と翡翠の二人が進めたハサミ男が出てくるゲームは一度バッドエンドとなった。

「宮部、どうやら今夜は徹夜になりそうだな――陸と翡翠は夢中だ。あ、その二階の書庫が怪しいと思うぞ」

――そう。

何故か東条先輩が帰りがかったとか言ってこの俺の八畳六畳１ＬＤＫの――狭いマンションに寄ったまま、送迎の運転手を帰らせて一緒にゲームを見ている。

というか、何だかんだ言ってこのお方もゲームに参加している。

「あはは……あとで、コンビニでも行きましょう。夜中起きてると腹が減りますからね」

「ああ、そうだな――」

俺は当の昔にクリアしたことがあるのでどう進めれば良いかなど、知っていたがあまりに夢中な二人に教えては面白くないだろうと思い口を挟まなかった。こんな昔のゲームに翡翠と陸は、何故か途中でセーブデータをさかのぼってやり直しては『クリアするまで今日は止めないっ！』などと言って張り切っている。

そして――。区切りのいい所でやって来たコンビニ――。

翡翠は『赤の実がない』と言っているが、ちゃっかりアイスからチョコレートからオニギリやら色々と――。

陸はここぞとばかりに、ポテチやカップヌ～ドルにコーラにデザートにシュークリーム、それに何故か雑誌まで好き放題カゴに入れ、東条先輩はワインやおつまみなどを色々と買い込み、飲む気満々である。

東条先輩と翡翠と陸の三人のその様子を苦笑しながら見ていた俺は、何だか三人は息が合っている気がした。

そういえば三人は異世界で兄弟なのだ――それも頷ける話だと思った。
さらにどいつもこいつも金持ち揃い――。金銭感覚という物が皆三者同様にずれていることにも苦笑していた。
もちろんこの会計は東条先輩が払ったが、コンビニで何故一万円を超える買い物をするのか理解できない――。
俺はどうしようもないどこかの兄弟たちを抱えた気分だった。
……何が悲しくてゲーム徹夜のためにお菓子などを買い込んでいるのか。
俺はため息を吐いてコンビニを出た。
外は寒く昼間の雨は止んでいるものの、冷えた空気に包まれていた。
「もう夜中の十二時半か……なんかあのゲームやってたせいかちょっと不気味だなぁ～」
陸が言った言葉に、俺は呆れて微笑んだ。
「所詮ゲームだ、ゲーム。魔物だとかハサミ男だとか出てくるのはゲームやアニメの世界だけなの」
と俺が言った一言に翡翠が立ち止まった。
あ……マズイ。翡翠の世界では魔物とかいるに違いない――。
翡翠に詫びようと思ったが翡翠はため息を吐きながら言った。
「そうだな……こっちは、本当平和だな……」
あ……俺はまた何でそんなこと言っちゃったんだ。
翡翠は物悲しげな表情で俯きぎみに歩みを進め出した。――と、その時だった。
「――みぃ～つけた……」
という声とともに振り返った俺が見たのは、黒いマントをひらひらと揺らしながら地から僅かに身を浮かせている女の姿だった。その女はフード付きの黒いマントをさっと後ろへ脱いでみせるとくくっと微笑んだ。
「！？」

おそらく以前、翡翠が酔っ払って寝ていた時に俺を襲ってきたヤツと同一人物だと俺は翡翠に言った。
しかし翡翠はそっけなく頷くとそいつの方へと向き直ってため息を混じりに言った。
「――やはり……お前達が動き始めていたのか……お前一人なのか？」
え――！？　翡翠……こいつを知っている……！？
翡翠とそいつの睨み合い。翡翠の質問にそいつはくくっと微笑んだ後に言った。
「――さぁ？　でもここにお前を発見したという情報は既に流してある。……あの時の様に素敵な騎士が三人いるのねぇ……何の力も持たないこちらの世界の人間じゃあただの足手まといでしょうけどねぇ～……くくっ」
不審人物のその言葉に翡翠は『くっ……』と悔しそうに下唇を？んでソイツを睨んでいる。
俺は不審人物の言った言葉が気になっていた。が、それを陸が呟くように疑問を投げかけた。
「あ……あの時の三人って一体、何……なんだ！？」
不審人物は陸の方を向いて、無理に口元を吊り上げてあざ笑うかの様にくくっと微笑む。
「あら、何も聞いていないのかしら……。地上の女神――レティシアを守るために一緒に消された三人……大事な大事なお兄様たちと？　あぁ、あと恋人だったっけ～？　あっははははっ」
「！？」
な、リュシファーと翡翠の兄エルトと双子の兄のミグのことだ――。
消された……！？　翡翠を守るために――？
俺は翡翠を愕然とした表情で見た。目の前で大事な者達を奪われた哀しみ――きっと辛かっただろうと俺は思った。
翡翠は目を見開いて愕然と不審人物を凝視していた。

「――無様だったわねぇ～……助けるつもりが足手まといになって、盾にされるなんて――」
翡翠の怒りにその言葉が触れたのか、翡翠は不審人物に向けて叫ぶように言った。
「やめろ！！　それ以上、言ったら……ッ！！」
次第に泣いてしまいそうな声を発した翡翠は、肩を小刻みに震わせていた。
誰が見ても明らかに動揺している翡翠のその姿を見て、俺は不審人物に向かって怒りをぶつけた。
「……おい！！　何が何だかわからないが、何故そんな事を！！」
「ア、アイト――やめろっ……！」
翡翠が俺を止めたが、構わずに俺はさらに聞いた。
「その三人がどれだけ翡翠にとって大切な存在だったのか……お前たちが何をしたか！　わかってるのかっ！！」
と言った俺の言葉に不審人物は一瞬目を丸くしてきょとんとしていた。
変な間が空いた事に俺は戸惑っていると、不審人物の目があざ笑うように細められた。
「――確かにきっかけを作ったのは私達……。似た様なものかもしれないわね。私達はレティシアが欲しいだけ。そして大人しくさせるために私達の仲間は、レティシアを守るために立ちはだかった三人を捕まえて盾としただけ。案の定、その効果は絶大だったわ。何も手を出せなくなっちゃったみたいで、ふふっ……我らの元へと自ら捕まろうとしたというのに、そのレティシアの前にやって来た天界の聖騎士隊――！　そいつらが我らの仲間諸共三人も殲滅させて邪魔をしたってわけ」
「なっ……！　なん……だって……！？」
「――だから、直接手を下したのは私たちじゃないの。ごめんなさいねぇ？　あはははははっ……」
不審人物は高々と楽しそうにそう笑っている中、俺は衝撃的事実

の前に呆然と立ち尽くしていた。
翡翠を見ると下唇を？んだまま俯いて握った手に力が入っている。
『――まだ、時期ではない……』
そう言った時の翡翠の顔が目に浮かぶ。いつもどこか辛そうな表情でそれ以上聞いてはいけない気になっていた。
それが――、俺らが転生した理由だと――。翡翠はきっと、話すか迷いながらも言えずにいたに違いない。
ずっと一人で苦しんできた筈だ……。
「あ、そうそう。付け加えなくてはね～。何を血迷ったか我らを殲滅させようとする聖騎士隊に歯向かったんだっけ？　精鋭の戦闘部隊相手に三人を殺さないでって泣きながら、……ふふっ……とっても面白かったと聞いているわ。『もういい。守ってやれなくてすまない』って最期に言ったんだっけ？」
「！」
駄目だ――それはきっとリュシファーの言い残した言葉……！
精神的に追い込んでいく様な闇の神族の言葉に、俺は怒りが湧き上がって来ていた。
「くそ……ッ！」
俺は何でもいいから立ち向かおうとしたところ、視界に翡翠がその場にがくっと膝をつくのが見え、慌てて翡翠の傍にしゃがみ込んだ。
「――ひ、翡翠っ！！」
と俺が声をかけるも翡翠は袖で目を覆ったまま泣き崩れている。俺はきっと不審人物を睨みつけた。
「おやおや、手を下したのは私たちではないのだから――そんな怖い目で睨まないで頂きたいわねぇ……。その時の私達の目的は――レティシアの捕獲――ってだけだったのよ？　殺すつもりなどなかったのに、勝手に手を下したのは聖騎士隊だろう？　絶望の淵へ早く来ればいいのに……ふふっ……」
「――お前！　最低……だなっ……何が楽しいんだ！」

東条先輩が言った一言に、不審人物は相変わらず余裕な表情で微笑んだ。
「何が楽しい？　楽しいに決まっているじゃない。私達は人の幸せなど望まない――絶望を望む『闇の神族』……。そして、地上の女神のレティシアさえ手に入れば光の神族達をも支配できる力を得られるわ。そうして全世界を絶望の海に沈めてやるのだ。くくく……あっははは……！」
「な、何故翡翠の力を……？」
俺は呟いて不審人物を睨みつけ続けた。
「……さて、そろそろあの時の様になりたくないでしょう？　怖いわよねぇ……？　来て貰おうかしら？　地上の女神レティシア」
その言葉とともにこちらへと歩みを進めようとする闇の神族から、俺は翡翠を守ろうと翡翠の前に立った。
「あら、勇敢なのねぇ……この子を守りたいの？　残念――雑魚に用はないの……ふふっ」
と微笑んで呆れたように立ち止まった時だった。
突然、視界を真っ白な光が奪った。
「「――そうはさせない……！」」
「！？」
眩しいその白い光の中で聞こえた二つの声――。
光がおさまり、ゆっくりと目を開けた俺の目に飛び込んできた白い翼の神々しい男女二名――。
「とっ特務――執行部……！！！」
翡翠のその呟きに俺は何が起こっているのかわからなくて困惑していた。
そしてその特務執行部と翡翠に呼ばれた男女と闇の神族を交互に見ていた。
一体、特務執行部とは何者なのか――。白い翼があるということは翡翠と同じ女神であるのか――。
全ては謎に包まれていたが、今俺に出来るのは精神的に弱った様

子の翡翠を抱きしめる事くらいだった。
そして状況を見守る俺達の目の前で、特務執行部の二人は下がるように後ろ手に合図した。
「何故っ……お前達がここに！！　く……絶望に暮れた地上の女神だけならともかく……。仕方ない――さらばだ」
一瞬にして闇の神族は紫色の炎に包まれて消えようとした。特務執行部の二人はそこに何か光の槍の様な物をそこに放つ――。しかし、それは空を通過してシュッと消えた。闇の神族が高々と笑う声が辺りに響き渡った。
「ち……逃げられたか……」
「えぇ……でも、レティシアは無事よ。大丈夫」
二人はそう言いながらこちらへと歩みを進めて来て言った。
「レティシア……久しぶり。無事で良かっ――」
「――アイト、行くぞ」
翡翠は男性の方が言い終わるのも待たずに立ち上がって歩みを進め出した。
「お、おいコラ！　た、助けて貰ったのに礼も言わずにっ！！」
その明らかな無視行為を叱った俺の言葉さえも無視した翡翠が、一人で歩いていく。
陸が走って行って何かを説得しているが、翡翠はちっとも歩みを止めなかった。
そのまま翡翠と陸は歩いて行くので俺はため息を吐いた。
「――やはり……恨んでいるか……いや、いいんだ。仕方がない……」
「えぇ……わかってたわ」
特務執行部の二人は顔を曇らせながらため息を吐いた。
夜中とはいえ誰かにこの羽根を持つ二人の姿を見られでもしたら大変なので、ひとまず二人に白い羽根を隠してもらうと俺の部屋に連れて行くことにした。

事情を詳しく知りたい――。
翡翠の事も心配だったが、きっとああいう時は何を話しても翡翠は口を聞いてはくれないだろうとそう思った。
一体――この二人と翡翠と闇の神族達――。何が起きて翡翠は異世界へと来ているのか……。
俺たちが転生した理由とは――。少しだけ先ほどの会話で想像もしていたが、詳しく知れる時がついに来たのかもしれない――。
俺はごくっと息を呑んで二人を連れて部屋へと向かっていたのだった。

つづく。

36　事情

部屋に戻るなり、陸が居間に座ってゲームをしているのが目に止まった。
翡翠はと聞いたが、陸はため息を吐いて『……トイレ』と答えた。
ひとまず居間の部屋に皆座り、買って来た物を冷蔵庫に入れながら人数分のコップとお茶などをテーブルに並べた。
誰も口を聞かずに、陸のプレイするハサミ男のゲームの音だけがそこに聞こえているだけ。
待てど待てど戻ってこない翡翠を俺は呼びに廊下へと歩き出した。
「あ……アイトさん」
女の神族の方が首を横に振って呼びに行くのを制止していたが、そういう訳にもいかないと思い俺はトイレの前に立ち、二回、ノックをしてみた。しかし、しん、と静まり返ったまま翡翠は返事をしない――。
声をかけてみたがやはり何も返事をしない。ひょっとしていないのではとドアノブに手をかけたが、勿論鍵は閉まっていてそこに翡翠がいることは確かの様だ。
「……いつまでそうして篭っているつもりだ？」
「……あいつらが帰るまで」
やっぱり……。
俺の中で苛々とした何かが込み上げてくるのを感じながら、それを抑えて言った。
「翡翠……？　助けてもらっておいて礼の一つも言わないつもりか？」
「うるさいっ！」
「あのな……ちゃんと、話をしろと言っているんだ」
「――嫌だ。あんなヤツらと話すことなど何もない！」
「――あ、あんな奴らって……同じ神族だろう？」

トイレのドア前のこのやり取りはもう何を言っても無駄な気がしていた。
おまけに翡翠は変わらずに話したくないの一点張り。
ブチッ……と俺の中で何かがぶち切れた音が聞こえた気がする。
「翡翠……黙って聞いていればうるさいだとか話したくないだとか、いい加減にしろっ！　出て来いっ」
「ぜーーーったいに嫌だっっ！！」
子供か……っ。
こういう時は本っ当に可愛くないヤツだ――。
あぁ～くそガキと相手してるみたいで俺は苛々として扉を蹴った。
「み――、宮部……。少し放っておいてやればいい。そこまで話したくないというのなら仕方あるまい。我々だけで話を聞けばよい」
東条先輩の言葉に俺は苛々としながらもため息を吐いた。そして顔を上げて睨みつけた神族の二人がぎょっとした表情をした。
俺は二人を睨みつけるように見たまま居間へ戻るとテーブルを叩いて言った。
「――じゃ、聞かせて貰いましょうか？　じっくりと――！　説明していただきたいんですが！」
ぎこちなく微笑みを浮かべた神族二人は、まずため息を吐いて名を名乗った。
短髪で白金色の髪の毛と赤く燃えるような瞳をしている神族の男の名は『セレス』。
同じ白金色の左だけ前下がりに長い髪で、燃えるような赤い瞳の女の名は『リスタル』。
この二人は『天界の聖騎士隊』と呼ばれる精鋭の戦闘部隊で、正式には『特務執行部隊』という所属らしい。
「翡翠は何か特別な役職でも――？」
と聞いた陸の質問に二人は顔を見合わせてため息を吐いた。
「レティシアは、その頃『女神見習い』でした。言ってみれば天使ですね。ただ他の天使と扱いは違う特別な存在でした。何故なら…

…、全神族の中で神の次かもしくは同等の強い力を秘めていたから……」

何の役職にも属さないのに、全神族の中で神の次か同等の強い力を秘めている！？

リスタルが更に説明を付け加えた。

「――通常、女神、天使、神族だとかいうのは、神族同士の交わりによって生まれます。しかし、レティシアは神が特別に自らの血を与えて神族とした者だからです。――神が自らの血を与えるという事自体が異例。その行為により、レティシアは神の娘となった」

「神の……娘……！」

皆が驚いてリスタルの言葉に唖然としている中、セレスが天界についても説明を加えた。

――神族には光と闇が存在するらしい。

翡翠やセレス達は、勿論光の神族であり人々が幸せである様に願う神族達で、一方闇の神族は破滅や絶望を望む神族――。

――神は、人々に平等に『幸福』と『不幸』を与えていた。

幸せの量も皆、均等に振り分けられていて、それはもちろん誰かが笑う時、別の誰かが涙を流し、涙を流した者にも幸せがやがてやって来る、人々は皆、その様に幸せの順番を待つ……。

これが神や神族、天使達によりもたらされている物だということは、人々は知りません。

その全てを司り、見守る者――それが神族の務め。

時に、我々は奇跡を起こすこともあります。

良い行いをした者に対して、時々神様は奇跡を起こす。

何やらそれだけではなく、ある一定の条件を満たした者のみその奇跡を垣間見れるそうだが、セレス達にもその条件の詳しい内容はわからないのだと言った。

奇跡は時々人間達に与える神の褒美――。

その奇跡をレティシアに与えた神が行った行為が、この災いをもたらしてしまった。
「人間を神族にするなどという神のご判断自体、誤りだったのですよ……」
セレスはそう言って顔を曇らせた。
判断の誤り……？
「闇の神族は元々は一つの神族――。光も闇もなかった。しかし、人々の哀しみを見守って来た神族が闇に侵されてしまい、いつしか神族は二つに分かれていったのです。ただ、闇の神族には『神』という存在がない……」
セレスがそこまで言った時だった。
トイレのドアが開いた。
「翡翠……っ！」
俺は声をかけたが、翡翠は黙って玄関のドアを開けて出て行ったのを皆唖然として見ていた。
「――リスタル……頼む」
セレスが静かにそうリスタルに言うと、リスタルは立ち上がった。
「御意……」
リスタルはその場にスッと消えた。
翡翠を追えと命じた様だった。
セレスはため息を吐いて額に手を当てた。
「セレス……。さっきの話から予測すると、翡翠は闇の神族達に神という存在を作る手立てになっていると、そういうことなのか？」
セレスに声をかけたのは東条先輩だ。東条先輩が言った事は俺も思った事だった。
「はい。……しかし、もう既にレティシアは捕らわれてしまっているのです」
「え！？　そ、それはどういう事だ……？　だって翡翠は今もトイレから出て行ったりしているじゃないか」
陸が驚きのあまり、ゲームを一時停止してやっと閉ざしていた口

を開いた様だ。
ゲームをやっていて聞いていないかと思ったが、しっかり聞いていた様だ。
「えぇ、あれはレティシアの意志。心と本体と別に存在している状態なのですよ。レティシアはその意志だけで実体化して存在しているという訳です。実は……」
翡翠はリュシファー達三人が盾とされた時、何も手を出せなくなり絶望感に打ちひしがれていた。
その中で三人を助けるために自らの身を闇の神族達に差し出そうとした。
しかし、そうなっては困ると助太刀にやって来たセレス達特務執行部の者達は、最早仕方がないとリュシファー達の犠牲を払ってでも翡翠を守るために三人に手をかけようとした。
勿論、翡翠はそれを阻止しようと先程の闇の神族が言ったみたいにセレス達に歯向かった。
リュシファー達を守りたかったという気持ちは解かるが、あの場で正しい事などなかった。
セレス達自身にとってもあれは辛い任務だったというが、隙を見て翡翠を気絶させた後で事に及んだ。
目が覚めた翡翠は、絶望と怒りに任せて闇の神族達の元に一人で勝手に乗り込んで行った。
「レティシアは半分闇に捕らわれかけていた……その力で攻撃しようとも、闇の神族達には効かない。レティシアがそれに気付いた時には遅かった。総攻撃に遭い……捕らわれてしまった。しかし、レティシアは咄嗟に自分の身から意識を抜けました。そして実体化させたのです。本体が捕らわれようとも、中身がないのではただの人形と一緒。現在、目を覚まさないその身体は死んだように眠っている状態。これでは神の創造など出来ないと、闇の神族達はレティシアの意識を手にするため、躍起になって探しています。――鬼ごっことかくれんぼの始まりでした……」

俺も陸も東条先輩も、皆唖然としていた。
鬼ごっこ、かくれんぼ……。
「でも、ついに、見つかっちゃったって事……？」
セレスは静かに微笑んで頷く。
「レティシアのその行動は、世界に時間をもたらした。神様に転生した三人は異世界に転生する予定だと聞いていたレティシアが、まさかその異世界へ出向くとは思ってもみませんでしたが。しかし、異世界ともなれば闇の神族達も、そう簡単にレティシアを見つける事も出来ないだろうということで、神様は放っておけと仰いました。ただ、監視だけはつけろという事で、我々はずっと密かにレティシアを監視してきました。まぁ助ける羽目になったのは、さっきのが初めてですが……。闇の神族達がついにこの世界を発見したのも、最近なので……。ですが――」
セレスは、一度静かに口を閉ざした。
その間、言葉を選ぶように何やら考えている様だった。
そして、戸惑いながら紡ぐ言葉――。それは俺達に更なる衝撃をもたらした。
「――百年以上、経ちました。レティシアは勿論、知っている事だと思いますが……その、長い間その身から意識を抜けてはいられないのですよ。どちらかがいずれ崩壊してしまう。それに、身体なしに使う力はその自身の衰退を早める……事と……なり、その……おそらくレティシアは、大分、その時が近くなって来ていると……」
そ、そんな――……
俺は心を引き裂かれる様な思いだった――。
つづく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7880l/

†続†城はきらびやかな牢獄だ―それぞれの異世界―

2010年10月10日16時24分発行